

# ハガ遺跡

- 備前国府関連遺跡の発掘調査報告 -

2004年3月

岡山市教育委員会

題簽 水内昌康先生

『ハガ遺跡－備前国府関連遺跡の発掘調査報告－』正誤表

頁	行	誤	正
卷頭図版2	2. E区空撮	(堀家純一氏撮影)	(堀家純一氏撮影)
例言	3	文化財団保護主事	文化財保護主事
3	3	プラントオバート	プラントオバール
(同上)	37	拠点集落が形成されたいた	拠点集落が形成されていた
12	11	(岡山市文化財保護審議会会長)	(岡山市文化財保護審議会会長)
23	9	黒色土器 <u>碗</u> (7)	黒色土器 <u>碗</u> (7)
25	図18	H1	K1
28	14~18	<u>H1</u> ~H6	K1~K6
(同上)	図25	<u>H1</u> ~H6	K1~K6
33	図34 土層説明	⑤灰白色微砂含茶褐色微砂塊	⑥灰白色微砂含茶褐色微砂塊
38	4	検出レベルが10ほど	検出レベルが10cmほど
56	5	(図64 溝11・13中央部)	(図65 溝11・13中央部)
58	22	備前焼 <u>碗</u> (119)が出土しており、この <u>碗</u> は	備前焼碗(119)が出土しており、この <u>碗</u> は
62	5	獸足(図78-D9)	獸足(図78-D9)
89	15	遺構の全長は1.95mで、	遺構の全長は3.68mで、
(同上)	16・17	焼成部は長さ1.2m、幅0.4mの	焼成部は長さ2.0m、幅1.1mの
97	出土土器観察表 119	備前焼 <u>碗</u>	備前焼碗
126	12・13	羊頭硯を用いた～。つまり、羊頭硯を	羊形硯を用いた～。つまり、羊形硯を
138	注(12)	『六波羅蜜寺民族資料～』	『六波羅蜜寺民俗資料～』
151	注(9)	乗岡 実「林信夫蒐集の～」	乗岡 実「林信男蒐集の～」
図版2	1. A~D区 空撮	(堀家純一氏撮影)	(堀家純一氏撮影)



3. 三彩多口瓶



1. 羊形硯



2. 「寺寺」墨書土器



4. 獣形把手

卷頭図版 2



1. E 区南側  
断面 (手前は溝26)



2. E 区空撮  
(掘家純一氏撮影)

# 八が遺跡

- 備前国府関連遺跡の発掘調査報告 -

2004年3月

岡山市教育委員会

# 序

広大な沖積平野である岡山平野と瀬戸内海が南にあり、北には中国山地へと続く吉備高原の端部が接するといった岡山市域の地勢は、まさに岡山県全体を凝縮したものといえます。

また、全長が350mの造山古墳をはじめ、地方では極めて稀な壇上積基壇を備えた賞田廃寺など、質的にも優れた遺跡が多数存在します。これは、かつて「大和」と匹敵する勢力を誇っていたとされる「吉備」の中心地であったことを示しています。

ハガ遺跡は高島小学校のプール建設に伴って発掘調査されました。当地は古代の備前国における中心となる備前国府の推定地内に位置することから、国府関連の遺構や遺物の出土することが予想されました。調査の結果、正方位に合わせた規則的な配置をする建物や、それを区画する溝、三彩陶器や羊形硯などの出土の稀な高級品が出土しました。備前国府に関連する遺跡であると考えられ、実態の明らかではない備前国府を研究するための大変貴重な資料になるものと期待されます。

本報告書は、以上の調査成果をまとめたものです。岡山地方の地方史研究の基本資料として多くの方々にご活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査の実施および報告書の作成にあたっては、発掘調査対策委員会の諸先生方のご指導と、発掘参加者のご支援をいただきました。記して厚く御礼申し上げます。

平成16年3月31日

岡山市教育委員会

教育長 玉光源爾

## 例　　言

1. この報告書は、岡山市教育委員会文化課・文化財課が平成11年1月5日から平成11年5月7日と、平成12年6月26日から平成13年4月26日にかけて岡山市立高島小学校の敷地擁壁工事およびプール新築工事事業に伴う、岡山市国府市場167-1他の発掘調査に関するものである。
2. この報告書の作成は岡山市教育委員会が実施し、その執筆は草原が担当した。
3. 遺物の実測およびトレースは木村真紀、山元尚子がおこなった。遺物の写真撮影は岡山市教育委員会文化財団保護主事西田和浩がおこなった。編集は草原がおこなった。
4. この報告書に用いている高度値は標準海拔高度である。
5. この報告書に用いている方位は磁北である。
6. 図2は国土交通省国土地理院発行の2万5千分の1地形図「岡山北部」と「岡山南部」を複製し、加筆したものである。
7. 遺物、実測図、写真等は岡山市教育委員会にて保管している。

# 目 次

第Ⅰ章 位置と環境	1
第Ⅱ章 調査の経過	11
第Ⅲ章 遺構と遺物	
I 古代1(8世紀～12世紀)	18
II 古代2(7世紀)	68
III 中世	76
IV 近世	94
V 出土土器観察表	95
第Ⅳ章 結語	
I 古代1(8世紀～12世紀)	100
1 遺構の構成	100
2 出土瓦について	109
3 ハガI期の土器群について	116
4 陶硯について	121
5 瓦塔・泥塔について	127
6 備前国府との関係	138
7 ハガ遺跡の性格	153
II 古代2(7世紀)	154
III 中世	155
IV 近世	157

# 挿入図目次

図1 ハガ遺跡の位置	1	図46 建物4(内郭南門)実測図	42
図2 周辺遺跡分布図	2	図47 柱穴列1実測図	43
図3 加東・旭西平野前方後円(?)墳壇成系統図	4	図48 柱穴列2実測図	43
図4 操山21号墳採集埴輪	6	図49 柱穴列3実測図	44
図5 調査区位概図	14	図50 柱穴列4実測図	44
図6 調査区区域図	15	図51 柱穴列7実測図	44
図7 調査区断面図	16	図52 柱穴列5実測図	45
図8 P20実測図	18	図53 柱穴列6実測図	45
図9 古代1遺構面全体図	19・20	図54 柱穴列8実測図	45
図10 P20出土遺物	21・22	図55 柱穴列9実測図	46
図11 P20断面図	23	図56 柱穴列10実測図	47
図12 P20上面出土遺物	23	図57 P265実測図	47
図13 P114断面図	23	図58 P265出土遺物	47
図14 P114出土遺物	23	図59 P289実測図	48
図15 P109実測図	24	図60 P449実測図	48
図16 炉状遺構1実測図	24	図61 P383実測図	48
図17 P28実測図	25	図62 井戸1実測図	49
図18 P28出土遺物	25	図63 井戸1出土遺物	49
図19 漢3断面図	25	図64 集石壙1火葬場	49
図20 漢3実測図	26	図65 古代漢断面図(1)	50
図21 B区拡張区上層遺構実測図	27	図66 I期内郭溝出土遺物(1)	51
図22 B区拡張区下層遺構実測図	27	図67 I期内郭溝出土遺物(2)	52
図23 B区拡張区北壁断面図	28	図68 I期内郭溝出土遺物(3)	53
図24 P34実測図	28	図69 I期内郭溝出土遺物(4)	54
図25 築地遺構出土遺物	28	図70 I期内郭溝出土遺物(5)	55
図26 P31断面図	29	図71 I期内郭溝出土遺物(6)	55
図27 P31出土遺物	29	図72 I期内郭溝出土遺物(7)	55
図28 C-1区拡張区1上層遺構実測図	29	図73 古代漢断面図(2)	57
図29 C-1区拡張区1下層遺構実測図	30	図74 II期内郭溝出土遺物	57
図30 C-1区拡張区1断面図	30	図75 II期内郭溝上面出土遺物	58
図31 C-1区拡張区2上層遺構実測図	31・32	図76 III期内郭溝出土遺物	59
図32 C-1区拡張区2下層遺構実測図	31・32	図77 III期内郭溝上面出土遺物	59
図33 C-1区拡張区2東壁断面図	31・32	図78 包含層出土遺物(1)	60
図34 C-2区遺構実測図	33	図79 包含層出土遺物(2)	61
図35 C-3区遺構実測図	34	図80 包含層出土遺物(3)	61
図36 C-1区北半遺構実測図	34	図81 包含層出土遺物(4)	61
図37 C-1区北半出土遺物	35	図82 包含層出土遺物(5)	61
図38 漢13実測図	35	図83 包含層出土遺物(6)	61
図39 D区西側遺構実測図	36	図84 包含層出土遺物(7)	61
図40 漢13出土遺物	37	図85 包含層出土遺物(8)	61
図41 建物1実測図	38	図86 包含層(A~D区)出土遺物(9)	62
図42 建物1閑道出土遺物	38	図87 包含層(E区)出土遺物(10)	63
図43 E区古代1遺構図	39	図88 包含層(E区)出土遺物(11)	64
図44 建物2実測図	40	図89 包含層出土遺物(12)(瓦塔)	65
図45 建物3実測図	41	図90 包含層出土遺物(13)(瓦塔)	66

図91	包含層出土遺物(14)(泥塔) ······	67	図137	土器焼成窯出土遺物(1) ······	91
図92	A区古代2遺構実測図 ······	69	図138	土器焼成窯出土遺物(2) ······	91
図93	P94実測図 ······	70	図139	E区中世遺構面構断面図 ······	92
図94	P94出土遺物 ······	70	図140	水田層出土遺物(1) ······	92
図95	柱穴列11実測図 ······	70	図141	水田層出土遺物(2) ······	92
図96	E区古代2遺構面 ······	71	図142	水田層出土遺物(3) ······	92
図97	柱穴列12実測図 ······	72	図143	水田層出土遺物(4) ······	92
図98	柱穴列14実測図 ······	72	図144	E区近世遺構面 ······	93
図99	柱穴列13実測図 ······	72	図145	溝20断面図 ······	94
図100	柱穴列15実測図 ······	72	図146	近世水田層出土遺物 ······	94
図101	柱穴列16実測図 ······	73	図147	旭川東岸平野北半の微地形 ······	101
図102	柱穴列17実測図 ······	73	図148	旭川東岸平野北半水利系統図 ······	104
図103	墓1実測図 ······	74	図149	ハガ遺跡の区画の範囲 ······	105
図104	墓1出土遺物 ······	74	図150	ハガ遺跡古代造構変遷図 ······	107
図105	P527実測図 ······	75	図151	ハガ遺跡出土軒瓦分類 ······	110
図106	古代2遺構面構断面図 ······	75	図152	ハガ遺跡出土平瓦分類 ······	111
図107	溝22出土遺物 ······	76	図153	平瓦類型別の布目糸数による破片数割合 ······	112
図108	塚状遺構出土遺物 ······	76	図154	平瓦類型別破片数割合 ······	112
図109	E区中世遺構面 ······	77	図155	ハガ遺跡出土上軒瓦の類例 ······	113
図110	塚状遺構実測図 ······	78	図156	ハガI期の須恵器 ······	116
図111	P71と塚状遺構 ······	78	図157	ハガI期の土師器 ······	118
図112	P71実測図 ······	79	図158	杯C法量表 ······	119
図113	P71出土遺物 ······	80	図159	杯Cの変遷 ······	119
図114	溝1出土遺物(1) ······	81	図160	長頸壺の変遷 ······	120
図115	溝1山上遺物(2) ······	82	図161	岡山県下出土の踏脚磚 ······	122
図116	溝1出土遺物(3) ······	83	図162	偏中南部平城宮式系軒瓦分布 ······	123
図117	溝1出土遺物(4) ······	83	図163	羊形甕集成 ······	125
図118	溝1尖測図 ······	83	図164	千本庵寺出土瓦塔 ······	128
図119	建物5実測図 ······	84	図165	I類とII類の屋根の変遷 ······	128
図120	建物6実測図 ······	85	図166	I類の瓦塔推定復元 ······	129
図121	柱穴列18実測図 ······	85	図167	瓦塔類似土質品 ······	130
図122	柱穴列19実測図 ······	85	図168	泥塔集成(1) ······	132
図123	柱穴列20実測図 ······	85	図169	泥塔集成(2) ······	133
図124	柱穴列21実測図 ······	86	図170	豐楽寺出土泥塔 ······	134
図125	柱穴列22尖測図 ······	86	図171	愛形文軒平瓦 ······	135
図126	柱穴列23実測図 ······	87	図172	泥塔・軒平瓦分布 ······	136
図127	P172実測図 ······	87	図173	平城宮式系軒瓦分布 ······	140
図128	P174実測図 ······	88	図174	川原寺式系軒丸瓦分布 ······	143
図129	P174出土遺物 ······	88	図175	備前国中枢地出土平城宮式系軒瓦 ······	144
図130	P181実測図 ······	88	図176	備前国中枢の備前国府系軒瓦の分布 ······	145
図131	P190実測図 ······	88	図177	津高北庵寺系瓦 ······	147
図132	墓2実測図 ······	88	図178	条里地割及び小字名分布 ······	148
図133	炉1-2実測図 ······	89	図179	成光寺付近の土壤の範囲 ······	149
図134	炉3実測図 ······	89	図180	国府城パターンの模式図 ······	149
図135	炉4実測図 ······	89	図181	国府からみた国分寺(僧寺)の位置 ······	153
図136	土器焼成窯実測図 ······	90			

# 図版目次

## 巻頭図版 1

1. 羊形硯
2. 「寺寺」墨書き器
3. 三彩多口瓶
4. 鼎形把手

## 巻頭図版 2

1. E 区南側断面(手前は焼26)
2. E 区空堀(堀家純一氏撮影)

## 図版 1

遺跡周辺空堀(昭和48年)

## 図版 2

1. A～D 区空堀(堀家純一氏撮影)
2. A 区古代遺構面
3. A 区 P20 遺物出土状況

## 図版 3

1. A 区塚状遺構
2. A 区塚状遺構盛り土断面
3. A 区 P71 断面

## 図版 4

1. B 区拡張区築地検出状況
2. B 区拡張区築地上面軒丸瓦出土状況
3. C-1 区拡張区 1 下層遺構

## 図版 5

1. C-1 区拡張区 2・C-2 区外郭溝掘り上がり
2. C 区溝15(外郭溝)
3. D 区建物 1

## 図版 6

1. A 区溝 1
2. E 区南側断面
3. E 区西側古代 1 遺構面

## 図版 7

1. E 区中央古代 1 遺構面
2. E 区東側古代 1 遺構面
3. E 区建物 2

## 図版 8

1. E 区建物 3
2. E 区建物 4
3. E 区 P265

## 図版 9

1. E 区内郭溝西側遺物出土状況
2. E 区内郭溝西側遺物出土状況
3. E 区内郭溝西側遺物出土状況(拡大)

## 図版 10

1. E 区内郭溝西側遺物出土状況(拡大)
2. E 区内郭溝西側掘り上がり
3. E 区内郭溝西側コーナー付近

## 図版 11

1. E 区内郭溝土馬出土状況
2. E 区内郭溝(焼11)軒丸瓦出土状況
3. E 区墓 1

## 図版 12

1. E 区墓 1 土器出土状況
2. E 区西側中世遺構面
3. E 区東側中世遺構面

## 図版 13

1. E 区土器焼成窯検出状況
2. E 区上部器焼成窯埋土断面
3. E 区土器焼成窯

## 図版 14

1. E 区土器焼成窯
2. E 区土器焼成窯壁部断ち割り
3. E 区炉 1・2

## 図版 15

I 期内郭溝

## 図版 16

I 期内郭溝

## 図版 17

I・II 期内郭溝

## 図版 18

P265・包含層

## 図版 19

軒瓦

## 図版 20

瓦塔

## 図版 21

陶罐・泥塔

## 図版 22

土馬

# 第Ⅰ章 位置と環境

ハガ遺跡は岡山平野の中央部に位置する。そこは高梁川・吉井川とともに岡山三大河川の1つである旭川の東岸平野の北半になる。岡山平野の水田耕地は現在25000haであるが、そのうち20000haまでが近世を中心開拓によって生み出されたものである。岡山市街地の南から児島湖にかけて広がる広大な水田地帯は、中世までは瀬戸内海へ続く内海で、古代には「吉備穴海」と呼ばれていた。今でこそ旭川両岸平野は、岡山平野北半のやや山寄りに近い印象を受けるが、近世以前はまさに岡山平野の中心の1つであった。周囲の水田地割りには正方位の条里地割りが残り、古くから開発がおこなわれたことがうかがえる。ハガ遺跡のある岡山市国府市場は市町村制施行に伴い明治22年に近隣の7村が合併して高島村となり、昭和29年には岡山市へ合併した。国府市場西半は市営住宅の建設や県道原藤原線の開通などが契機となり、早くから宅地化が進み、旧来の景観は激変している。国府市場東半は田園景観が残っているものの、岡山市街地に接するという地理的条件からも、徐々に宅地化の波が迫ってきている。

中国地方を山陽と山陰の南北に分ける中国山地は標高1000~1100mの山々がそびえ、その南には標高300~600mの典型的な隆起準平原である吉備高原が沿岸部の平野まで続く。旭川は中国山地西南部に源を発する大河川で、吉備高原を割り、標高257mの吉備高原の南端である竜の口山と、標高499.5mの金山山塊の間から平野部へ流れ出る。支流である新庄川、備中川、宇甘川などを合わせての流域面積は約1600km<sup>2</sup>である。現在は岡山市江並で児島湾に流入しているが、かつては繩文海進により生じた内海である吉備穴海に注いでいた。繩文海進や沖積地の形成環境についての基礎データに関しては、岡山城三之曲輪の発掘調査<sup>(1)</sup>では繩文海進期の汀線を示すカキ礁の形成された波蝕台が確認され、岡山城二之丸跡や南方釜田遺跡の発掘調査では繩文海進期の浅海の海底にある生痕内で赤ホヤ火山灰(B.P. 6~6.54千年)や、さらにその下方で一次的な堆積とみられるAT火山灰(B.P. 2.1~2.23万年)が確認されている<sup>(2)</sup>。

旭川の両岸に広がる平野は、東岸を旭東平野、西岸を旭西平野と呼称されている。旭東平野は北端の竜の口山から南端の操山までで、南北3km、東西4kmの範囲である。旭西平野は北端のダイミ山、西端の矢坂山、南端の岡山市鹿田あたりの旧海岸線の南北5km、東西2.5kmの範囲である。両平野ともほぼ同じ広さではあるが、旭東平野の方が若干標高が高い傾向にあり、より扇状地的な地形を形成している。

旧石器時代の遺跡は少ないが、操山山塊からはナイフ型石器が採集されている<sup>(3)</sup>。平野部で遺跡が確認



図1 ハガ遺跡の位置



- |       |          |          |
|-------|----------|----------|
| ○ 散布地 | 黒点 ( ● ) | 古墳 ( ■ ) |
|-------|----------|----------|
- ① 朝寝鼻貝塚
  - ② 津島岡大遺跡
  - ③ 津島江道遺跡
  - ④ 津島遺跡
  - ⑤ 百間川沢田遺跡
  - ⑥ 南方遺跡群
  - ⑦ 百間川蒸気船跡
  - ⑧ 乙多見遺跡
  - ⑨ 赤田東遺跡
  - ⑩ 鹿田遺跡
  - ⑪ 都月坂2号墳丘墓
  - ⑫ 南国長遺跡
  - ⑬ 中井南・三反田遺跡
  - ⑭ 片山古墳
  - ⑮ 七つ丸古墳群
  - ⑯ 都月坂1号墳
  - ⑰ 津倉古墳
  - ⑱ 儀前車塚古墳
  - ⑲ 銅浜茶臼山古墳
  - ⑳ 楠山109号墳
  - ㉑ 楠山103号墳
  - ㉒ 山王山古墳
  - ㉓ 渋茶臼山古墳
  - ㉔ 金藏山古墳
  - ㉕ 一本松古墳
  - ㉖ 墓の本(おつか様)古墳
  - ㉗ 旗板台古墳
  - ㉘ 上の山古墳
  - ㉙ 楠山21号墳
  - ㉚ 上の山古墳
  - ㉛ 黃田庵寺
  - ㉜ 楢多庵寺
  - ㉝ 居都魔寺
  - ㉞ 網ノ浜廃寺
  - ㉟ 唐人冢古墳
  - ㉞ 沢田大冢古墳
  - ㉟ 倭前国府推定地
  - ㉞ 百間川原尾島遺跡
  - ㉟ 百間川米田遺跡
  - ㉞ 南古市堀遺跡
  - ㉞ ハガ遺跡
  - ㉟ 雄町遺跡
  - ㉞ 新道遺跡
  - ㉞ 岡山城

図2 周辺遺跡分布図

されるのは縄紋時代後期からで、旭東平野にある百間川沢田遺跡では多くの土器とともに炉床や貯蔵穴が認められ<sup>(4)</sup>、旭西平野にある津島岡大遺跡<sup>(5)</sup>でも同じ様相である。また旭西平野の北端、まだ平野が形成される以前の遺跡であるが、朝寝鼻貝塚からは前期の頃のプラントオバートが検出され<sup>(6)</sup>、コメ栽培の起源をめぐる新たな資料を提供している。ただ県南部の縄紋時代の遺跡の動向をみると、後期において遺跡数が増加する傾向があり、この点と生業活動との関係が注目される。かなり古くからコメ作りをおこなっていることを示す資料が提示されたことからも、コメ栽培の開始と水田稲作の開始は異なった歴史的意味があると考えられる。水田稲作は水田を開発し、維持することによって広域の集団関係を形成し、それが現代まで続く列島社会の基盤であることからも、縄紋時代のコメ栽培とは区別される。最も古い水田遺構は津島江道遺跡<sup>(7)</sup>で検出された微地形に即した小区画水田遺構である。出土した土器は突帯紋土器で、小型の石鋤も伴っている。水田耕作に石鋤が伴っている例としては、静岡県宮竹野跡遺跡<sup>(8)</sup>の小区画水田から出土した例があり、県南部の沖積地の遺跡からも石鋤が出土した例がいくつもあることから、石鋤で水田を耕作していた可能性は高い。ただ突帯紋期の集落遺跡の様相が明確でなく、弥生時代前期初頭のような拠点集落が出現していたかどうかについては今のところ明らかではない。

弥生時代前期初頭には旭西平野では津島遺跡<sup>(9)</sup>が、やや遅れて旭東平野では百間川沢田遺跡が形成される。津島遺跡は県下最古の拠点集落であり、出土した土器の成形技法から最古の遠賀式土器とする見方もある<sup>(10)</sup>。百間川沢田遺跡は東西85m、南北100mの環濠集落で内部には竪穴住居や木棺墓がある。環濠内縁部は遺構の認められない空白部分で、環濠埋土に内部から崩落した土層が認められることから、内側に土壘がめぐっていたことも推測される。やや時期は降る前期中葉から後葉の環濠集落が矢掛町清水谷遺跡<sup>(11)</sup>で明らかになっている。この環濠集落の内側では竪穴住居と小溝や柱穴が検出されているが、墓や土壘は認められない。完全にめぐらないものの柵列等の遮断施設はあったようである。今のところ県下では前期の環濠集落は2例だけであるが、両遺跡とも環濠集落といった範囲では共通するものの、その構造や時期はかなり個性があることがうかがわれる。前期の水田は、古くから指摘されていた津島遺跡の河道の肩部分に形成された湿田タイプと、微高地線辺あるいは微高地低位部の乾田・半乾田タイプの2者がある。現況では後者の水田例が多く、当時も主体であったと考えられる。津島江道遺跡の水田も後者の水田である。

弥生時代中期になると、旭西平野の中央には南方遺跡群<sup>(12)</sup>が形成される。前期の遺構や遺物が検出されていることから、前期の段階でも集落域であったが、中期中葉になると爆発的に遺構・遺物が認められるようになり、しかも径1~1.5kmの範囲の複数の微高地上が同じ様相となる。集落景観は各微高地を全面調査した例がなく細部にわたっては明確にできないが、断片的な調査例から、1つの微高地は居住城と墓域で構成されており、しかも微高地間には格差が認められないことから、構造的には微高地を1つの単位とする等質的な集落が集合していたという様相であったと考えられる。このような集落構造が、当地の中期における拠点集落の大まかな景観であったと推測される。南方遺跡の発掘調査では多量の土器や石器とともに極めて精巧な木製品が多数出土しており、当時の木工技術の高さをうかがい知ることができる。旭東平野でも百間川兼基遺跡<sup>(13)</sup>から大形掘立柱建物群、隣接する乙多見遺跡<sup>(14)</sup>からは河内産の土器が出土し、赤田東遺跡<sup>(15)</sup>からもまとまった遺構が検出されている。旭西平野と同様に拠点集落が形成されたいた可能性が高い。

中期になると、南方遺跡群は一部に遺構が認められる微高地があるものの、総体的には遺構や遺

物が認められなくなる。一方、津島遺跡や鹿田遺跡<sup>(16)</sup>など周辺に新たな集落が形成される。中期末には南方遺跡群は解体したと考えられる。旭東平野についても赤田遺跡などの新たな集落が認められることから、集落域などに変化があった可能性が高い。

弥生時代後期は、大小の遺跡が各所に認められる。岡山市域西端の足守川流域では特定集団墓・特定個人墓である墳丘墓の発達が顕著で、供獻に用いた壺・器台が大形化した特殊器台・壺を伴っているものもある。特殊器台・壺は出雲地域の首長墓からも出土しており、地域を越えた首長間の政治的交流に用いられている。ただし山間の集団墓からも出土する例もあり、それ自体が序列を明示していたわけではなさそうである。旭西平野でも墳長が約20m×19mの都月坂2号墳<sup>(17)</sup>があるものの、後の古墳時代前期初頭の前方後円(方)墳の数からすると少ない印象が強い。平野部の遺跡である備前国府推定地(南国長)遺跡<sup>(18)</sup>からは特殊器台・壺が出土した土壇(墓?)が検出されており、墳丘墓自体も平野部に存在していた可能性もあると思われる。時期は異なるが、備前国府推定地(南国長)遺跡の南側の平野部から、墳丘を削平された古墳群<sup>(19)</sup>も調査されている。

後期末になると広範囲で洪水砂に埋もれた水田が検出される。当時の水田システムをそのまま保存した極めて良好な遺構であるが、当時としては生産域の大半を失う社会的には壊滅的な大打撃であったと推測される。しかし、直後の古墳時代前期初頭には周囲の山塊に数多くの古墳が築かれており、この洪水との関係を指摘する考え方<sup>(20)</sup>もある。

古墳、とりわけ前期の前方後円(方)墳の築成の特徴を検討する上で、旭東・旭西平野は極めて良好な資料を提供している。平野を囲む山塊に古墳が位置していることから、それら古墳の築造母体が両平野部であり、1つの単位地域のなかの古墳と仮定できる。具体的な築成状況を見てみると、旭西平野では特殊器台形埴輪を伴うか、もしくは伴う時期である可能性のある前期初頭の前方後円墳は5基あり、それらの分布から3つのグループに分けられる。Aグループは墳長55

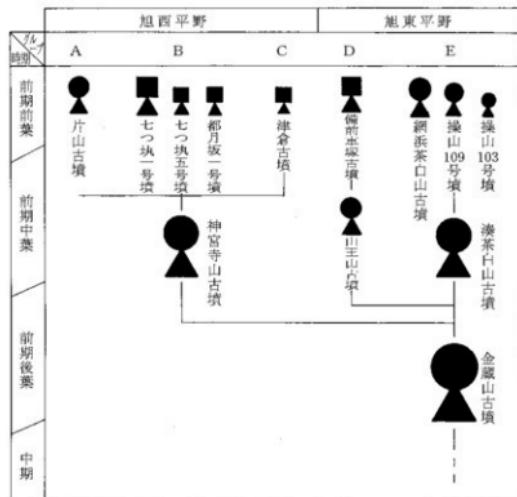


図3 旭東・旭西平野前方後円(方)墳築成系統図

mの前方後円墳の片山古墳である。Bグループは墳長45mの前方後方墳の七つ塹1号墳<sup>(21)</sup>、墳長25mの前方後方墳の七つ塹5号墳<sup>(22)</sup>、墳長33mの前方後方墳の都月坂1号墳<sup>(23)</sup>の3基である。Cグループは墳長33mの前方後方墳の津倉古墳である。旭東平野では2つのグループに分けられる。Dグ

ループは墳長48mの前方後方墳の備前車塚古墳<sup>(30)</sup>、Eグループは墳長92mの前方後円墳の網ノ浜茶臼山古墳<sup>(31)</sup>、墳長74mの前方後円墳の操山109号墳<sup>(32)</sup>、墳長34mの操山103号墳<sup>(33)</sup>である。

その後、A・Cグループは継続する前方後円(方)墳ではなく、Dグループも墳長68.5mの山王山古墳以降は見当たらない。山王山古墳は測量調査の結果、前期初頭の前方後円墳の特徴の1つである前方部が撥形に広い形態とされているが、採集されている埴輪は受口状の特徴はあるものの、文様が喪失した普通円筒埴輪や壺形埴輪である<sup>(34)</sup>。当地では、撥形の前方部は少し時期幅があることを示している。したがって、埴輪が採取されていないか、もしくは伴っていない可能性のある操山103号墳、津倉古墳、七つ塹5号墳、片山古墳などは若干時期が降る可能性もある。いずれにせよ、A・C・Dグループは前期初頭前後には前方後円(方)墳の築成はなくなる。Bグループには前期中葉になると墳長約150mの前方後円墳の神宮寺山古墳<sup>(35)</sup>、Eグループには墳長約120mの前方後円墳の湊茶臼山古墳<sup>(36)</sup>が築かれる。旭川両岸の複数のグループがそれぞれBとEのグループに集約され、全長100mを越える大型古墳が出現したと考えられる。その後、前期後葉になると、Bグループには前方後円墳はなくなり、Eグループのみが墳長165mの金蔵山古墳<sup>(37)</sup>を築く。ただし、中期初頭になるとどのグループも前方後円墳を築かない。つまり、前方後円(方)墳の系譜が途切れるのである。

参考までに、奈良県の大和盆地における古墳の築成状況を見てみたい。前期の前方後円(方)墳だけに限っても、数が膨大であり、詳細を把握するのは不可能に近いほど困難であるため、墳長200m前後を越える巨大古墳についてのみみてみたい。大和盆地ではA～Eの5グループが認められる。Aグループは盆地南東部で箸墓古墳→西殿塚古墳→行燈山古墳→渋谷向山古墳で、前期初頭から後葉まで縦起的に築かれる。Bグループは盆地南部で、桜井茶臼山古墳→メスリ山古墳が前期初頭から中葉まで築かれる。Cグループは前期中葉から盆地北部で五社神古墳→宝来山古墳が築かれ、中期以降にも築かれていく。Dグループは前期後葉に盆地南部の巣山古墳が築かれ、中期以降にも築かれていく。Eグループは前期後葉に盆地西部の鳥ノ山古墳が築かれ、中期以降にも築かれていく。△グループには墳長が100mを越える古墳がいくつもあり、渋谷向山古墳以降に位置づけられる古墳もあるかもしれないが、墳長200mを越える巨大墳の系譜は途切れたといえる。以上のように、それぞれのグループの古墳の築成動向はまちまちであり、基本的には各グループの集団関係を反映させていると考えられる。これは古墳の規模は異なるが、旭西・旭東平野の状況と共通すると考えられる。古墳の築成について、畿内中央からの規制が及んだという意見<sup>(38)</sup>や、築成状況の変動が列島規模で共通するといった意見<sup>(39)</sup>もあるが、旭西・旭東平野と大和盆地だけを見ても、個別的で不安定な築成をしていることが看取される。また前期から中期にかけての古墳の築成をみると、規模などの量以上の差が、後の畿内中央と呼ばれる地域と地方との間にあったとは思われないのである。いずれにせよ旭西・旭東平野は古墳時代を考えるための良好なフィールドといえる。

中期後半になると、旭西平野では墳長65mの前方後円墳の一本松古墳<sup>(40)</sup>、塚の本(おつか様)古墳<sup>(41)</sup>が築かれる。旭東平野では前方後円墳は築かれないが、一辺27mの旗振台古墳<sup>(42)</sup>に代表されるように、比較的規模の大きな方墳が築かれる。また金蔵山古墳の谷を挟んだ西側尾根上にある径20mほどの円墳である操山21号墳からは、川西編年<sup>(43)</sup>IV期と推定される埴輪片(図4)が採集されている。旭東平野北側の山裾部でも、もう少し小規模である上の山古墳<sup>(44)</sup>などがある。おそらく中期初

頭以降、20m前後規模の方墳や円墳が旭東平野における首長墓として複数築かれているのだとと思われる。一方こういった山塊上に築かれた古墳のほかに、平野部でも古墳群が形成されている。それは中井・三反田遺跡で一例、もしくは径12m前後の小墳が10基以上まとめて築かれている<sup>(39)</sup>。墳丘は削平されており周溝のみが残るが、埴輪は出土していない。古墳群の全貌は明らかではないが、山塊上の古墳に比べると規模も小さいものが主体で、埴輪も持っていないことから、平野部の古墳はより下位クラスの古墳であった公算が大きい。

古墳時代の集落は旭西平野では津島江道遺跡<sup>(40)</sup>、津島遺跡<sup>(41)</sup>、鹿田遺跡<sup>(42)</sup>、旭東平野では百間川原尾島遺跡<sup>(43)</sup>、同沢田遺跡<sup>(44)</sup>、同兼基

遺跡<sup>(45)</sup>、赤田東遺跡<sup>(46)</sup>などがある。いずれの集落遺跡も6世紀末までは竪穴住居が主体であるが、百間川兼基遺跡では5世紀の時期で、しかも規模の大きな総柱建物が棟方向を合わせて並んで検出された。竪穴住居もあるが、それらは総柱建物と重複しているものもあることから、竪穴住居と総柱建物は時期的に分離できる可能性が高い。そうすると総柱建物は倉庫群として独立して存在していたといえる。該期の規模の大きな倉庫群は大阪府法円坂遺跡や、和歌山县鳴滝遺跡などの例があり、百間川兼基遺跡の倉庫群は、以上の2遺跡ほどの規模はないものの、それに準ずるものといえる。付近に首長層の住宅があるのか、もしくは屯倉の前身となるような遺跡であるのかもしれない。原尾島遺跡では滑石製玉類の未製品が出土しており、5世紀後半から末に当地の集落の中には玉作りをおこなっているものがあったことを示している。また製鉄遺跡にしても、一本松古墳から鉄櫛や鉄錐などが副葬されていることから、中期段階でも存在していた可能性が高いが、今のところ集落遺跡からは検出されていない。おそらく中期は一本松古墳クラスの首長に直接に掌握されていたと思われる。6世紀後半になると製鉄関連の遺物や、遺構が認められる集落が多くなる。津島江道遺跡では鍛冶炉や鉄滓、鉄製品が出土している。遺跡背後にあるダイミ山を北へ越えた笹ヶ瀬川流域の小単位平野周辺の丘陵には、多数の後期古墳がある。大規模な製鍊遺跡<sup>(47)</sup>もみつかっており、付近の丘陵部では鉄滓も散布している。まだまだ多くの製鍊遺跡が埋没している可能性が高い。一方、笹ヶ瀬川流域の平野は面積も狭く、発掘調査によっても安定した平野とは言い難い<sup>(48)</sup>。数多くの後期古墳の母体となる平野とは考えにくいのである。おそらく旭西平野の墓域でもあったと考える方が妥当であろう。そして、鉄生産についても、笹ヶ瀬川流域で製鍊をおこない、旭西平野で鍛冶をおこなうといった地域的な分業システムも想定される。旭東平野では赤田東遺跡で6世紀後半から9世紀まで継続する集落が調査されており、竪穴住居から掘立柱建物へ6世紀末～7世紀初頭に変わることが確認された。県下では百間川原尾島遺跡、倉敷市矢部遺跡<sup>(49)</sup>で7世紀初頭の掘立柱建物で構成される集落が検出されており、少なくとも県南部における集落の一般的な様相であった可能性が高い。

飛鳥・奈良時代になると、旭東平野には賓田磨寺<sup>(50)</sup>・幡多磨寺<sup>(51)</sup>・居都磨寺・網ノ浜磨寺などの古

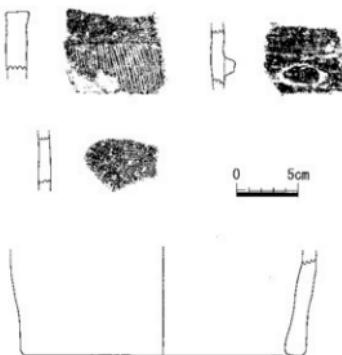


図4 操山21号墳採集埴輪  
(岡嶋隆司氏採集)

代寺院が集中する。一方、旭西平野には古代寺院は認められない。わずかに旭西平野に北接する笛ヶ瀬川流域で津高北廃寺<sup>(60)</sup>がある。笛ヶ瀬川流域は古代の津高郡で、旭西平野が三野郡であり郡域が異なっている。しかし『律高郷壳券』(774~777年)に津高郡の小領として、三野臣の名がみえることや、津高を冠した氏名の氏族が検出できることから、三野郡と津高郡は旭西平野を基盤とした古代豪族である三野氏の領域と考えられている<sup>(61)</sup>。したがって津高北廃寺も旭西平野の古代寺院といえる。とはいっても、旭東平野の寺院数と比べると劣勢は否めない。このような差は古墳時代後期から認められる。いわゆる巨石を用いた大形石室を構築している巨石墳は唐人塚古墳<sup>(62)</sup>や、沢田大塚古墳<sup>(63)</sup>など、旭東平野には認められるが、旭西平野ではなく、操山山塊や竜ノ口山塊には群集墳が形成されているものの、笛ヶ瀬川流域を含めた旭西平野でも群集墳まで古墳を集中して築いた古墳群は認められない。奈良時代になると、旭東平野を基盤とする古代豪族である上道氏が朝臣を下賜され、しかも上道朝臣斐太郎のように中央政界で官人化していくのは、そういう基盤が以前から形成されていたことを示している。三野氏は朝臣も下賜されていない。備前国府も旭東平野に想定されており、それも両平野を基盤とする勢力の状況を反映させているものと思われる。官衙遺跡は、旭西平野では津島江道遺跡で、奈良時代の総柱建物がまとまって検出されており、御野郡衙に伴う倉院である可能性も推測されている<sup>(64)</sup>。しかし、隣接する発掘調査区の成果と整合させてみても、それ程大規模ではない<sup>(65)</sup>。延暦一四年(795)に規定された郷倉に相当することも考えられる。旭東平野では「市」を墨書した土器が出土したり、総柱建物がまとまって検出された米田遺跡<sup>(66)</sup>が備前国府の国府津に推定され、雄町遺跡は方八町城の備前国府の南限に推測されている<sup>(67)</sup>。南古市場遺跡では、河道と掘立柱建物が検出され、河道中からは杯・皿などの土師器食膳具が多量に出土し、なかには越州窯産青磁の輪花皿も含まれており、賞田廃寺所用の軒平瓦も出土した。備前国府に関連する遺跡と考えられる<sup>(68)</sup>。このほか縁袖陶器や灰釉陶器は出土した遺跡もあるが、いずれも一般的な集落から出土しており、断片的な発掘では官衙であるかどうかを決めるには難しい。

平安時代以降も数多くの遺跡が旭西・旭東平野には形成されている。百間川米田遺跡<sup>(69)</sup>などは橋梁遺構、鹿田遺跡<sup>(70)</sup>や新道遺跡<sup>(71)</sup>では殿下渡傾である鹿田庄閑連の遺構や遺物が発掘調査されている。とくに、新道遺跡では方形木枠を用いた12世紀後半の井戸から木簡が3点出土している。そのうち1点には「○○御庄久延弁」と書かれている。これは莊園の年貢について書かれた文書木簡であり、莊園名については判読できないが、鹿田庄に関すると推測される。『大宮家文書』の中の正安二年(1300)の端裏書をもつ「備前国上道郡荒野莊領地図」には旭川の西岸に市や鹿田庄の文字が書かれている。市街地化されている旭川西岸には、新道遺跡と同様の遺跡がまだまだ埋没している可能性が高い。

戦国時代になると大・小の山城が築かれており、ハガ遺跡の近辺でも戦国末期の当地における激戦の1つである「明禅寺崩れ」といわれる合戦がおこなわれた。これは備前国を掌握しつつあった宇喜多直家と、備中国と美作国の西部を掌握し、備前国の中島までを勢力下に治めた三村氏との直接対決で、永禄十年(1567)におこなわれた。この戦いの後、宇喜多直家は備前国の戦国大名として確立していくのである。ところで旭東平野北半では「明禅寺崩れ」の戦死者を弔った首塚がかかつては数十ヶ所も存在していたといわれている<sup>(72)</sup>。現在、ほとんどが開墾により削平されてしまっているが、今回の調査ではそれに相当すると思われる遺構も検出している。近世は旭川西岸に岡山城を中心とした城下町が形成され、岡山城及び岡山城下に関する発掘調査もおこなわれておらず、多くの成果が上がってきている<sup>(73)</sup>。

## 注

- (1) 乗岡 実「岡山市域における最近の発掘調査成果」『古代吉備』第12集 1990年
- (2) 扇崎 由「岡山平野発見の火山灰」『古代吉備』第11集 1989年
- (3) 鎌木義昌「第1編 原始時代」『岡山市史』古代編 岡山市役所 1962年
- (4) 平井 勝<sup>as</sup>「百間川沢田遺跡」3『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』84 1993年
- (5) 山本悦世<sup>as</sup>「津島岡大遺跡」3『岡山大学構内遺跡発掘調査報告』第5冊 1992年
- (6) 富岡直人<sup>as</sup>「岡山市津島東3丁目朝寝鼻貝塚発掘調査概報」『加計学園埋蔵文化財発掘調査報告書』2 1998年
- (7) 神谷正義「津島江道遺跡」『日本における稻作農耕の起源と展開』日本考古学協会 1988年
- (8) 太田好治「宮竹野原遺跡」2 浜松市文化協会 1994年
- (9) 正岡睦夫<sup>as</sup>「津島遺跡」2『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』151 2000年
- (10) 家根梓多「弥生時代のはじまり」『季刊考古学』第19号 1987年
- (11) 藤江 望<sup>as</sup>「清水谷遺跡（一本木地区）」『矢掛町埋蔵文化財発掘調査報告』1 2001年
- (12) 出宮徳尚<sup>as</sup>「南方遺跡発掘調査概報」岡山市教育委員会 1971  
出宮徳尚<sup>as</sup>「南方（国立病院）遺跡発掘調査報告」岡山市教育委員会 1981年  
柳瀬昭彦<sup>as</sup>「南方遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』40 1981年  
扇崎 由<sup>as</sup>「上伊福・南方（済生会）遺跡 南方蓮田調査区Ⅰ」『岡山市埋蔵文化財調査の概要』1994（平成6）年度 1996年  
扇崎 由<sup>as</sup>「上伊福・南方（済生会）遺跡 南方蓮田調査区Ⅱ」『岡山市埋蔵文化財調査の概要』1995（平7）年度 1997年  
扇崎 由<sup>as</sup>「上伊福・南方（済生会）遺跡 上伊福立花Ⅲ調査区」『岡山市埋蔵文化財調査の概要』1996（平8）年度 1998年  
内藤善史「絵図・南方遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』110 1996年
- (13) 高畑知功<sup>as</sup>「百間川兼基遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』56 1982年
- (14) 正岡睦夫「岡山市乙多見における改修工事に伴う発掘調査」『岡山県埋蔵文化財報告』3 1989年
- (15) 草原孝典「赤田東（常操中）遺跡」『岡山市埋蔵文化財センター一年報』2 2003年
- (16) 山本悦世<sup>as</sup>「鹿田遺跡」『岡山大学構内遺跡発掘調査報告』第3冊 1988年
- (17) 近藤義郎「都月坂二号弥生墳丘墓」『岡山県史』考古資料 1986年
- (18) 河田健司「備前国府推定地（南国長）遺跡」『岡山市埋蔵文化財発掘調査の概要』1996（平成8）年度 1998年
- (19) 桑田俊明「中井・三反田遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』92 1994年
- (20) 下澤公明「弥生時代後期末の吉備南部の社会について」『古文化談叢』第45集 2000年
- (21) 近藤義郎<sup>as</sup>「岡山市七つ塙古墳群」岡山市七つ塙古墳群調査団 1987年
- (22) 注20
- (23) 近藤義郎「都月坂一号墳」『岡山県史』考古資料 1986年
- (24) 近藤義郎「備前車塚古墳」『岡山県史』考古資料 1986年
- (25) 宇垣匡雅「吉備の前期古墳—II 宮甘山王山古墳の測量調査—」『古代吉備』第10集 1988年

- (26) 注24
- (27) 草原孝典『新道遺跡』岡山市教育委員会 2002年
- (28) 注24
- (29) 鎌木義昌「神宮寺山古墳」『岡山市史』古代編 岡山市役所 1962年
- (30) 近藤義郎「淡茶臼山古墳」『岡山県史』考古資料 1986年
- (31) 鎌木義昌<sup>as</sup>「金蔵山古墳」『倉敷市考古館研究報告』第一冊 1959年
- (32) 小野山節「古墳と王朝の歩み」『古代史発掘⑥古墳と国家の成り立ち』講談社 1975年
- (33) 都出比呂志「日本古代の国家形成論序説—前方後円墳体制の提唱」『日本史研究』343 1991年
- (34) 近藤義郎「一本松古墳」『岡山県史』考古資料 1986年
- (35) 近藤義郎「岡山市津島の俗称『おつか』と称する前方後円墳についての調査の概略報告」『古代吉備』第10集 1988年
- (36) 鎌木義昌「旗振台古墳」『岡山市史』古代編 岡山市役所 1962年
- (37) 川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2号 1978年
- (38) 出宮徳尚<sup>as</sup>「岡山市四御神上の山一号墳発掘調査報告」岡山市教育委員会 1974年
- (39) 注18
- (40) 草原孝典「津島江道遺跡」『岡山市埋蔵文化財調査の概要』1996（平成8）年度 1998年
- (41) 注9
- (42) 注16
- (43) 宇垣匡雅<sup>as</sup>「原尼島遺跡（藤原光町3丁目地区）」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』139 1999年
- (44) 注4
- (45) 注13
- (46) 注15
- (47) 乗岡 実「岡山市域における最近の発掘調査」『古代吉備』第13集 1991年
- (48) 伊藤 晃<sup>as</sup>「田益田中（笹ヶ瀬川調節池）遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』140 1999年  
柳瀬昭彦<sup>as</sup>「田益田中（国立岡山病院）遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』141 1999年
- (49) 江見正己<sup>as</sup>「足守川矢部南向遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』94 1995年
- (50) 出宮徳尚<sup>as</sup>「賞田庵寺発掘調査報告」賞田庵寺発掘調査団 1971年
- (51) 出宮徳尚<sup>as</sup>「幡多庵寺発掘調査報告」岡山市遺跡発掘調査団 1975年
- (52) 伊藤 晃「富原北庵寺・富原遺跡」『岡山県史』考古資料 1986年
- (53) 吉田 昌「吉備と律令体制の確立」『岡山県史』古代II 1990年
- (54) 草原孝典「唐人塚古墳石室の測量調査」『岡山市埋蔵文化財調査の概要』1999（平成11）年度 2001年
- (55) 岡山理科大学学友会考古学部「沢田大塚古墳」『サヌカイト』第2号 1970年
- (56) 岡田 博「官衙」『吉備の考古学的研究』（下）山陽新聞社 1992年
- (57) 注40

- (58) 物部茂樹<sup>著</sup>「百間川米田遺跡」4『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』164 2002年
- (59) 高橋 謙<sup>著</sup>「雄町遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』 1969年
- (60) 高島公民館建設に伴って岡山市教育委員会による発掘調査がおこなわれた。
- (61) 注58
- (62) 注16
- (63) 注26
- (64) 水藤千代造『高島村史』吉備高島型墳顕彰會 1937年
- (65) 河本 清<sup>著</sup>「岡山城二の丸跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』78 1991年  
出宮徳尚・乗岡 実『史跡岡山城跡本丸中の段発掘調査報告』岡山市教育委員会 1997年  
松本和男<sup>著</sup>『岡山城二の丸跡』中国電力内山変電所建設事業埋蔵文化財発掘調査委員会 19  
98年
- 乗岡 実『岡山城内堀』岡山市教育委員会 1998年
- 乗岡 実『岡山城三之曲輪跡—表町1丁目地区内車開発ビル建設に伴う発掘調査』岡山市教育  
委員会 2002年

## 第Ⅱ章 調査の経過

ハガ遺跡は備前国府推定地に含まれており、さらに古代山陽道(推定)のすぐ南側に位置することから、備前国府関連の遺跡であることが推測された。備前国府の位置については、岡山市国府市場の西端にある県指定史跡の備前国府跡が古くから推定されてきたが、地名や微地形の検討などから、むしろ国府市場東半に求める意見の方が主流となっている。高島公民館建設に伴って、発掘調査された南古市場遺跡からは、平安時代の遺物が多量に出土し、極めて出土の稀な越州黒産青磁も伴っていることから、備前国府に関連する遺跡と考えられている。備前国府がより東側にあるという推定を裏付けている成果といえる。ハガ遺跡は、南古市場遺跡よりもより東側であり、備前国府に直接関わる遺構や遺物の出土が予想された。

岡山市立高島小学校の新たに取得した敷地に、同小学校のプール及び敷地の擁壁工事事業が岡山市教育委員会当局によって設定された。敷地は備前国府推定地の範囲に含まれることから、平成9年6月3日に文化課職員の立会に基づいて、敷地の四隅で試掘調査をおこなった。その結果、いずれの試掘場からも、古代から中世にかけての包含層が認められ、溝等の遺構も確認された。浅いところでは現水田の耕土直下から認められた。そのため、設計変更等により遺跡の保存を図るのは不可能であることが判明した。文化課は同年6月4日付で当該地が埋蔵文化財包蔵地になり、文化財保護法の適用を受け、記録保存による事前の行政的措置の必要な旨の試掘調査に関する結果を岡山市教育委員会施設課に通知し、その実施に対する両者の連絡・協議を要請した。文化課と施設課で協議を重ねた結果、敷地周囲の擁壁部分の記録保存を平成10年度中に、プール本体部分の記録保存を平成12年度中からおこなうことと合意に達した。擁壁部分の発掘調査は平成11年1月5日に着手し、同年5月7日に終了した。着手後、岡山市教育委員会教育長から文化庁長官宛に文化財保護法第98条の2第1項に基づく「埋蔵文化財発掘の報告」が提出された。プール本体部分は平成12年6月26日に着手し、平成13年5月2日に終了した。着手後、岡山市教育委員会教育長から、岡山県教育委員会教育長宛に文化財保護法第58条第1項に基づく「埋蔵文化財調査の報告」が提出され、発掘調査面積は擁壁部分で453m<sup>2</sup>、プール本体は1178m<sup>2</sup>である。その後、調査が進展するにつれ遺跡の重要性が明らかとなってきた。そのため、文化財課(平成12年度から機構改革に伴う改編により文化財課となる。)から施設課へ平成13年3月26日付で以下のような要望書が提出された。

### ハガ(高島小)遺跡の保護・保存についての要望

本遺跡の発掘調査につきましては、日頃からの尽力に感謝しております。  
さて、発掘調査の結果、備前国府に関連すると考えられます極めて貴重な遺構が検出されました。また、出土した遺物の内にも平城京でしか出土していない羊形硯や、地方での出土が大変まれな三彩陶器など、奈良の都に遜色ないものが多数含まれています。  
こうした調査成果に基づき、発掘調査対策委員会でも検出遺構の現状保存を極力図るようにとの意見が出されました。

つきましては、できる限り現状の造構を損傷させないような工事の施工を要望します。具体的には基礎掘削の深度を海拔高5.0m以上におさまるように要望します。

その後、平成13年4月14日（土）には、発掘調査現地説明会を行い、小雨が降る悪天候にもかかわらず、約400名の参加があった。

#### 発掘調査組織（擁壁部分）

発掘調査主体者 岡山市教育委員会委員長 戸村彰孝

発掘調査対策委員 稲田孝司（岡山大学教授）  
狩野 久（岡山大学教授）  
西川 宏（山陽学園講師）  
間壁忠彦（倉敷考古館館長）  
水内昌康（岡山市文化財保護審議会会长）

発掘調査担当者 富岡 博（岡山市教育委員会文化課長）  
出宮徳尚（岡山市教育委員会文化財専門監）  
根木 修（岡山市教育委員会文化課長補佐）  
神谷正義（岡山市教育委員会文化課主任）  
乗岡 実（岡山市教育委員会文化課主任）  
(調査員) 草原孝典（岡山市教育委員会文化財保護主事）  
(経理員) 羅久井和恵（岡山市教育委員会文化課主事）

発掘調査現場作業員 青木敏夫 植松秀夫 佐々木龍彦 中山政太郎 難波象一 脇本元典  
赤木悦子 安藤一江 岩佐ます 水内汲子

発掘調査現場補助員 木村真紀

発掘調査現場事務員 藤原裕子

出土物整理事務員 才本真澄 山元尚子

#### 発掘調査組織（プール本体部分）

発掘調査主体者 岡山市教育委員会委員長 戸村彰孝

発掘調査対策委員 稲田孝司（岡山大学教授）  
 狩野 久（岡山大学教授）  
 西川 宏（山陽学院講師）  
 間壁忠彦（倉敷考古館館長）

発掘調査担当者 出宮徳尚（岡山市教育委員会文化財課長）  
 三宅一正（岡山市教育委員会文化財課調整主幹）  
 根木 修（岡山市教育委員会文化財センター所長）  
 神谷正義（岡山市教育委員会文化財課主査）  
 宇垣匡雅（岡山市教育委員会文化財課主査）  
 乗岡 実（岡山市教育委員会文化財課主任）  
 （調査員） 草原孝典（岡山市教育委員会文化財保護主事）  
 （経理員） 羅久井和恵（岡山市教育委員会文化財課主事）

発掘調査現場作業員 小林純一郎 佐々木龍彦 中川美知雄 中山政太郎 那須鉄雄 離波茂夫  
 西崎洋子 藤田光夫 藤田光子 水内汲子 山本好子 吉村順次

発掘調査現場補助員 木村真紀

発掘調査現場事務員 藤原裕子

出土物整理事務員 山元尚子 坪井聰子 都井京子

調査にあたり、対策委員会の先生方には多大なるご指導・ご助言を頂いた。また、今津勝紀、大塚利昭、亀田修一、片桐孝浩、葛原克人、河本清、小松原基弘、佐藤信、佐藤竜馬、鈴木景二、高畠知功、武田恭彰、中野雅美、久野修義、弘田和司、松尾麻子、松尾洋平、山川純一、山元敏裕、山本悦世の諸氏には諸々のご教示・ご助言を頂いた。諸々にご助勢くださった方々に深謝する次第である。

### 経過と概要

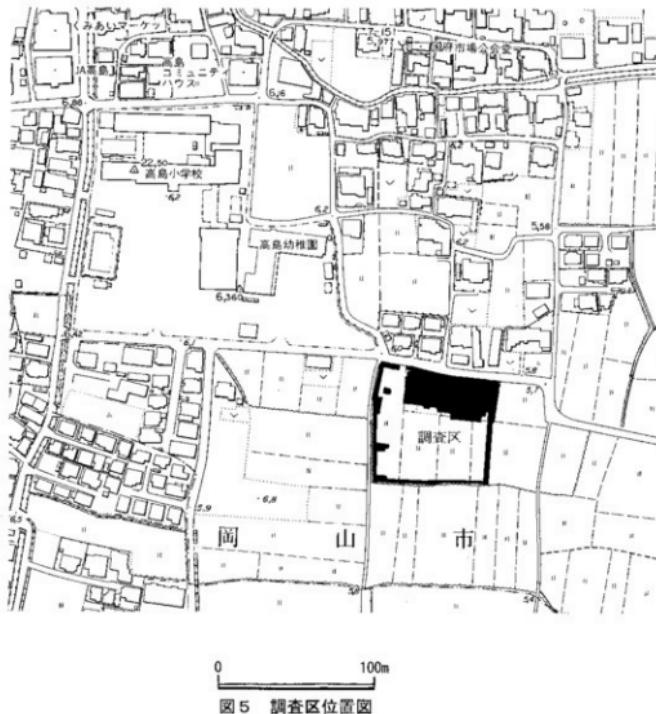
調査は部分的に造成土や砂利敷がおこなわれていたため、重機によって除去した。発掘区の層序は擁壁部分は両側の壁面、プール本体部分は北側が擁壁部分と重なるため、南側の壁面（図7）から得た。調査区の設定は擁壁部分の東側からA区、南側をB区、西側をC区、北側をD区、プール本体部分をE区とした。

敷地北半は現水田の耕土直下が包含層となっている。当初、北半の包含層からは中世の遺物がほとんど出土しなかったことから、中世の遺構はほとんど存在しないのではないかという見通しもあった。しかし敷地西端や南側の微高地が低くなっている中世段階では水田化されている部分の上層には包含

層の二次堆積が厚く認められ、そこから中世の遺物が比較的多く含まれていたことや、微高地高位部で中世の柱穴などが検出されたことから、中世の包含層は地下げの際に削平されたことが判明した。包含層を大きく削った水田開発の時期は僅かではあるが、18世紀前半の陶磁器が含まれていたことから、近世の大規模な水田開発であったと考えられる。該期前後に周辺の用水整備が旭川河口部周囲の干拓に伴っておこなわれており、その際の水田開発に伴う可能性が高い。

中世の遺構面は溝と柱穴で、中世後半にはE区西側の低位部や、擁壁部分の調査区であるA区南半、B区、C区は水田化されていた。柱穴列や建物にはいくつかの方向性があり大きさもそれ程大きなものはないことから、一般的な集落と考えられる。ただE区南端で土器焼成窯が検出されており、当時の窯業生産を考える上で貴重な資料といえる。

古代の遺構面は2面あり、古代1遺構面は8世紀(7世紀末)～12世紀、古代2遺構面は7世紀の時期である。古代1遺構面は正方位の区画と建物で構成されていることから官衙と考えられるが、三彩陶器、青磁、羊形硯などの極めて出土例の稀な遺物が含まれていることや、存続時期が長いことから地方官衙の最高レベルである国府に關係する官衙と推測される。また、瓦塔、泥塔、灯明痕のある



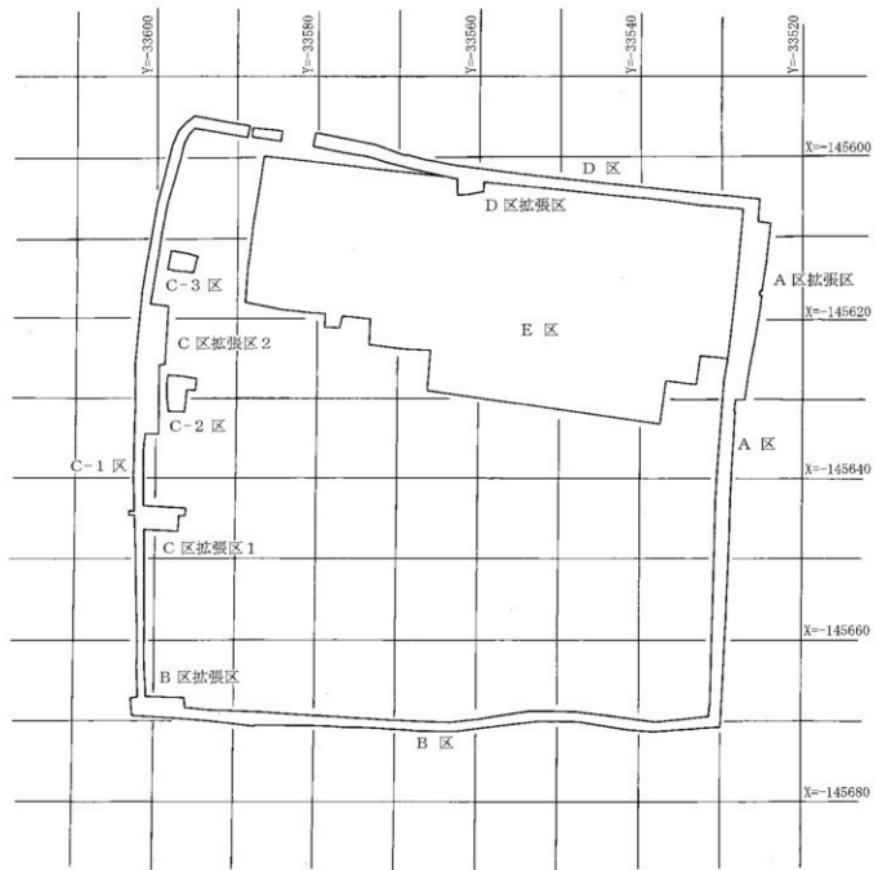


図6 調査区区域図

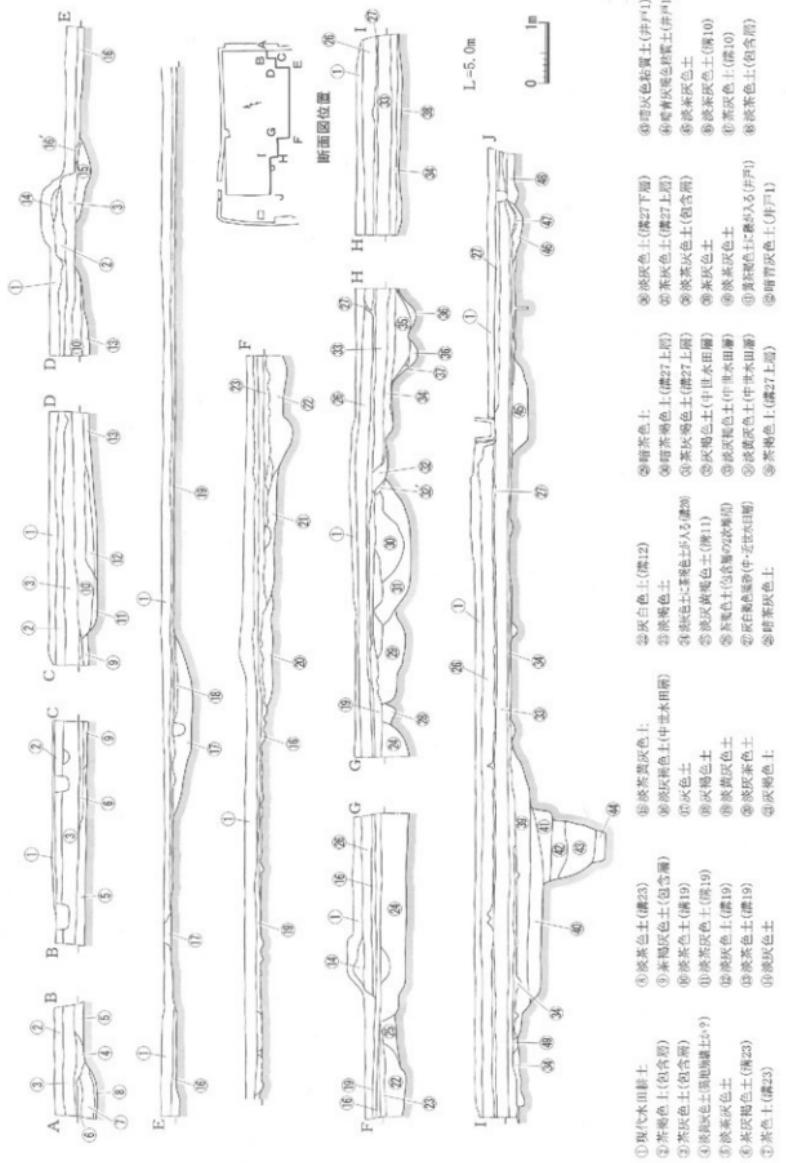


図 7 調査区断面図

土器が比較的多く出土したことから、この官衙が寺院的性格を持っていたこともうかがわれる。

さらに調査区内の様相と周辺の地割りや微地形から、約100m四方の外郭に東西30m、南北60mの内郭があるという構造であることが推測される。外郭からは炉状遺構や埴堀を廃棄した土壌が検出されたことから工房的な空間、内郭は寺院的空間であった可能性が高い。備前国府の場合、政府の位置が明らかとはなっていないが、ハガ遺跡の有り様は国府城の実態を考える、極めて貴重な資料になるといえる。

古代2遺構面からは、柱穴と溝が検出された。遺物も少なく柱穴も小さいものが目立つことから、集落の縁辺である可能性が高い。ただしE区中央を南北に横切る溝の方向に柱穴列の方向が大体合わせてある傾向も看取されることから、中世の集落とは異なり、一定の規則性があったこともうかがえる。ただし、この傾向は該期の県南部の集落ではよくみられることであり、一般的な集落の特徴といえよう。

#### 発掘日誌(抄)

平成11年	1月5日	擁壁部(A～D区)発掘開始
	3月10日	発掘調査対策委員会開催
	3月23日	高島幼稚園の園児に遺跡の見学会をおこなう
	4月9日	地元町内会に遺跡の見学会をおこなう
	4月22日	発掘調査対策委員会開催
	5月7日	擁壁部(A～D区)調査終了
平成12年	6月26日	プール本体部(E区)発掘開始
	6月29日	水位が上がり湧き水が激しく、掘り下げは困難を極める
	10月2日	水位が下がり、微高地高位部の精査開始
	10月11日	中世土器癱掘り上がり写真を撮影
	11月10日	発掘調査対策委員会開催
	11月13日	古代遺構面1精査及び、遺構掘り下げ開始
平成13年	2月26日	古代遺構面2遺構掘り下げ開始
	3月14日	遺構掘り上がりの全体写真撮影
	3月19日	発掘調査対策委員会開催
	4月14日	現地説明会開催・悪天候の中400名を越える見学者がある。
	4月17日 ～19日	3日に分けて学年ごとに高島小学校の児童に遺跡の見学会をおこなう
	4月26日	プール本体部(E区)調査終了・発掘機材撤収

## 第Ⅲ章 遺構と遺物

中世から古代にかけての遺構が検出され、それぞれの層序関係は前節を参照されたいが、ここでは古代を2期と、中世、近世に分け、出土した遺物や遺構の概要を説明する。

### I 古代1（8世紀～12世紀）(図9)

真北方向に合わせた区画と、規則的な配置をする建物で特徴付けられる。いわゆる官衙の時期である。一応8世紀を初源と考えているが、もう少し遡る時期の軒丸瓦も出土していることから、7世紀末まで含まれる可能性がある。また第Ⅳ章で触れるが、さらに細かな分期に分けられる。以下図6で示された調査区ごとに概要を説明する。

#### (1) A区

P20(図8、10、11、12)

調査区を斜めに縦断する。検出当初は長方形の土壌と考えていたが、南の延長部分で同様のP109が検出されたことから、岡山市津寺遭跡<sup>(1)</sup>や同市吉野口遭跡<sup>(2)</sup>などの官衙遺跡で検出されている区画溝と同じものと考えられる。この種の溝は土壌が連結した、いわゆる蕭溝と呼称されるものである。遺構検出面は4.8m付近で、幅1.2m、長さ11.2m、北東部が若干不整形に広がる。深さは検出面から0.12mで断面U字形になる。埋土は4層で、基盤層とよく似た土層がブロック的に認められることから、人為的に埋められた可能性が高い。

遺物は埋土中からかなり大きなカマド(1)がほぼ完形で出土した。出土状況からすると、西側から落ち込んだような状況であった。ほかに埋土からは土器の小片が出土したのみであったが、埋土上面や、P20を切り込んだP114から土器が出でている。P114については後述するが、P20の上面からは須恵器の杯(2～5)、

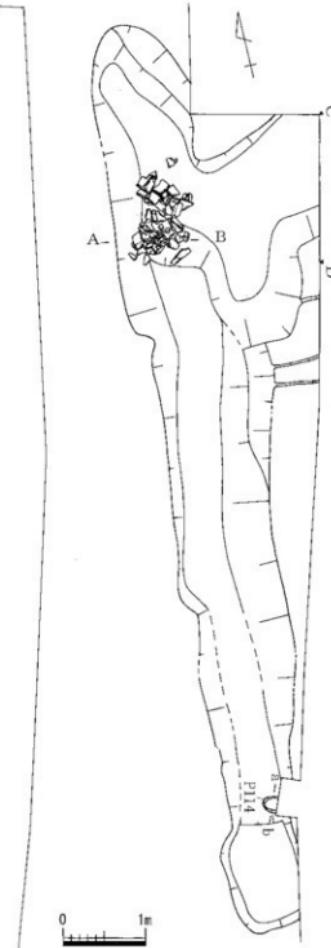


図8 P20 実測図

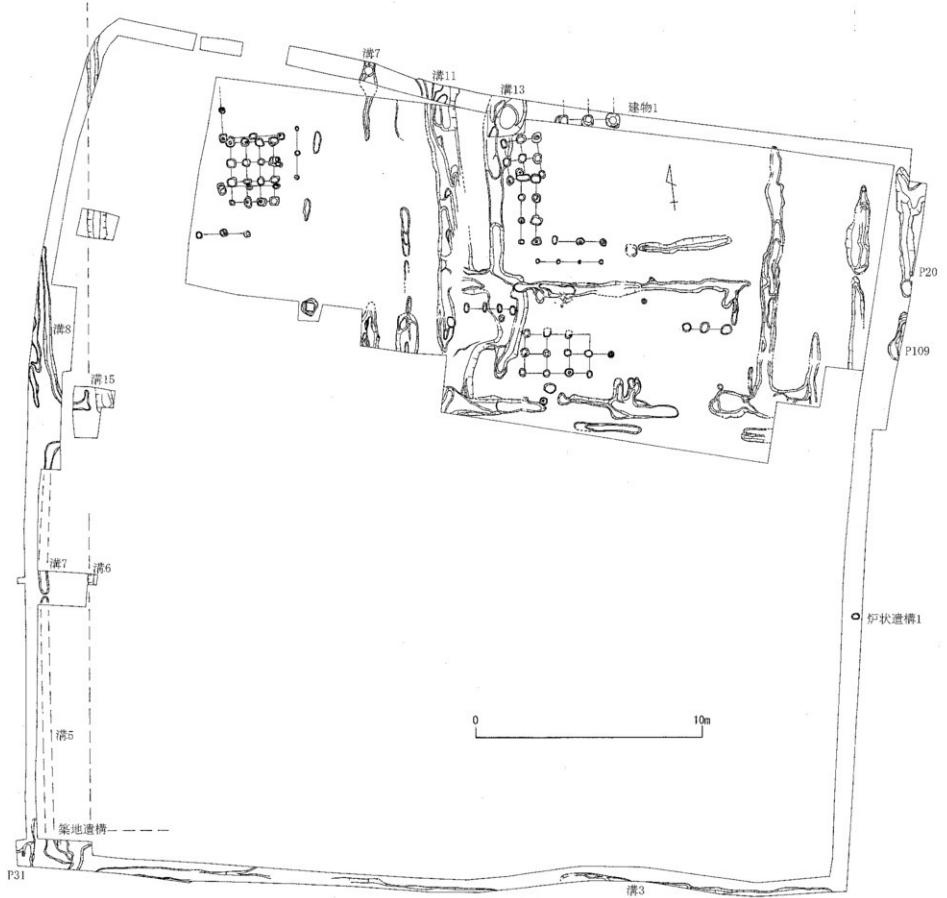


図9 古代1遺横面全体図

图10 P20 出土遗物

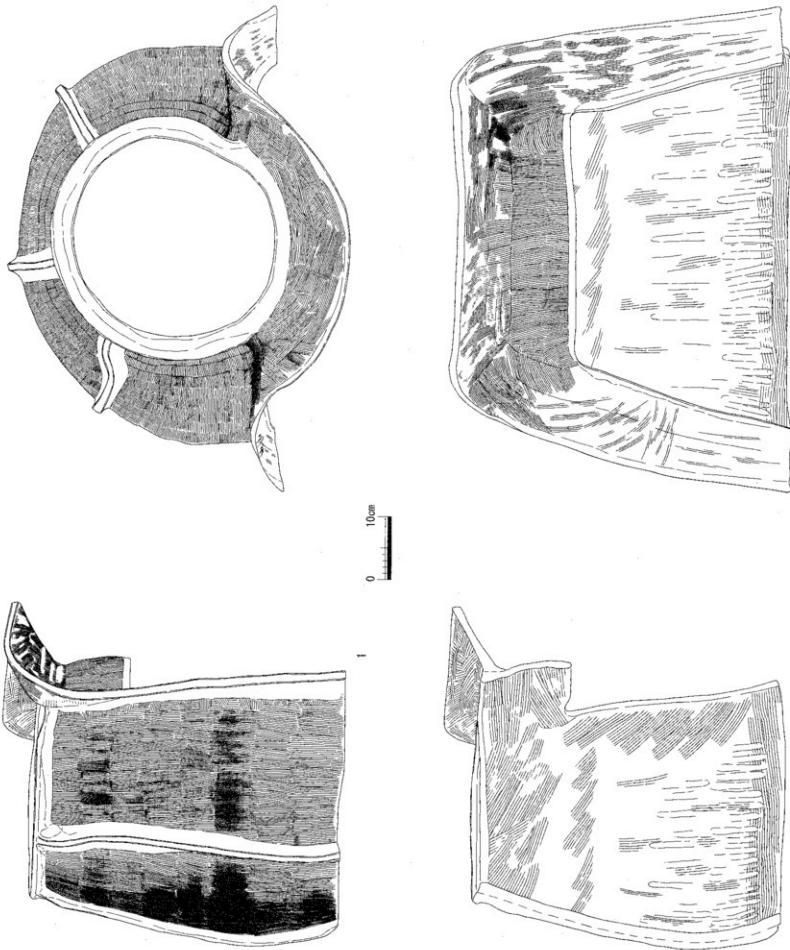
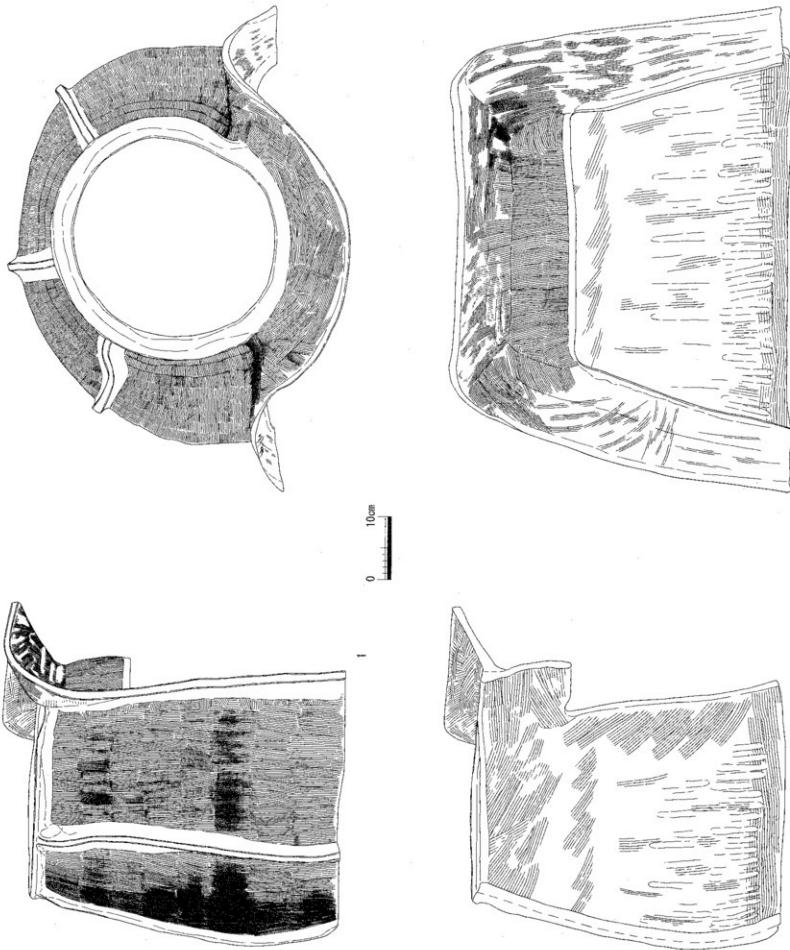


图10 P20 出土遗物



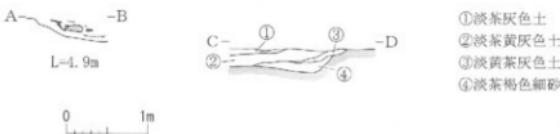


図11 P20 断面図

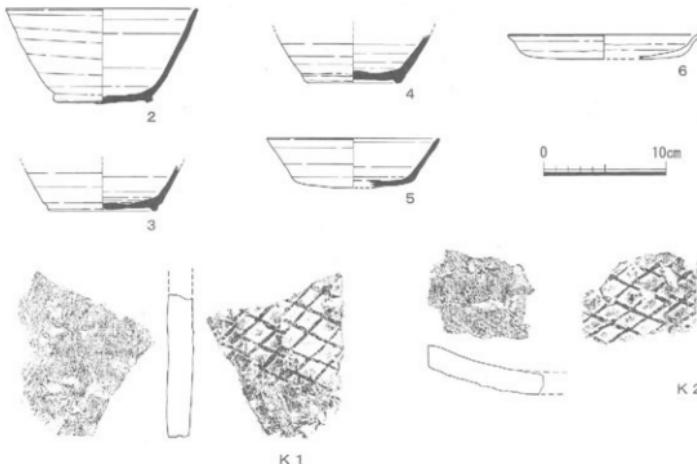


図12 P20 上面 出土遺物

土師器の皿（6）、凸面に菱形タタキを施した平瓦片が出土した。これらの遺物はP20埋没後のわずかな堆積、あるいは廃棄されたようである。土器は9世紀後半の時期でまとまっており、この時期にはP20はほぼ埋没していたと考えられる。

## P114 (図13、14)

P20の上面から掘り込んだ小ピットであるが、完形の黒色土器碗（7）を埋納していた。径0.2mの円形の平面形を呈し、遺構検出面は4.7m付近で、深さは検出面から5cmほどである。出土した黒

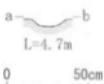


図13 P114 断面図

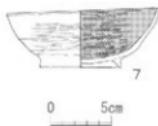
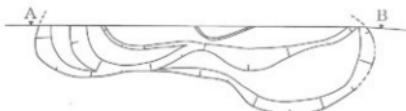


図14 P114 出土遺物

色土器は10世紀後葉と考えられ、P20は該期には完全に埋没していたと考えられる。



P109 (図15)

P20の南側で検出された土壤であるが、P20とセットになつた区画溝と考えられる。調査区の端部で検出されたため、全形は明確でないが、長さ4.1m、幅1.0m以上の規模になると思われる。遺構検出面は4.9m付近で、深さは検出面から0.2mである。断面形はU字形を呈している。遺物は土師器の小片が出土したのみである。

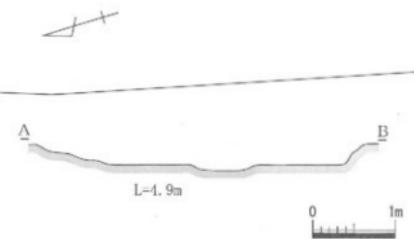


図15 P109 実測図

炉状遺構1 (図16)

A区中央付近で検出された炉状遺構である。A区抜張区より南半については中世以降の水田開発によりかなり地下げを受けているため、遺構の残存状況は良くない。炉状遺構1の周辺からは鉄滓や古代の土器も出土しており、現況よりも多くの遺構が存在していたと思われる。長さ1.35m、幅1.0mの長方形の平面形を呈し、断面形は箱形である。遺構検出面は4.5m付近で、深さは検出面から0.15mである。底面には炭が広がり、北側の壁面は被熱により焼土化している。鍛冶炉等の下部構造の可能性が高い。

## (2) B区

P28 (図17、18)

B区中央やや東寄りで検出されたが、隣接する溝3と連結して溝になる可能性が高い。ただしP28は予想される区画の中央付近になることから、溝とは異なる何らかの遺構である可能性もある。調査区の幅が狭いため、極めて限定された範囲しか検出できなかつた。遺構検出面は、4.5m付近で深さは検出面から0.55mである。埋土から土師器の楕(8)と凸面に織目タタキを施した平瓦片が出土した。



図16 炉状遺構1 実測図

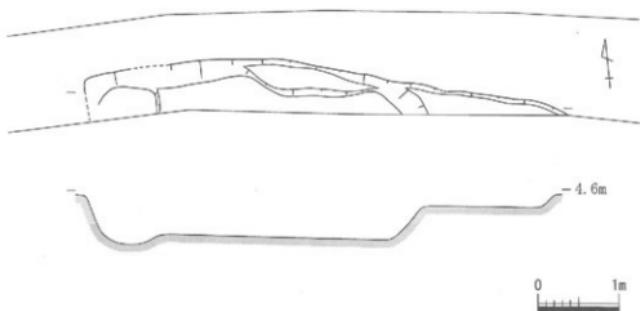


図17 P28 実測図

## 溝3 (図19、20)

B区とはほぼ平行して検出された溝であるが、調査区の範囲に限定され、全形を明らかにはできなかった。西側で溝の両端を検出した部分があることから、幅は1.1mといえる。遺構検出面は4.4m付近で、深さは検出面から0.35mである。断面台形で底面は平坦に近い。A区とC区の境付近では先端が隅丸方形気味にカーブしており、ここで溝が完結する可能性が高い。そうすると東西の長さ37.5mということになる。ただしA区北側で検出されたP20、P109の区画溝はE区の区画溝へ連結することから、溝3は途切れで北へ曲がるのではなく、東側の調査区外へ続いていると推測される。

遺物は上部器の小片が若干出土しただけであるが、溝3上面の中世水田層を掘り下げ中に11世紀～12世紀の軒平瓦や平瓦が出土しており、C区で検出された築地塀が調査区に隣接して埋没している可能性が高いと思われる。

## P34 (図24)

B区西側のコーナー付近で検出された土壌で、長さ2.3m、幅0.7mの長方形円形の平面形を呈する。遺構検出面は4.6m付近で断面台形、深さは検出面から0.18mである。遺物は全く出土しなかつたため時期を決める手掛かりはないが、上面を中世水田により削平されていることや、埋土が溝3と似ていることから、古代の時期と推測される。

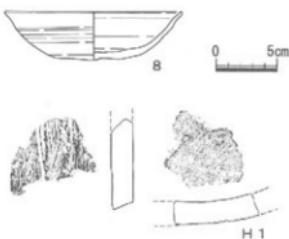


図18 P28 出土遺物

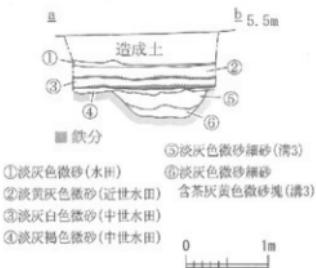


図19 溝3 断面図



図20 溝3 実測図



図21 B区拡張区上層遺構 実測図

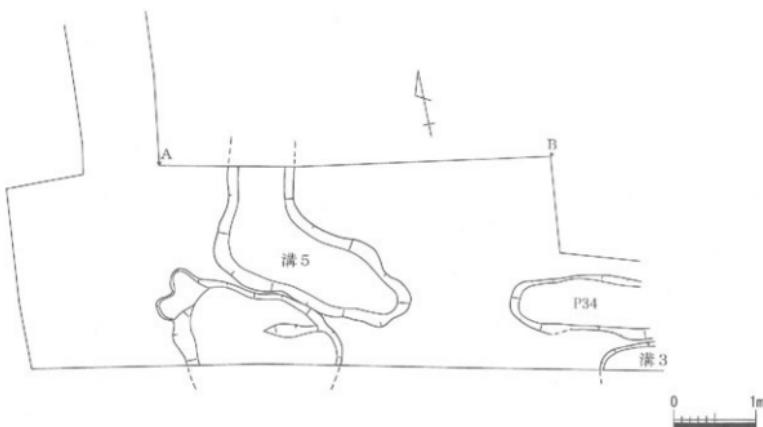


図22 B区拡張区下層遺構 実測図

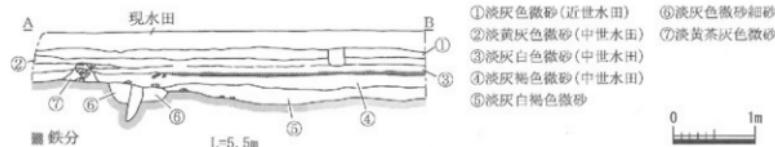


図23 B区拡張区北壁 断面図

## 築地遺構 (図21、22、23、25)

B区西側のコーナー付近で検出された。基盤層を幅約3mほどに断面形をカマボコ形に削り出し、その上面に若干の盛り土と小礫を葺いている。小礫は中世以降の水田開発に際して、削り残された築地の上へ2次的に集められた可能性も考えたが、盛り土内に埋め込まれているものもあることから、築地に伴うものと考えられた。築地の東側は幅約1.0m、深さ0.1mに溝状にくぼむことから、浅い雨落ち溝がめぐっていると思われる。西側についてはP31によって若干削平されているため、雨落ち溝の確認はできなかつた。

遺物は東側の雨落ち溝から検出された。土師器の椀(9)と軒丸瓦で、平瓦も破片であるが30片ほど出土した。軒丸瓦は平城宮式系(H1)、内面に布目痕がある平安時代中期の一木造りのもの(H4・H5)と、平安時代後期の単弁のもの(H2・H3・H6)がある。とくにH4は周縁を打ち欠いており、築地瓦として2次的に利用した可能性がある。

## P31 (図26、27)

B区西端で検出された土壤で、築地の西側を一部削平している。南北の長さが2.0m以上、幅約1.0mの長楕円形の平面形で、西側に若干張り出しが付属する。

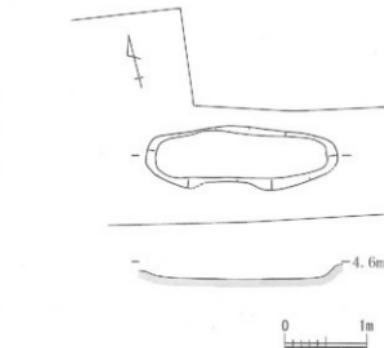


図24 P34 実測図

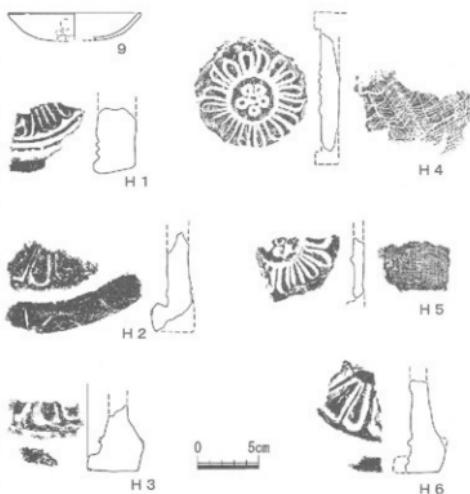


図25 築地遺構 出土遺物

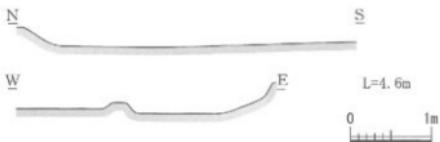


図26 P31 断面図

しかし、西側や南側が調査区外へでるため、全形は不明で不整形な土壙の一部である可能性も高い。

遺物は土器の小片と平瓦の破片があり、図化できたのは土師器杯(10)と平瓦(K1)だけである。杯(10)の時期は12世紀後半で、この時期には築地塀が廃絶しつつあったことがうかがわれる。

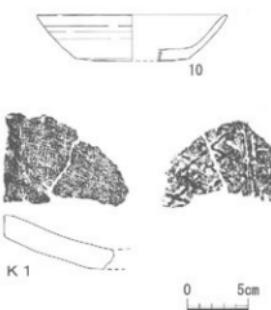


図27 P31 出土遺物

#### 溝5（図22、23）

B区西端、築地の下で検出された溝である。溝3とセットになる区画溝と考えられる。つまり、溝3が区画の南限を東西方向に画し、溝5は区画の西限を南北に画する。溝5は東西方向に2mほど曲がり完結する。そして2.5m途切れで溝3へ続くのである。溝5の検出面は4.8~4.7mで、幅0.8m~1.0m、深さは検出面から0.1~0.2mである。断面台形で底面は溝3と同様に平坦である。

遺物は土師器の小片が出土したのみである。

#### (3) C-1区拡張区1

##### 築地遺構（図28、30）

B区で検出された築地の北の延長部分と考えられる。遺構検出中に礫がかなりまとまって出土した

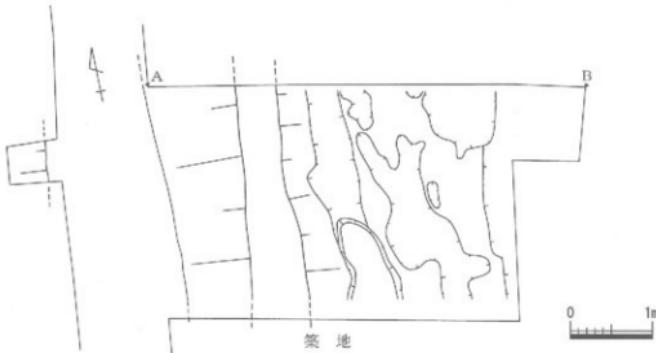


図28 C-1区拡張区1上層遺構 実測図

が、上面を水田耕作された際に移動したもので、全て2次的な堆積であった。おそらく、本来はB区の築地と同様に上面に礫が葺かれていたと思われる。C区拡張区1で検出された築地塀は全て盛り土で、基底部での幅は3.5mであった。残存高は0.1mほどで、基底部のレベル高は4.6mである。この築地は先行する区画溝の上面に構築されており、区画溝を築地塀につくりかえたともいえる。遺物は土器の小片が出土した。

溝5・溝6・溝7（図29、30）

築地に先行する区画溝である。溝5はC区拡張区1の南半で途切れ、0.15mほどの間隔をあけて溝7へと続く。溝5、溝7とも幅0.6～0.8mであるが、断面を検討すると東側の傾斜が緩やかになっている。幅1.8mの範囲を浅く掘り下げて、その後西側部分をより深く掘り下げている。すなわち、溝5・溝6と一対になる溝6の挟まれた空間が本来は築地であった可能性を示しているのではないかと思われるのである。つまり、当初から築地塀であったということになる。ただし、その築地の基底部での幅は2.8mになり、上層の築地よりも若干小規模といえる。遺物は溝7から須恵器の小片が出土したのみである。また、埋土中には瓦片や礫が集中的に出土するといった傾向も認められないことから、構造的にも上層の築地よりも簡素であった可能性が高いように思われる。

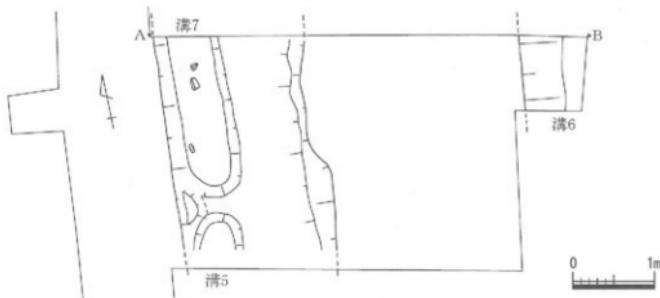


図29 C-1区拡張区1下層遺構 実測図

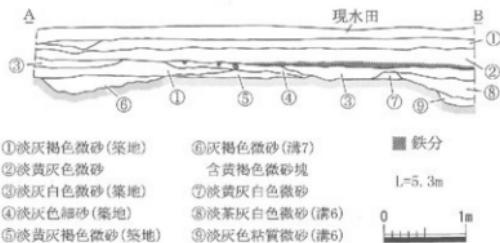


図30 C-1区拡張区1 断面図

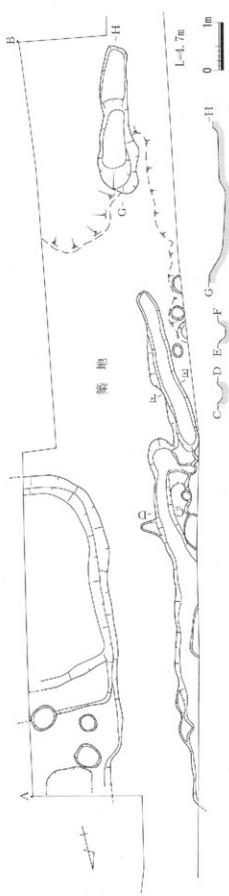


图31 C-1区勘探区2上层土壤 素描图

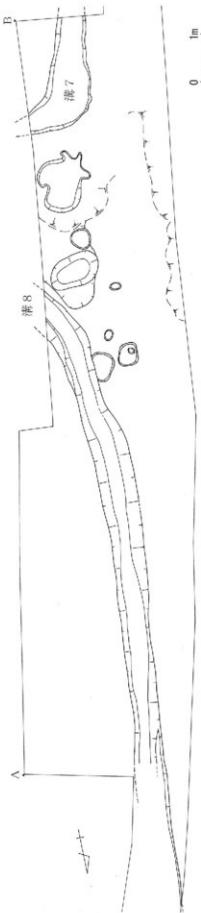


图32 C-1区勘探区2下层土壤 素描图

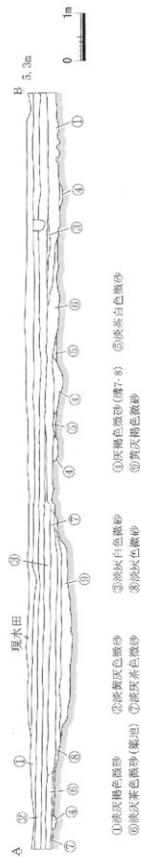


图33 C-1区勘探区2真壁 断面图

## (4) C-1区拡張区2

築地遺構(図31、33)

C区拡張区2上層で検出された築地で、C区拡張区1で検出された築地の延長部分に相当する。築地上面の水田層を掘り下げ中に礫や瓦片が多く出土したが、築地遺構に確実に伴っていなかった。しかし築地部分以外では礫が集中することもないことから、B区の築地同様に葺かれていた礫が水田の耕作に伴って動かされ、2次的に堆積した可能性が考えられる。築地の西側には幅0.4~0.6mの溝があり、部分的に長さが3.2~3.5mの土壙が並んでいるように途切れてもいるが、おそらく築地西側の雨落ち溝と考えてよいと思われる。調査区中央付近で0.4mほど東側へ溝がずれている部分があり、この部分は築地の幅も1.8mとほかよりも狭くなっている。門の可能性も想定して精査したが、調査区内では明確にできなかった。また、この部分の東側には長さ5.2mほどの方形の土壙状のくぼみがあり、築地を一部削平している。全く遺物が出土しなかったため性格等は不明であるが、P31同様に築地廃絶期、あるいは廃絶後の遺構である可能性が高い。築地は全て盛り土であり、0.2mほどの高さが残存していた。また調査区内の南半は中世以降の水田開発で基底部以下まで削平されていた。築地に確実に伴う遺物は、雨落ち溝から出土した土師器の小片と平瓦の破片だけである。

## 溝7・溝8(図32、33)

築地の下層で検出された溝で、築地に先行する区画溝である。ただし北から続く溝8と、南から続く溝7は調査区の南半で相互に曲がって接続しない。3.2mほどの間隔をあけているといえる。上層の築地でも雨落ち溝がL字形になり築地の幅も狭まることから、この付近に門などが存在することを

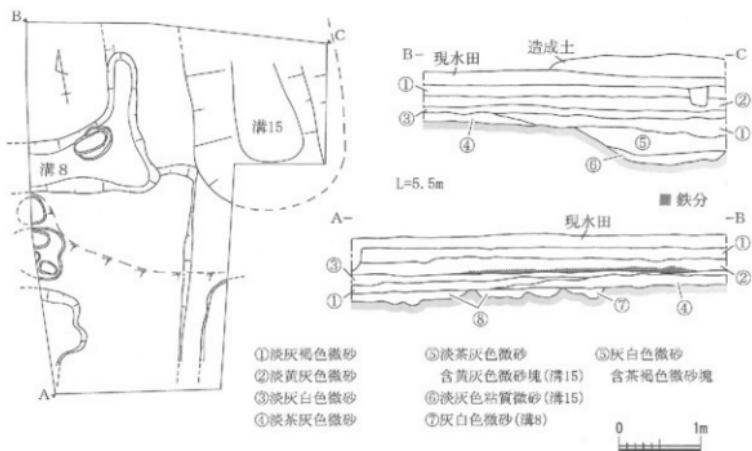


図34 C-2区遺構 実測図

想定した。同様に下層でも、門、もしくは門とまではいえないような出入り口状の施設が存在していたことが推測される。溝7と溝8の途切れた部分からは不整形な土壙が検出されたが、いずれも埋土が5cm前後で、土壙というよりも凹凸に近い性格のものであった。溝7の幅は平均で0.7m、溝8は0.6~0.9mである。出土遺物は少なく、須恵器と土師器の小片が出土したのみである。

## (5) C-2区(図34)

C-1区拡張区2の東側であり、溝8と溝15を検出した。溝8はC-1区拡張区2で検出した北から続く区画溝で、当区で完結する。幅は0.6~0.8mである。溝15は幅1.6m以上で北から続く区画溝である。溝8と平行になることからも一对の区画溝と考えられる。C-1区拡張区1で検出した溝6の延長部分と重なることから、溝15と溝6は、溝8と溝7の関係と同じ一对の区画溝といえる。しかも溝15は当調査区で途切れしており、溝8とともに完結する可能性が高い。溝15、溝8、溝7、

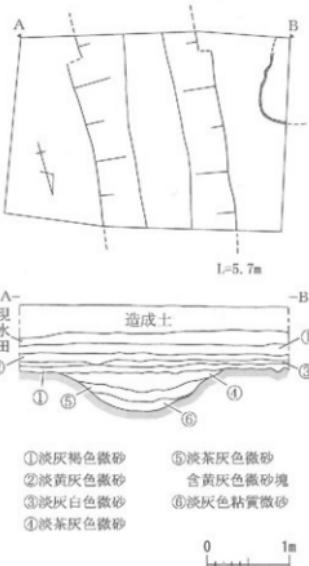


図35 C-3区遺構 実測図

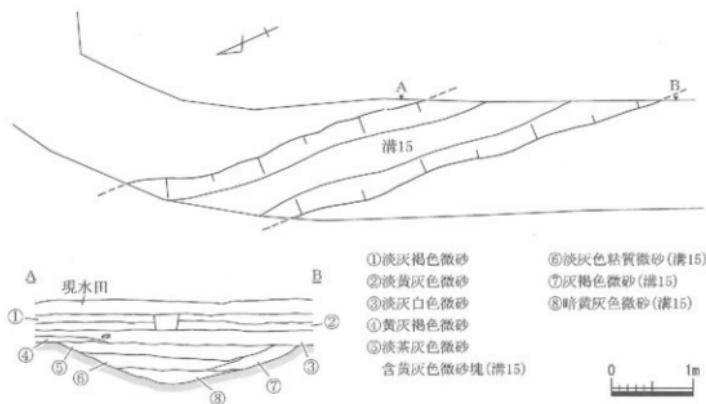


図36 C-1区北半遺構 実測図

溝6、溝5は、途切れている部分もあるが、基本的にはハガ遺跡の外郭を画する区画溝であり、現況から、この区画溝は区画の内側の方が、幅が広く深い溝がめぐっているということになる。出土遺物は、溝8、溝18の埋土中から土師器の小片が出土したのみである。

## (6) C-3区(図35)

C-1区拡張区2北側で、C-2区で検出した溝15の北側延長部分を検出した。遺構検出面は4.8m付近で最深部は検出面から0.45mである。幅は1.05mで断面形は傾斜の急なU字形である。埋土は3層あり、④層の上半から土師器の小片が若干出土した。

## (7) C-1区北半(図36、37)

C-1区拡張区2やC-3区で検出した溝15の北側延長部分を検出した。溝15を検出した調査区のなかで最も溝15の調査範囲が広い。また上面の水田層出土のものも含めて、固化できるほどに残存している遺物も出土した。溝の検出レベルは4.9m付近で、幅は1.0mである。断面形は傾斜の急なU字形で、埋土は4層確認できるが基本的には3層である。埋土中層に相当する⑥層から黒色土器壺(11)、綠釉陶器底部(15)、須恵器壺(16)が出土した。溝15の上面からは土師器壺(13)が出土した。そのほかの黒色土器壺(12)、土師器皿(14)、土師器脚

(17)、土師器壺(18)は、溝15上面の水田層を掘り下げ中に出土したものである。黒色土器壺(11)の存在から、10世紀前半では機能していたと考えられ、溝15上面で出土した土師器壺(13)が溝15の下限の時期を示すと考えると、10世紀末～11世紀初頭には埋没していた可能性が高い。

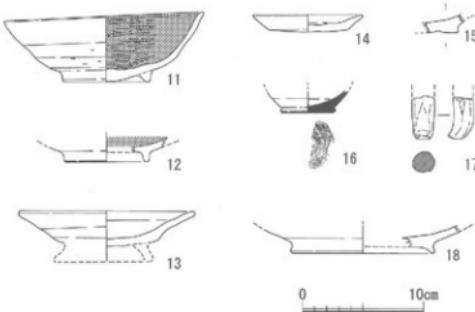


図37 C-1区北半 出土遺物

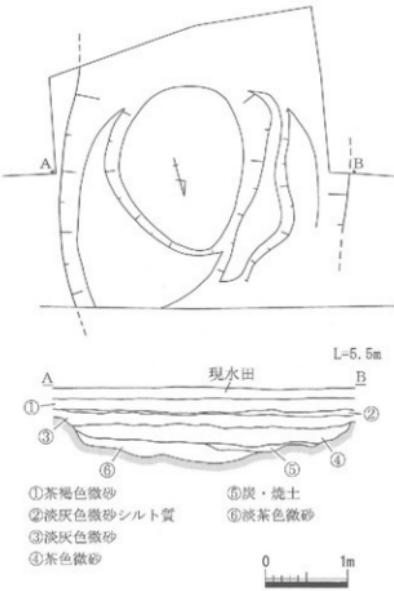


図38 溝13 実測図

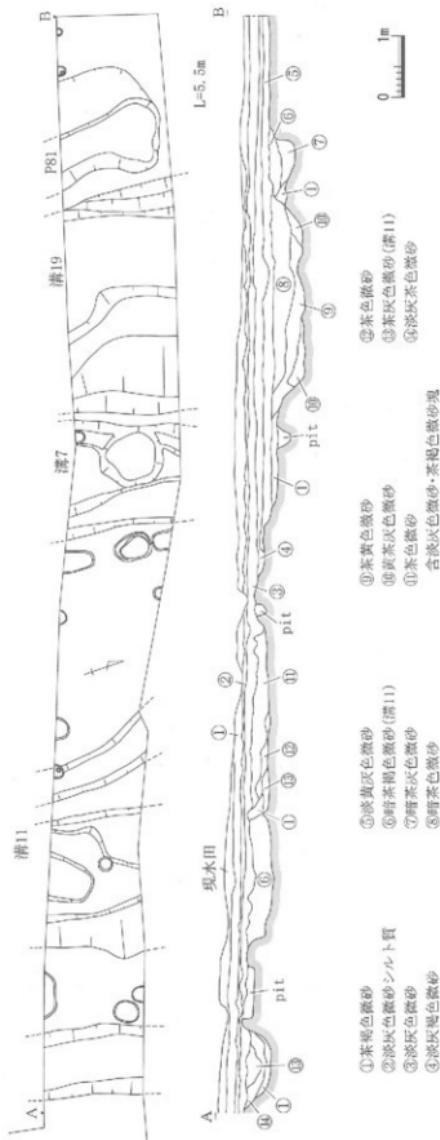


図39 D区西侧遺構実測図

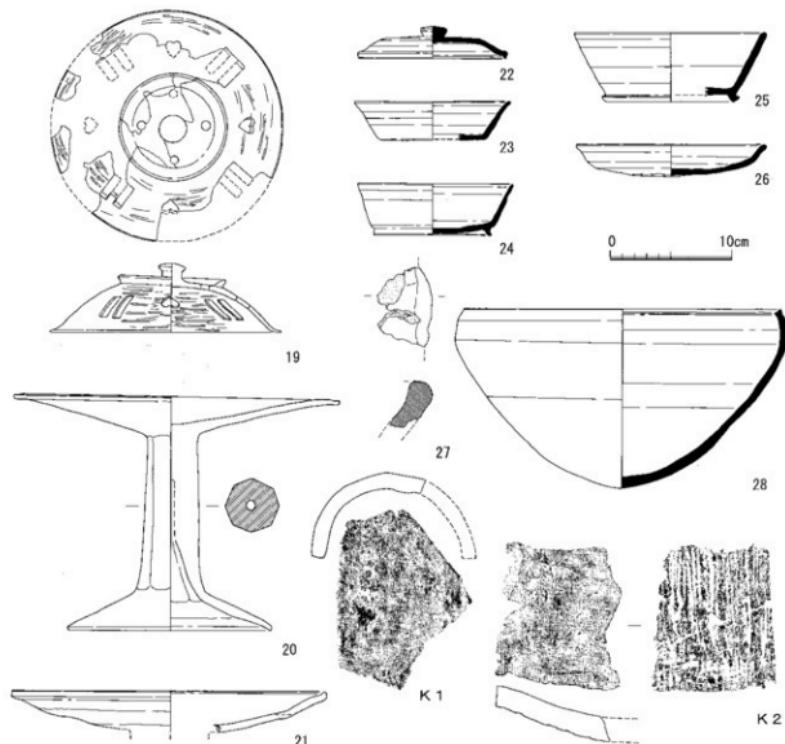


図40 溝13 出土遺物

またC-3区で検出した溝15の最終埋土も同様であるが、最終埋土には基盤層とよく似た土がブロック状に含まれており、最終的には人為的に埋められたと推測される。

#### (8) D区

##### 溝7・溝11（図39）

D区西側で検出された溝である。D区西側は中・近世の溝や、水田開発や耕作に伴う地下げの影響を多大に受けており、かなり複雑な凹凸が認められる。そのため古代の遺構の識別は困難で、E区の調査との整合性から古代の遺構を割り出した。溝11は幅約3.2mで、底面は平坦ではなく、かなり凹凸がある。溝上面の平面形もかなり不整形といえる。遺構検出面は4.9m付近である。溝7も溝11と同様で、かなり不整形な溝で、底面も一定ではない。遺構検出面は4.9m付近である。遺物はいずれも土師器片と平瓦が若干出土したのみである。

## 溝13（図38、39、40）

調査期中央付近で検出した溝であるが、E区を調査するまでは不整形な土壌であると考えていた。幅は最大で3.2m、遺構検出面は5.0～5.1m付近、最深部は検出面から0.45mである。底面は平坦でなく、凹凸が比較的顕著である。遺構の東側と西側では検出レベルが10cmほど異なっており、調査区全体の微地形から見ても溝13はレベル高の変換点に位置している。埋土は3層で、炭、焼土層が認められることや、完形、もしくは完形に近い土器が出土していることからも、火事などの跡片付けに伴って埋められた可能性が推測される。

出土した遺物は土師器香炉蓋（19）、土師器高杯（20・21）、須恵器杯蓋（22）、須恵器杯身（23～25）、須恵器皿（26）、須恵器鉢（28）、埴堀（27）、丸瓦（K1）、凸面に繩目タタキの認められる平瓦（K2）である。そのほか三彩陶器の破片も出土したが、これはE区で出土したものと接合したためE区で説明する。香炉蓋の内面には煤が付着しており、高杯（21）の杯部上面にも香炉蓋の径と同じ範囲に煤が付着していることから、両者はセットとして用いられたと考えられる。そういう意味では、高杯を香炉に転用しているといえる。

## 建物1（図41、42）

調査区中央付近で検出した。E区においてこの柱穴に対応するものが検出されなかつたことから、建物であったとする。調査区北側へ続くと考えられる。柱穴は1辺1.0～1.2mの方形に近い平面形で、柱穴の柱間距離は2.2mである。柱痕跡から柱の径は20cm前後といえる。遺構検出面は5.0m付近で、深さは検出面から0.4～0.6mである。輪線はほぼ真北方向に合わせている。柱穴埋土に含まれる遺物は極めて少なく、図化できるものは杯身（29）のみであった。ただ丹塗り土師器の小片も出土していることから、建物の時期は杯身（29）の時期よりも降ると考えられる。また柱穴検出面では土錐（D1）も出土したが、これについては建物1の柱穴埋土に含まれるかどうかは明確でない。

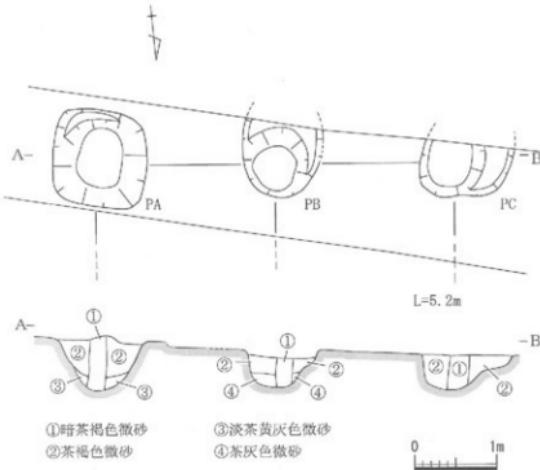


図41 建物1 実測図

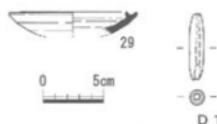


図42 建物1 関連出土遺物

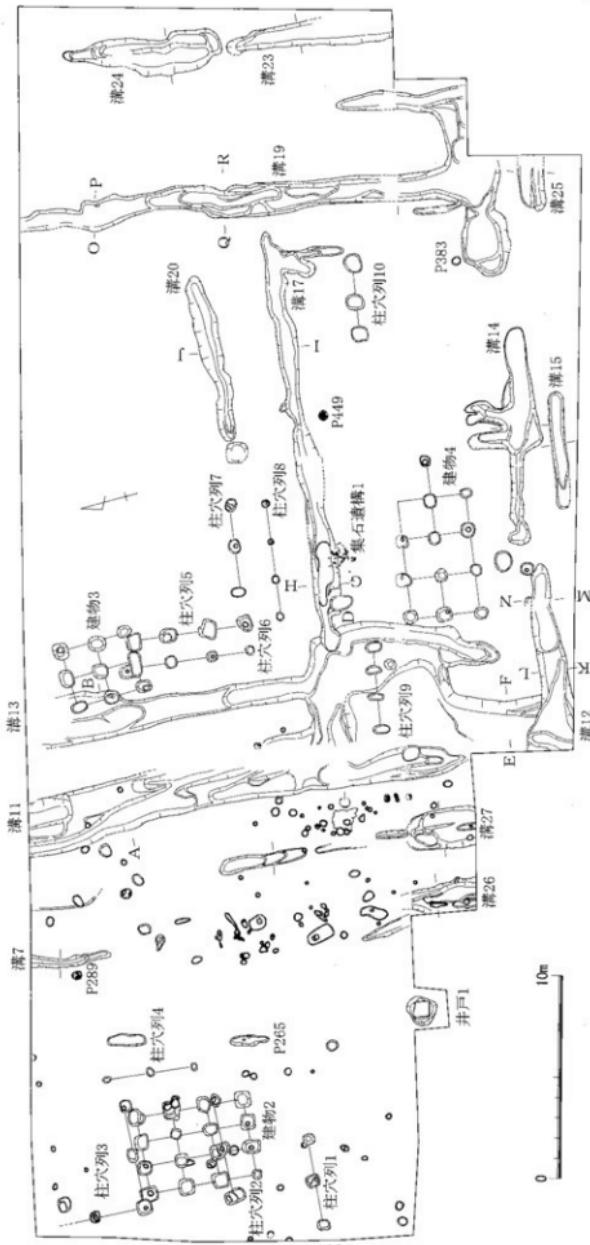


図43 E区古代1遺構図

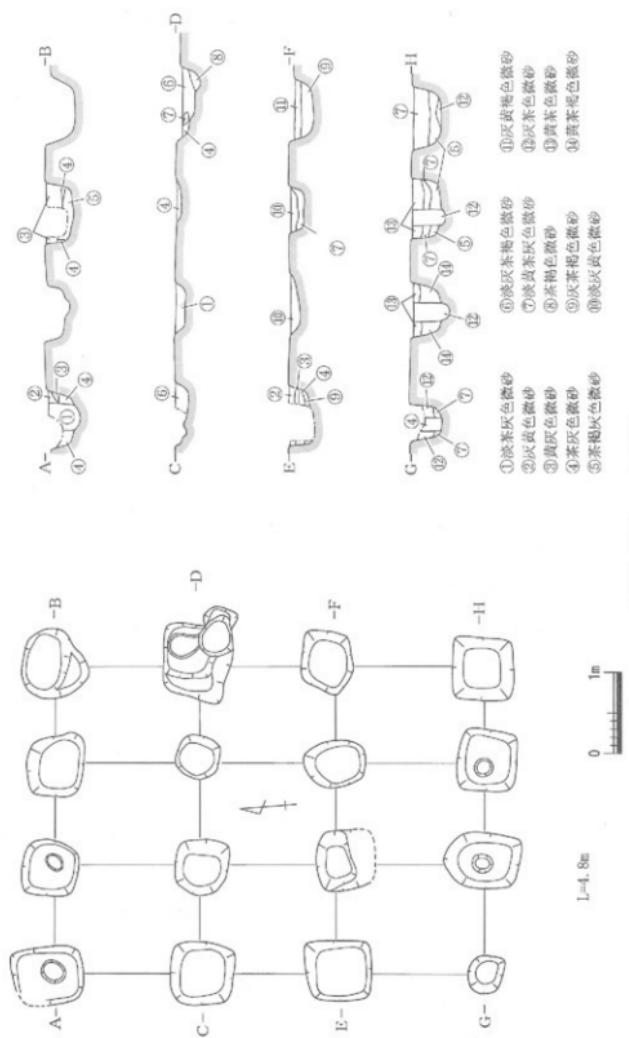


図44 建物2 実測図

## (9) E区(図43)

## 建物2(図44)

E区西側で検出した柱間が3間×3間の総柱建物で、棟方向はほぼ南北方向に合わせている。遺構検出面は4.8m付近で、最も浅い柱穴の底レベルは4.35mである。柱穴の掘り方は方形に近く一辺0.7m前後で、D区で検出した建物1の柱穴よりもやや小ぶりである。柱間距離は桁間で5.15m、梁間で3.72mを測る。床面積は19.16m<sup>2</sup>である。柱痕跡のある柱穴から、柱の大きさは径16~20cmといえる。ただ側柱と東柱とを比較すると、東柱の方が浅い傾向が指摘できる。また建物の平面形も長方形である。同じE区で検出された建物3も総柱建物で、建物2と比べると規模は小さいものの、柱穴の大きさはほぼ同じで、建物の平面形も方形である。総柱建物の上部構造については弥生時代以降の高床式建築である、通し柱・束柱構造と、5世紀以降に伝播する総束柱構造があることが指摘されている<sup>(3)</sup>。建物2は前者、建物3は後者の特徴をもっており、異なる上屋構造になつておらず、建物2は外郭に、建物3は内郭に位置する。建物2と建物3の上屋構造の違いは、外郭と内郭の性格の違いも反映させていることも考えられる。

遺物は上師器の小片が出土しただけであるが、建物2は柱穴列に一部削平されており、柱穴列よりも時期が古いといえる。

## 建物3(図45)

E区中央北側で検出した柱間が2間×2間の総柱建物で、棟方向はほぼ南北方向に合わせている。遺構検出面は4.85~5.0m付近で、最も深い柱穴の底レベルは4.6mである。柱穴の掘り方は方形で一

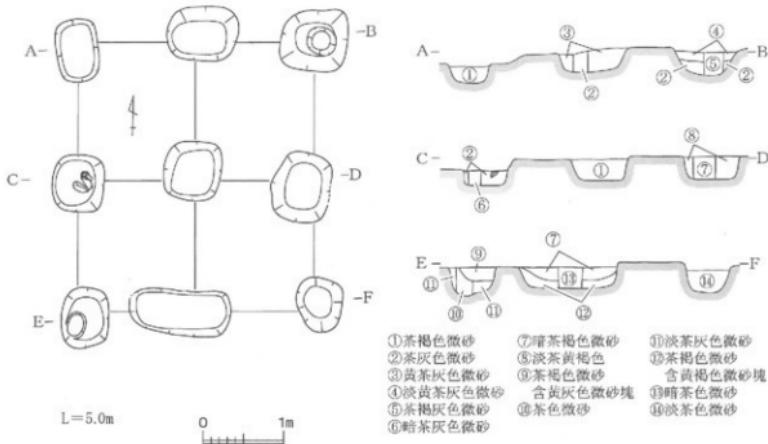


図45 建物3 実測図

辺0.6~0.8mである。D区で検出した建物1の柱穴掘り方よりも若干小さいといえる。柱間距離は桁間で3.25m、梁間で2.9mを測る。床面積は9.425m<sup>2</sup>である。柱痕跡のある柱穴から柱の大きさは径0.2~0.3mといえる。建物2とは異なり、柱穴の大きさや深さにはほとんど差が認められない。床面積自体はそれ程広くはないが、いわゆる総束柱構造であった可能性が高く、建物の壁体構造が倉としては格式の高い校倉であったことも推測される。一方、建物2については通し柱・束柱構造であることから、壁体構造は板を積み上げた板壁と推測される。建物2は外郭、建物3は内郭のそれぞれ異なる区画に属しており検出面や柱穴の底レベルも異なっている。内郭の方が外郭よりも一段高かったといえる。また内郭からは寺院的性格の強い遺物が、外郭からは工房的な遺物や遺構が出土していることからも、外郭と内郭は異なった性格であったことがうかがわれる。校倉は寺院に付属する倉としてよく認められるものであり、仏堂に転用されていたりもする。建物3の構造も内郭の性格を反映させている可能性が高い。

遺物は須恵器と土師器の小片が出土しただけであるが、最初の内郭の南西コーナー部の堀と考えら

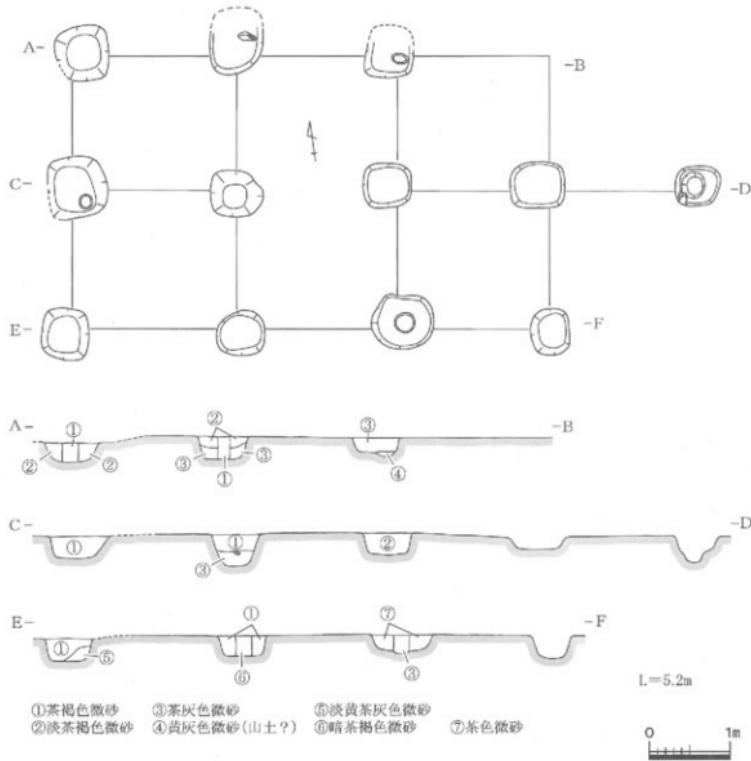


図46 建物4(内郭南門) 実測図

れる柱穴列5～8を切っていることや、最初の内郭溝の内側溝である溝13を切っていることから、内郭当初の建物ではないといえる。器種等は不明であるが、土師器の小片には丹塗りが認められる。極めて断片的な根拠からではあるが、10世紀前後の時期と推測される。

#### 建物4（内郭南門）（図46）

E区中央南側で検出した掘立柱建物で、柱間が2間×3間の総柱建物であるが、その位置から内郭の南門と考えられる。遺構検出面は5.0m付近で、最も深い柱穴の底レベルは4.7mである。柱穴の掘り方は方形で、一辺0.4～0.7mである。柱痕跡のある柱穴から、柱の大きさは径0.15～0.2mといえる。柱間距離は建物であるとすると、桁間で5.8m、梁間で3.25mである。門とするならば、4本の本柱に8本の控柱があることから、三間一戸八脚門となり、門の正面の柱間は1.95mで、東側の本柱の延長部分に柱が一本付属する。北西コーナー部分の柱穴が最初の内郭溝の内側溝である溝13を僅かに切っていることや、10世紀の内郭の南限の溝である溝14が建物4の正面でL字形に曲がって途切れることから、10世紀の内郭に伴う建物である可能性が強い。

柱穴埋上から出土した遺物は極めて少量で断片的であるが、丹塗り土師器の小片が認められることがから、10世紀の時期と考えられる。そうすると建物5は10世紀の内郭の中央付近に位置することになり、しかも、内側における門の正面には通路の礫敷の残欠とも考えられる小縫（集石遺構）も認められることから、内郭南門の可能性が高いといえる。

#### 柱穴列1（図47）

E区西側で検出した柱穴列で、建物2の目隠し扉の可能性がある。遺構検出面は4.8m付近で、柱間距離は2.4mと2.0mである、柱穴の掘り方は方形で、一辺0.5～0.6m、最も深い柱穴の底レベルは4.5mである。

出土遺物は極めて小片の須恵器が出土したのみであった。

#### 柱穴列2（図48）

E区西端で検出され、建物

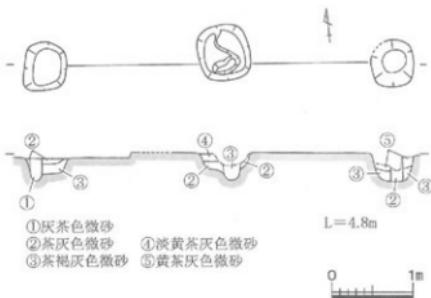


図47 柱穴列1 実測図

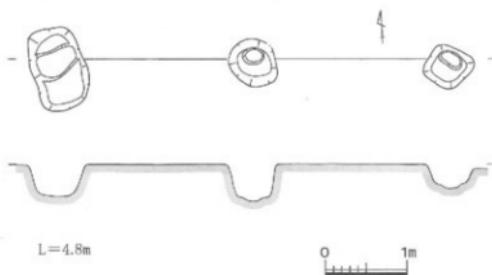


図48 柱穴列2 実測図

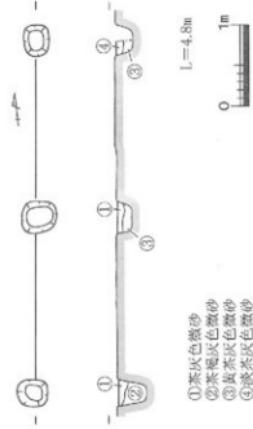


図50 柱穴列4 実測図



- ① 黄茶灰色微砂
- ② 黄茶灰白色微砂
- ③ 黄茶灰色微砂
- ④ 淡茶灰白色微砂
- ⑤ 黄茶色微砂

- 44 -

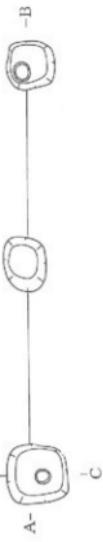


図50 柱穴列4 実測図

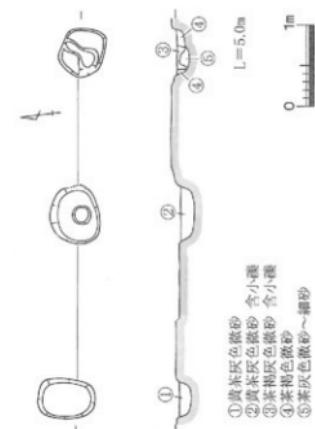


図51 柱穴列7 実測図

- ① 淡茶褐色微砂
- ② 淡茶褐色微砂
- ③ 黄茶灰白色微砂
- ④ 黄茶灰色微砂
- ⑤ 黄茶色微砂



図49 柱穴列3 実測図



- ① 淡茶褐色微砂
- ② 淡茶褐色微砂
- ③ 黄茶灰白色微砂
- ④ 黄茶灰色微砂
- ⑤ 淡茶褐色微砂
- ⑥ 黄茶色微砂
- ⑦ 黄茶色微砂



L=4.8m

0 1m

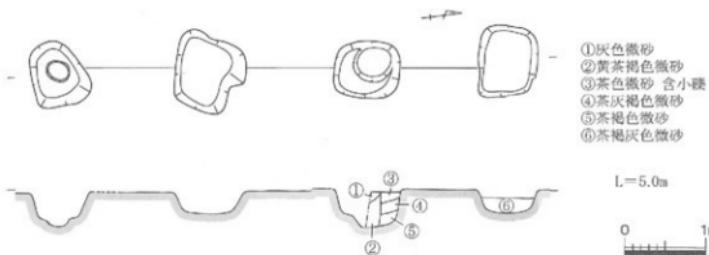


図52 柱穴列5 実測図

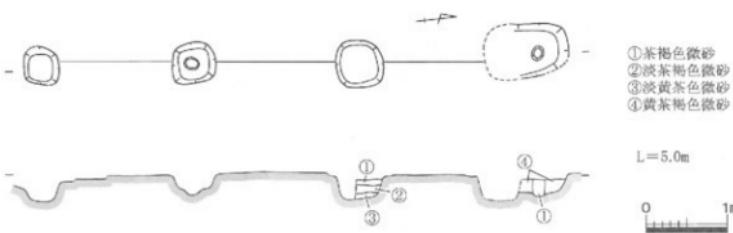


図53 柱穴列6 実測図

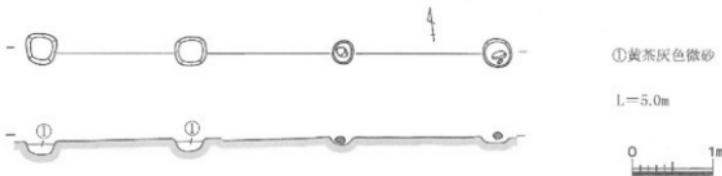


図54 柱穴列8 実測図

2の柱穴を一部削平している。遺構検出面は4.8m付近で、柱穴の平面形は方形を意識しているようであるが、不整形に近い方形とでもいえるような平面形になっている。柱間距離は2.5mである。最も深い柱穴の底レベルは4.4mである。

出土遺物は須恵器の小片が若干出土したのみである。

## 柱穴列3 (図49)

E区西端で検出され、建物2の柱穴を一部削平している。検出当初は建物の可能性を想定していたが、L字状になる平面形にしか柱穴を検出できなかつたため、柱穴列とした。遺構検出面は4.8m付近で、柱穴の平面形は一辺0.5~0.7mの方形である。柱間距離は2.5mで、柱痕跡のある柱穴から柱の大きさは径0.15~0.2mといえる。

出土遺物は須恵器と土師器の小片が出土したのみである。

## 柱穴列4 (図50)

E区西端で検出され、建物3の目隠し塀とでもいえる位置にある。遺構検出面は4.7m付近で、柱穴は一辺0.3~0.4mと小ぶりながらも方形の平面形を意識している。柱間距離は2.0mで最も深い柱穴の底レベルは4.35mである。

出土遺物は土師器の小片が出土したのみである。

## 柱穴列5・6・7・8 (図51、52、53、54)

E区中央付近で検出され、最初の内郭の南西コーナー付近を画する塀である。内郭溝の内側溝がこの部分でL字形に曲がり途切れることや、内郭から外郭へ緩やかな傾斜をつくり出していることから、内郭から外郭への通路があったと推測され、内郭南西コーナーの塀は、それを意識している可能性が高い。したがって、柱穴列5・6・7・8は内郭出入口の目隠し塀ということになる。柱穴列5の遺構検出面は5.0m付近で、柱穴の平面形は一辺0.7~0.8mの方形の平面形である。柱間距離は1.8mで最も深い柱穴の底レベルは4.55mである。柱穴列6の遺構検出面は5.0m付近で柱穴の平面形は一辺0.4~1.0m、平均的には0.5m付近で、一辺0.5~0.7mの方形の平面形である。最も深い柱穴の底レベルは4.6mである。柱穴列7の遺構検出面は5.0m付近で、一辺0.5~0.7mの方形の平面形である。最も深い柱穴の底レベルは4.8mである。柱穴列8の遺構検出面は5.0m付近で、柱穴の平面形は一辺、もしくは径0.3m前後の方形ないし、円形の平面形である。最も深い柱穴の底レベルは4.75mである。根石とも考えられる礎を入れている柱穴もある。

いずれの柱穴列からも出土した遺物は少なく、須恵器と土師器の小片が若干出土したのみである。

## 柱穴列9 (図55)

E区中央南側で検出された。最初の内郭溝が柱穴列9の付近、すなわち南西コーナー部分でL字状に曲がることや、この部分に合わせて目隠し塀状の柱穴列が2重にめぐつてないことから、内郭から外郭への通路であることが推定された。柱穴列9はその通路の中央付近に並んでいる。

柱穴列9はほかの柱穴列とは異なり、柱痕は認められず、断面形も傾斜が緩い台形であり、深さもかなり

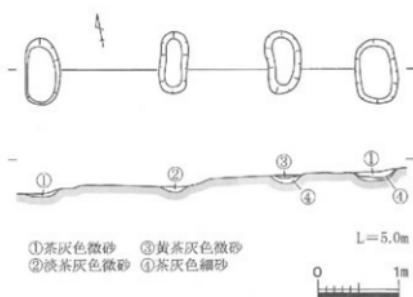


図55 柱穴列9 実測図

浅い。東端の柱穴上面と、西端の柱穴上面のレベル高の差は0.3mほどもあるが、柱穴の深さは0.1m前後と一定に近い。現況は上面が削平を強く受けた結果ではなく、元來の柱穴列の特徴を示している可能性が強いようと思われる。そうすると、柱穴列9は堀などではなく、やや傾斜のある通路に設けられた足場などの痕跡の可能性が高いように思われる。具体的には丸太、もしくは板材を横にして、若干地面に埋めたときなどの痕跡と推測されるのである。

出土遺物はほとんどなく、埋土から土師器の小片が若干出土したのみである。

#### 柱穴列10（図56）

E区東側で検出された柱穴列で、遺構検出面は5.05m付近である。一辺0.8mほどの方形の掘り方で、柱間距離は1.5mである。柱痕跡のある柱穴から柱の大きさは径0.25mといえ

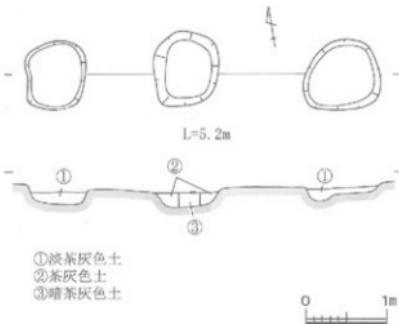


図56 柱穴列10 実測図

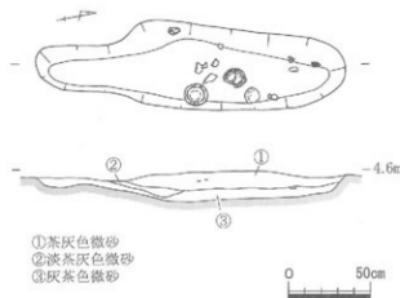


図57 P265 実測図

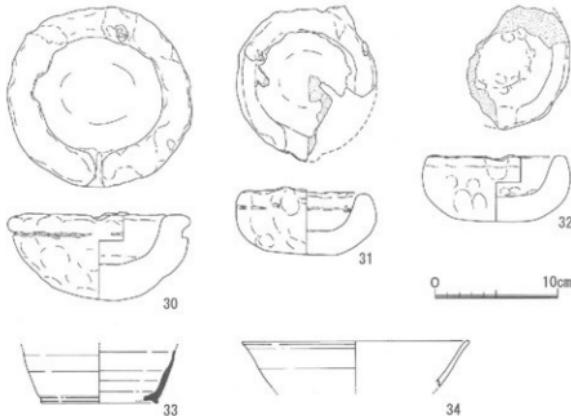


図58 P265 出土遺物

る。この柱穴列は最初の内郭の中央付近となる。この柱穴列の東端で、内郭南側の溝が南側へL字形に曲がっていることからも、何らかの意味があったものと思われる。内郭中央に設けられた目隠し塀、もしくは控柱のない本柱のみの門などの可能性が推測される。

出土遺物はほとんどなく、埋土から須恵器の小片が若干出土したのみである。

#### P 265 (図57, 58)

E区西側で検出された土壙である。長さ1.9m、幅5.1mの長楕円形の平面形を呈する。遺構検出面は4.6m付近で、深さは検出面から0.2mである。断面形は台形で、遺物は遺構底面付近から出土した。規則的な平面形ではないが、長軸の方向は建物2や周囲の柱穴列と一致している。

出土遺物は土壙が3個体(30~32)、須恵器杯(33)、縄糸陶器碗(34)である。土壙の内面には熔着物が厚く、その表面には縁青も認められる。銅製品を鋳造するために用いられたのであろうことを示している。時期は9世紀後半から10世紀初頭である。

#### P 289 (図59)

E区西側で検出した土壙で、径0.4mの円形の平面形を呈する。ただし、西側は中世の溝によって削平されている。削平を受けていない部分での遺構検出面は4.7m付近で、深さは検出面から0.18mである。断面形は逆円錐形で、角礫によって埋められていた。

土器などの遺物は全く出土しなかった。

#### P 449 (図60)

E区中央付近で検出された土壙で、径4.4~5.1mのややいびつな円形の平面形を呈する。遺構検出面は5.2m付近で、深さは検出面から1.4mである。断面形は逆台形で、中央部分が若干くぼむ。遺構内は円礫によって埋められていた。

土器などの遺物は全く出土しなかった。

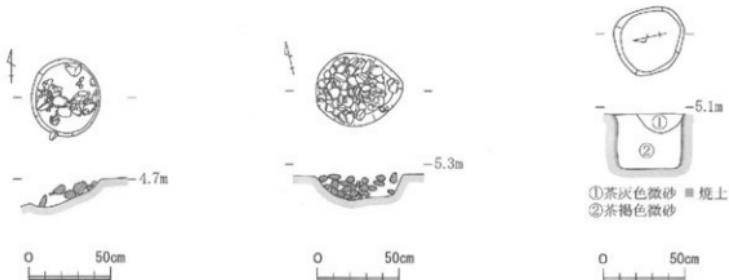


図59 P289 実測図

図60 P449 実測図

図61 P383 実測図

P 383 (図61)

E区東南コーナー付近で検出された土壙である。径0.4mの円形の平面形である。内郭側面が被熱により若干焼化していることから、簡単な炉状遺構とでもいえるものである。遺構検出面は5.0m付近、深さは検出面から0.3mである。壁部は直立しており、底面は平坦である。埋土は2層で①層から土師器の小片が出土した。

井戸1 (図62、63)

E区南西部で検出した井戸である。長径1.5m、短径1.3mのややいびつな平面形の掘り方を呈し、断面形は台形である。遺構検出面は4.6m付近で、井戸底のレベル高は3.4mである。掘り方底面は長径1.1m、短径0.98mのややいびつな方形をした平面形である。井戸枠は内側が0.6m×0.7mの方形の平面形で、底面から0.2m上がった位置に桟木が組まれており、その外側に幅0.3m長さ0.28mの側板が並べられている。桟木は一辺が4cmの角材で、表面は平滑に加工している。ただし側板・桟木とも西側と南側の面しか残存していない。廃絶時に抜かれたと思われる。埋土は4層だが井戸枠内の堆

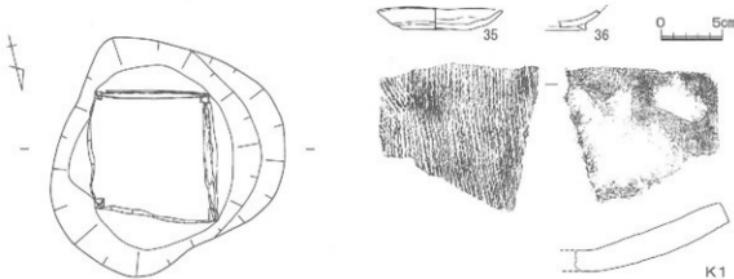


図63 井戸1 出土遺物

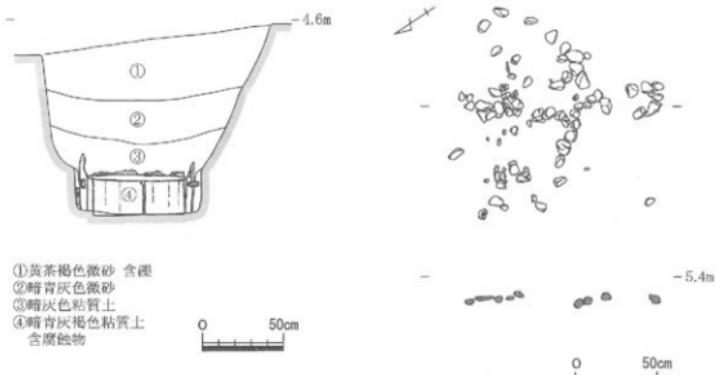


図62 井戸1 実測図

図64 集石遺構1 実測図

積である④層と、それより上層の①～③層に大きく分けられる。ただし全体的に出土した遺物は少ない。④層からは凸面縄目タタキのある平瓦（K 1）と、炉壁片が出土し、①層の上半からは土師器皿（35）、土師器碗（36）が出土した。土師器碗（36）は小片で器表面の残存状態もよくないが、黒色土器の可能性が高い。土師器皿（35）が最終埋土より出土したことから、12世紀後半には井戸12は廃絶していたといえる。また井戸枠内から炉壁が出土していることからも、この井戸が位置する外郭の性格の一端を示唆しているともいえる。

#### 集石遺構 1（図64）

E区中央付近で検出した集石遺構で、 $1.5 \times 1.0\text{m}$ の範囲に長さが10cm前後の河原石がまとまって検出された。ただし、遺構内に堆積したというような状況ではなく、礫は面的に薄く分布する。また、周囲からも礫が散在的に出土していることから、本来の集石の範囲はかなり広かったと考えられる。時期については最初の内郭溝である溝17の埋土上面にあり、次の時期の内郭南門と推測した建物4の正面に位置することから、南門からの通路上に敷かれていた敷石の可能性が高いと考えられた。遺構検出面は5.3m付近で、土師器の小片が礫の間で若干出土した以外は遺物は出土しなかつた。

#### 溝

E区で検出された溝は、内郭を区画する溝である。第IV章でハガ遺跡の区画の構造については検討するが、ハガ遺跡は一辺約100mの外郭（溝3・溝5・溝6・溝7・溝8・溝15・築地で区画）とその中をさらに東西幅約30mの範囲を区画する内郭によって構成されている。E区では内郭の南半に相当する部分を調査したことになる。区画の存続幅は8世紀（7世紀末に遡る可能性あり）から12世紀まで、I～IIIの3小期の変遷がとらえられる。ここでは検出された溝を3小期にまとめて説明する。

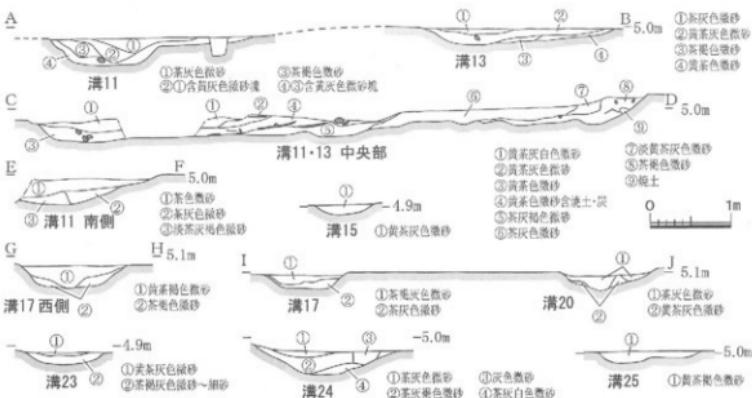


図65 古代溝 断面図(1)

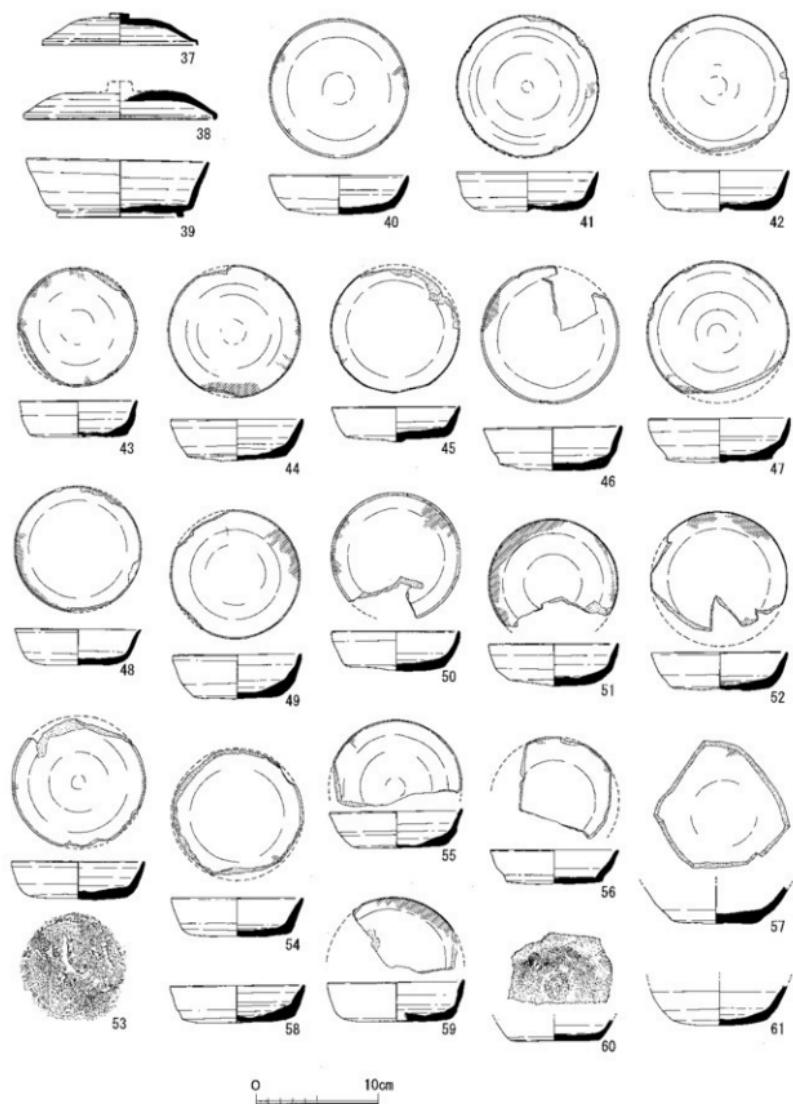


図66 I期内郭溝出土遺物(1)

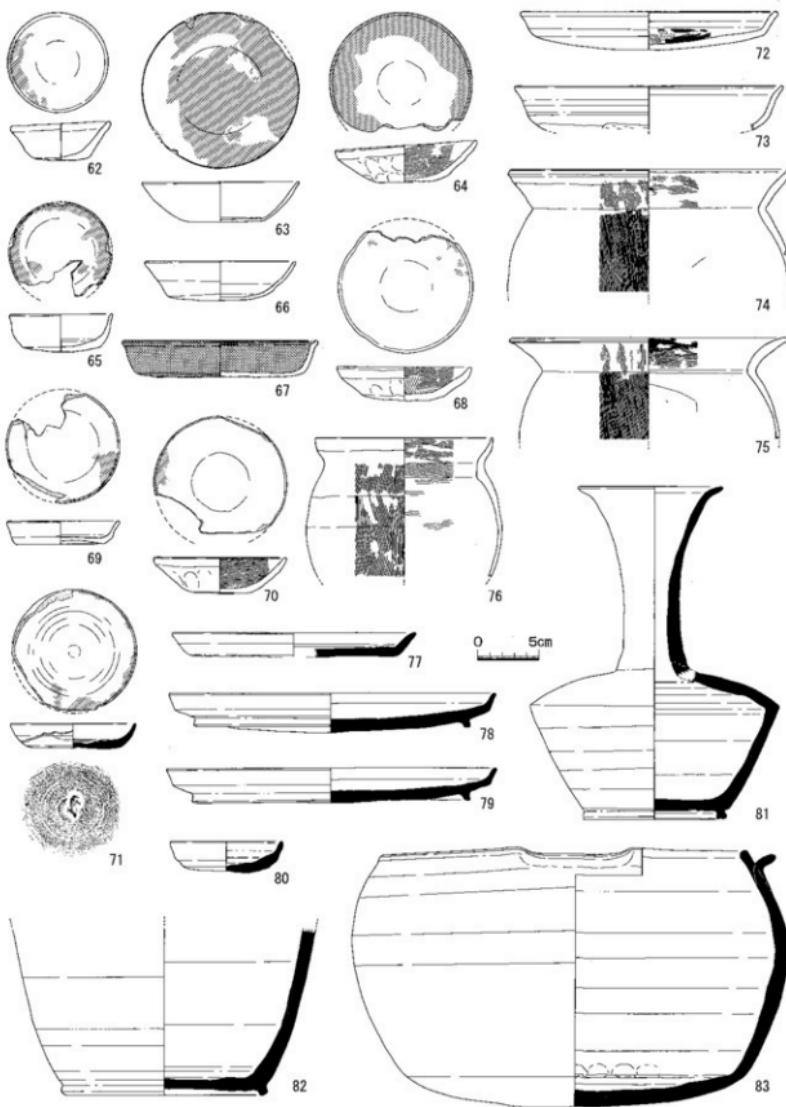


図67 I期内郭溝 出土遺物(2)

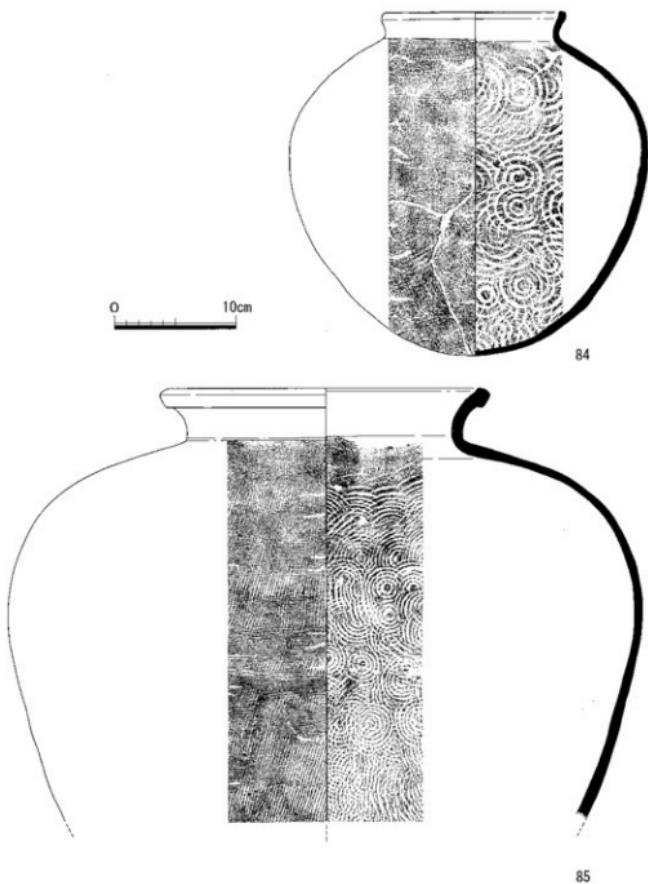


図68 I期内郭溝出土遺物(3)

I期(溝11・溝13・溝15・溝20・溝25・溝17・溝23・溝24)(図65、66、67、68、69、70、71、72)  
A区で検出した溝2・溝3は、E区で検出した溝24・溝23と一对になって内郭の東側を画する区画溝で、東側区画溝の内側溝である溝23はE区南東コーナー付近で検出された溝25へ対応する。溝25は9mほど途切れで溝15に続く。内郭南限部の外側の溝については調査区外に推定されるため確認できないが、内郭西側については内外の区画溝が検出できた。内側に相当するのが溝13で、外側に相当するのが溝11である。ただし内郭南西コーナー付近は、II期の内郭南限溝である溝12によって削平さ

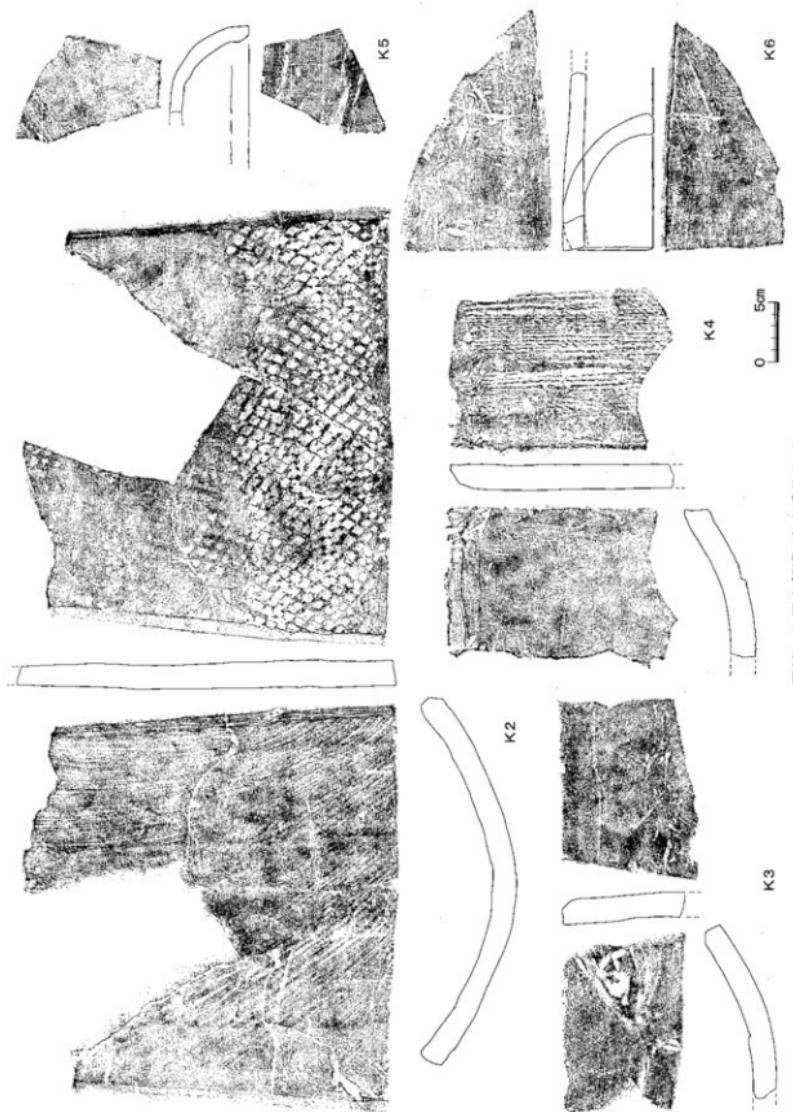


図69 1期内部窯 出土遺物(4)

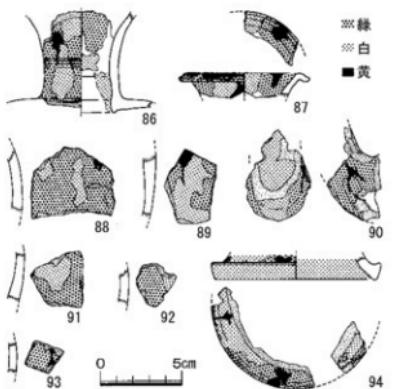


図70 I期内郭溝 出土遺物(5)

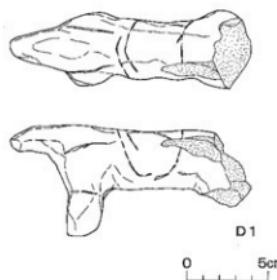


図71 I期内郭溝 出土遺物(6)

れているため明確ではない。溝17と溝20は内郭の内部をさらに小区画するもので、南北幅で約11mの空間を南側に画することになる。各溝の共通する特徴としては、検出面での形状も輪郭が不整形で、長楕円形の土壤状であり、溝23と溝24のようになされた土壤が並んでいるようで、いわゆる官衙遺跡の区画溝と

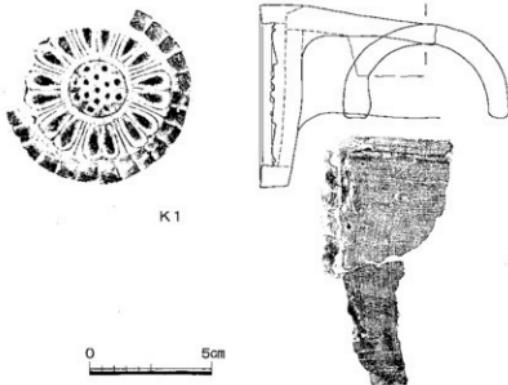


図72 I期内郭溝 出土遺物(7)

してみられる蕭溝とよく似ている。底面も一定でなく高低差が0.1mほどもあり、かなり凹凸が認められる。近世において粘土採掘を目的とした穴などは、上面が溝状であるものの、内部は粘土を採掘した単位ごとに凹凸がある。蕭溝はこの近世の粘土採掘穴との共通点が看取され、2本の溝が平行にあることからも、溝に挟まれた部分に盛り土を行った築地こそが区画の指標ではなかったかと推測されるのである。築地上面には瓦を葺いていた可能性もあるが、古代～中世の絵画資料を見ると、築地上面に板を葺いたものもあり、そのような構造の築地であった可能性も考えられる。

さて内郭西側の区画である溝13は、内部南西コーナー付近で、溝が内側へ逆L字形に曲がる。その部分は溝幅が1.2mから4.0mへと広がっており、さらに傾斜が緩やかになる。足場の痕跡と推測され

る柱穴列9や目隠し塀と推測される柱穴列5・6・7・8があることから、外郭から内郭への通路ではないかと考えられる。反対の東側については調査区の範囲との関係で微妙であるが、溝23の形状を見る限り通路はなかった可能性が高い。

出土した遺物は多く、とくに溝13・溝14では灰や焼土に混じって完形や完形に近い土器がまとまって出土した。溝13がL字形に曲がる通路部分の断面を見ると（図64 溝11・13中央部）、内郭側から外郭側へ灰や焼土が落ち込むように堆積しており、溝13の東岸部では、被熱によって赤化している部分もあった。おそらくⅠ期の内郭は火災等の被害を受けた可能性が高く、その後の後片付けの際に内郭溝が埋められたと推測され、その結果多くの遺物が含まれることになったと考えられる。

出土遺物は須恵器杯・同壺・同皿・同鉢・同甕、土師器杯・同皿・同甕・瓦、瓦塔、三彩陶器多口瓶、土馬、瓦塔と多彩である。須恵器の杯は高台が付くもの（杯B）と付かないもの（杯A・C）があり、大半が付かない。付かないものの薄手で精良な粘土を用いたもの（杯A）と、そうでないもの（杯C）とがあり、量的には圧倒的に杯Cの出土量が多い。しかも、杯Cには全て口縁部内面に煤が付着しており、灯明皿として用いられたことがうかがえる。土師器の椀や、小型の皿も同様に煤が付着しており、灯明皿として用いられたと考えられる。灯明痕のある杯や皿は、ハガ遺跡の南にある古代寺院である幡多磨寺<sup>(4)</sup>からも出土しており、法会の灯明に用いられた、いわば寺院から出土する遺物といえる。そのほか、須恵器というより瓦質に近い大形の鉢（83）も出土しており、片口が付属する。瓦鉢についても、仏具の1つであり、奈良県・川原寺からも出土している。壺（81）はほぼ完形で、表面には薄く自然釉が認められる。優品で牛窓町寒風窯産と考えられる。土師器のうち、椀（63・66・67）は極めて薄手で、胎土も精良であり、胎土的にも、在地の土器とは思われない。おそらく畿内からの搬入品と考えられる。D区で検出した内郭溝である溝13から出土している土師器高杯（20・21）もそれぞれ産地は異なるがおそらく畿内からの搬入品と考えられ、畿内からの搬入品が多いといえる。三彩陶器はかなり細かな破片となって出土し、しかもD区の溝13、E区の溝13、溝11から接合資料が出土した。器形は多口瓶であるが、口縁部が2種類（86・87）あり、別々の多口瓶が2個体もしくは多口瓶と瓶がそれぞれ1個体ずつは存在していたものといえる。いずれも奈良三彩である。瓦は軒丸瓦と平瓦・丸瓦があり、丸瓦は溝17から出土し、他に平瓦の小片も出土した。軒丸瓦（K1）は複弁8弁蓮華文で、中房は突出し、花弁との間に凹線がめぐる。蓮子は円錐形で、数は1+6+8である。外縁には面違幅線文が施されているが、面違鋸齒文の変形と考えた方がよいと思われる。瓦頭部と丸瓦部の接合技法は、別々につくった瓦頭部と丸瓦部を接合する技法で、さらに瓦頭部の内区と周縁部は別個の粘土でつくっている。また、周縁部の背後は、丸瓦との接合部のみ削りとっている。同様の技法は滋賀県南滋賀廢寺<sup>(5)</sup>でみられる。K1の焼成は良好である。同文の軒丸瓦が熊山町油瀬神社（熊山遺跡）<sup>(6)</sup>、備前市寺奥（廢寺）遺跡<sup>(7)</sup>からも出土している。いわゆる川原寺式の系譜を引くものであり、7世紀末～8世紀初頭の時期と想定される。Ⅰ期の内郭溝から出土した土器群は8世紀末～9世紀初頭の幅のものがほとんどであり、Ⅰ期の内郭の下限を示している。この軒丸瓦については上限を示している可能性がある。平瓦（K2～K4）や丸瓦（K5・K6）についてみても、凸面におけるタタキは格子目もしくは網目であり、菱形は含まれていない。また凹面の布目も比較的細かく軒丸瓦との組み合わせとしては、あまり矛盾がないようである。ただし瓦については転用が可能であり、より慎重な検討が必要である。土馬（D1）は土師質で赤橙色である。溝13が通

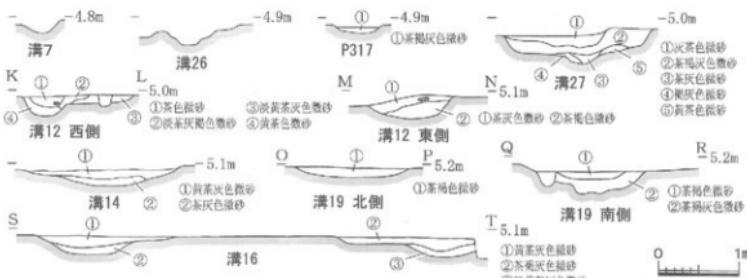


図73 古代溝 断面図(2)

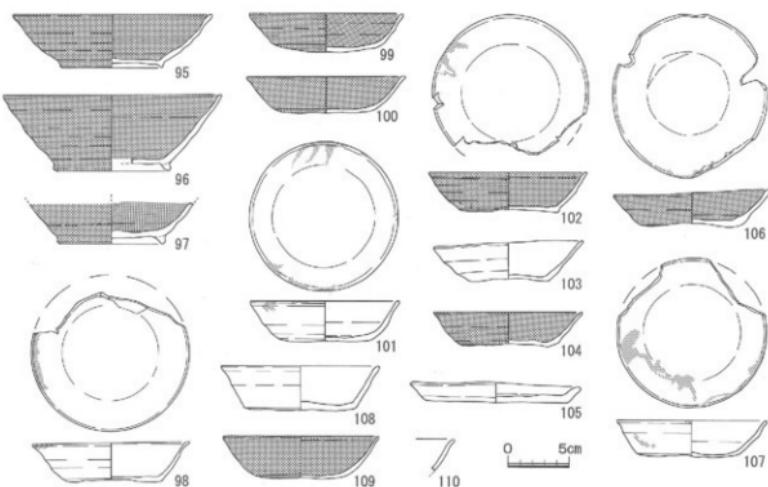


図74 II期内郭溝 出土遺物

路状に逆L字形に曲がる地点から出土した。頭部や前足は欠損していたが、鞍や尻繋を線刻で表現している。瓦塔は小片であるが、須恵質のものが出土した。瓦塔の大半は包含層掘り下げ中の出土であり、内郭溝出土の瓦塔についても後でまとめて説明する。

#### II期（溝12・溝14・溝19下層・溝26下層・溝27・溝7）（図73、74、75）

I期の溝が廃絶した後に新たに設定された区画溝である。区画される内郭の規模は変わらないが、西へ5m平行移動させている。この移動はI期における内郭の焼亡に伴うものと考えられる。そして、II期において若干西へ移動した内郭は、Ⅲ期も同じ位置である。溝の特徴はI期と同じで、長楕円形の土壤が連続した形状を呈し、現況での幅は0.4~1.3mである。遺構の残存状態が良くないため、I

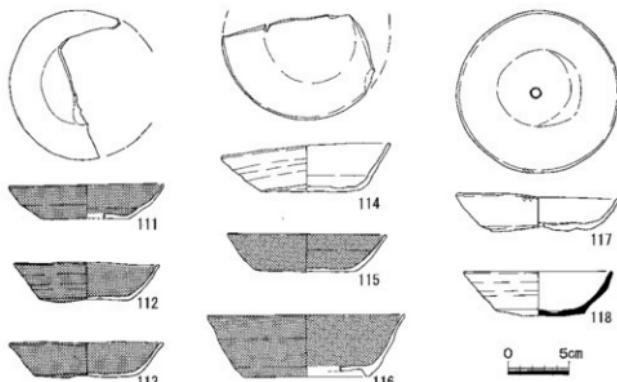


図75 II期内郭溝上面出土遺物

期の溝よりも途切れている部分が多い。とくに西側については顕著である。これについてはⅠ期に外郭との通路が想定されたことから、Ⅱ期においても同様の施設があり、そのため区画溝の遮断もそれ程厳密でなかったのであろうか。ただし西側の検出面が東側と比べて0.3mほども低いことが示しているように、西側区画溝の上面は中世水田の開発によってかなり削平されており、その影響を受けた可能性が高い。

遺物は、溝埋土中と溝検出時から出土したもので、杯や碗などの食膳具ばかりである。また、圧倒的に土師器が多く、丹塗りを省略されているものも認められる。杯や皿（98・101・102・105・106・110・113・116）には灯明痕と考えられる煤が口縁部端部に付着している。Ⅰ期と異なり、灯明痕が認められない杯も比較的多く認められることは、杯（117）のように中央に穿孔があるものもあることから、杯や皿をいくつか重ねて灯明皿に用いた可能性が推測される。近世の灯明皿については同様の用い方をされており、12世紀後半の多量の皿や杯を出土した吉野口遺跡<sup>(8)</sup>でも、灯明痕のある皿とない皿の比は1：15ぐらいであった。杯や皿を重ねて灯明皿に用いるのはⅡ期、すなわち9世紀末～10世紀にかけて行われるようになったということとも、ハガ遺跡の様相は示唆しているともいえる。このほか平瓦の破片も若干出土した。

### III期（溝26上層・溝19上層）（図73、76、77）

Ⅰ期やⅡ期と比べ遺構の残存状況は良くないが、基本的にはⅡ期の溝を踏襲している。溝底面の凹凸については溝当初の形状も反映させているものの、何度かの部分的な掘り直しによった結果、凹凸ができるものも含まれている。溝19の南側については、埋土が2層で、上層からは11世紀～12世紀の遺物しか出土しないが、北側については上層しかなく、Ⅲ期になってⅡ期の溝を北側へ延長させた可能性もある。ただし、いずれも溝上面は後の水田開発により、大きく削平されており、Ⅱ期の溝は削平され、Ⅲ期になって掘り下げた部分だけが残存した可能性も高いように思われる。

出土遺物は少ないが、溝26の上層から偏前焼碗（119）が出土しており、この碗は間壁編年Ⅰ期前葉であることから12世紀代といえる。さらに溝26を検出中に出土した土器（123～126）は出土レベルと調査区南壁部から観察し得た土層関係から、溝26埋没後、あるいはぎりぎり最終埋土に属する土器

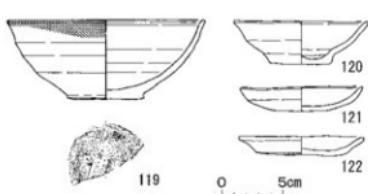


図76 III期内郭溝 出土遺物

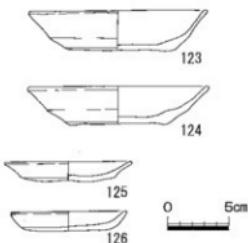


図77 III期内郭溝上面 出土遺物

群である可能性が高く、時期は12世紀後半であり、III期の下限を示している。溝19の上層からも11～12世紀の土器が出土している。このほか溝26の上層からは泥塔の破片も出土している。I期やII期の遺構からは出土していないことから、古代の包含層から出土した多くの泥塔はIII期に属する可能性が高いといえる。

#### 包含層出土遺物

ハガ遺跡の包含層からは多くの遺物が出土したが、大半は古代に属する。低位部における近世水田の開発にあたり、高位部の包含層がそのまま切り崩されて埋め立てられていることからも、中世以降の包含層はほとんど削平された可能性が高い。中世に属する遺構が比較的多いにも関わらず、遺物の出土が少なかったのはそのためと思われる。したがって、中世の遺構を掘り下げた後の古代遺構精査時に出土した遺物のほとんどは古代に属するといえる。ここでは遺構に属しない包含層出土遺物を説明するが、泥塔については近世水田における包含層の2次堆積土中からも出土しており、古代の包含層出土以外のものも含める。

#### 陶硯（図78、79、80）

円面硯が7点で、そのうち蹄脚硯（D5・D7）が2点、圈足硯（D1・D2・D3・D4・D6）が5点である。ただし（D5）と（D7）は同一個体、（D2）と（D4）と（D6）も同一個体の可能性があり、個体数としては3個体といえる。そのほか風字硯（D8）、転用硯（130・131）も出土している。円面硯は全て灰色の須恵質で、蹄脚硯には鈍色の自然釉がかかっている。転用硯（130）は須恵質杯の裏の高台内側に墨痕が認められ、転用硯（131）は須恵器杯の内側に墨痕が認められる。形象硯と思われるものも2点出土しており、1点は羊形硯（D10）の頭部片である。部分的な破片であり、しかも剥離している部分も目立つが、角や口から鼻にかけての特徴から羊形硯と判断される。灰褐色の須恵質で、部分的に自然釉が認められる。角には線刻で角紋、眼球は竹管で表現している。もう1点は獸形の把手（D11）ともいえるものであるが下端が平坦であることから、壺などの把手ではなく、それ程高さのないものの把手、獸形硯の把手と推測される。灰色の須恵質であるが、羊形硯と比べると表現が稚拙な感じを受ける。台形の鼻を作り出し、両面に線刻で目、口、牙を描く。一見、全体の形状から猪を想像させられるが牙が上顎からのがれていることから、熊などを表現している可能性が高い。

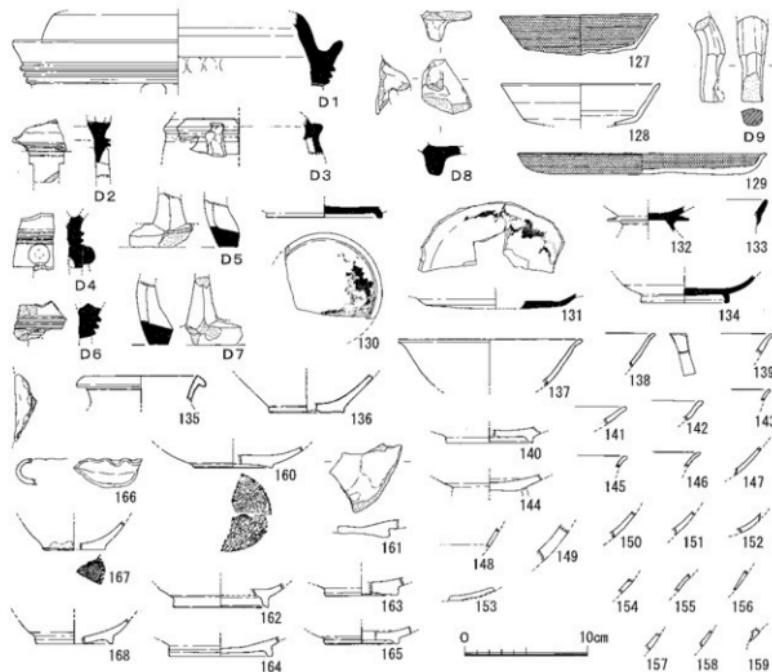


図78 包含層 出土遺物(1)

土師器（図78-127・128・129）

土師器も多数出土したが完形に近いものは少ない。（129）は皿で8世紀、（127・128）は杯で9世紀の時期である。

須恵器（図78-132・133）

（132）は突帶が水平に張りだして、かなり高い高台のつく皿である。（132）は小鉢と台皿を一体にした六器の模倣である可能性が推測される。六器とは仏器の1つであり金銅製の高台のついた小鉢を台皿の上に重ねたもので、そういうたったセットを六個で1具として用いるものである。同様の器形は黒色土器にもある。（133）は壺の破片である。

縁釉陶器（図78-137~168）

32点が出土した。器形は碗と耳皿であるが、大半が碗である。ただし小片であるので皿も含まれていると思われる。京都産が9割を占め、若干尾張産が伴う。

灰釉陶器（図78-134）

図化できたのは1点で他に2点ある。

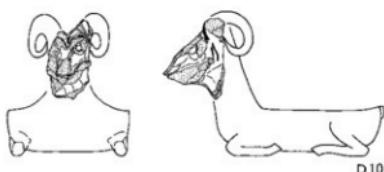


図79 包含層 出土遺物(2)

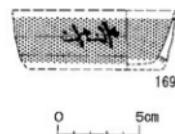


図81 包含層 出土遺物(4)

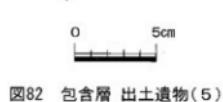
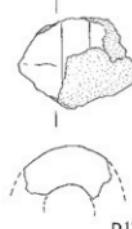


図82 包含層 出土遺物(5)

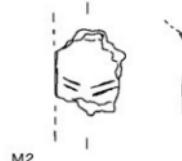
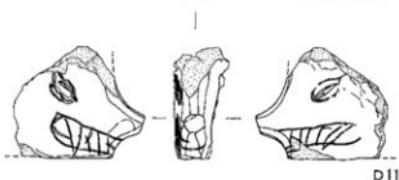


図80 包含層 出土遺物(3)



図83 包含層 出土遺物(6)

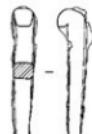


図84 包含層 出土遺物(7)

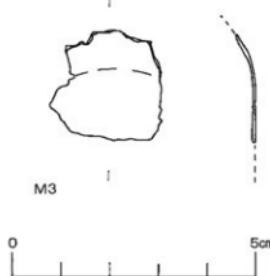


図85 包含層 出土遺物(8)

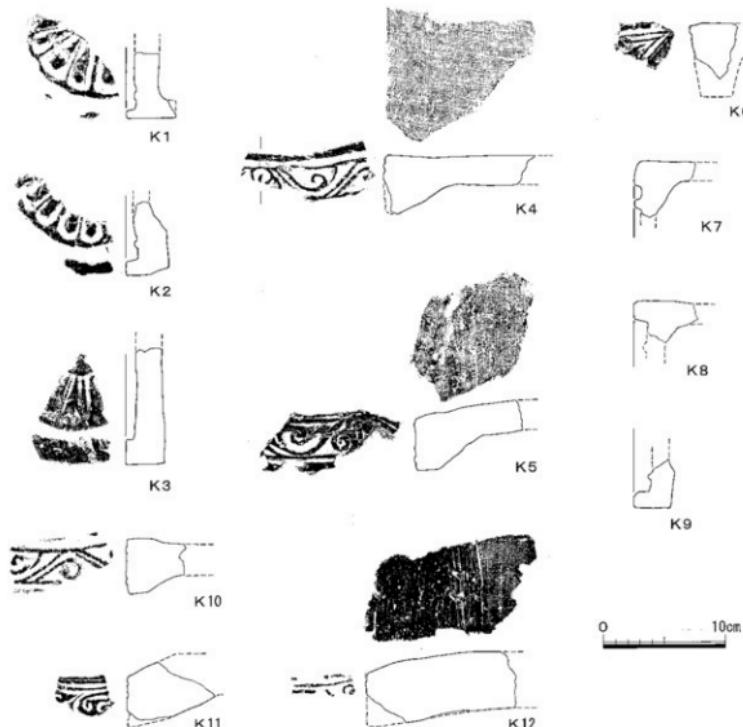


図86 包含層(A~D区)出土遺物(9)

白磁 (図78-135)

壺が1点ある。

青磁 (図78-136)

越州窯産の確で、見込みに重ね焼き痕が認められない。

獸足 (図79-D 9)

1点だけ出土した。土師質で赤橙色の色調を呈する。胎土も緻密で、丁寧に面取りして仕上げている。どのような器形に付属するのかは不明である。

墨書き土器 (図81-169)

II期内郭の南東コーナー付近で出土した。丹塗りを施した土師器の杯の口縁部の小片であるが、墨書きは鮮明に残っている。墨書きは「寺寺」と読める。土器の時期から、この墨書き土器はII期に伴うものといえる。

フイゴ羽口 (図82-D 12)

A区の炉状遺構周辺で出土した。中世水田層掘削時に出土したため、一応古代の遺物として取り上

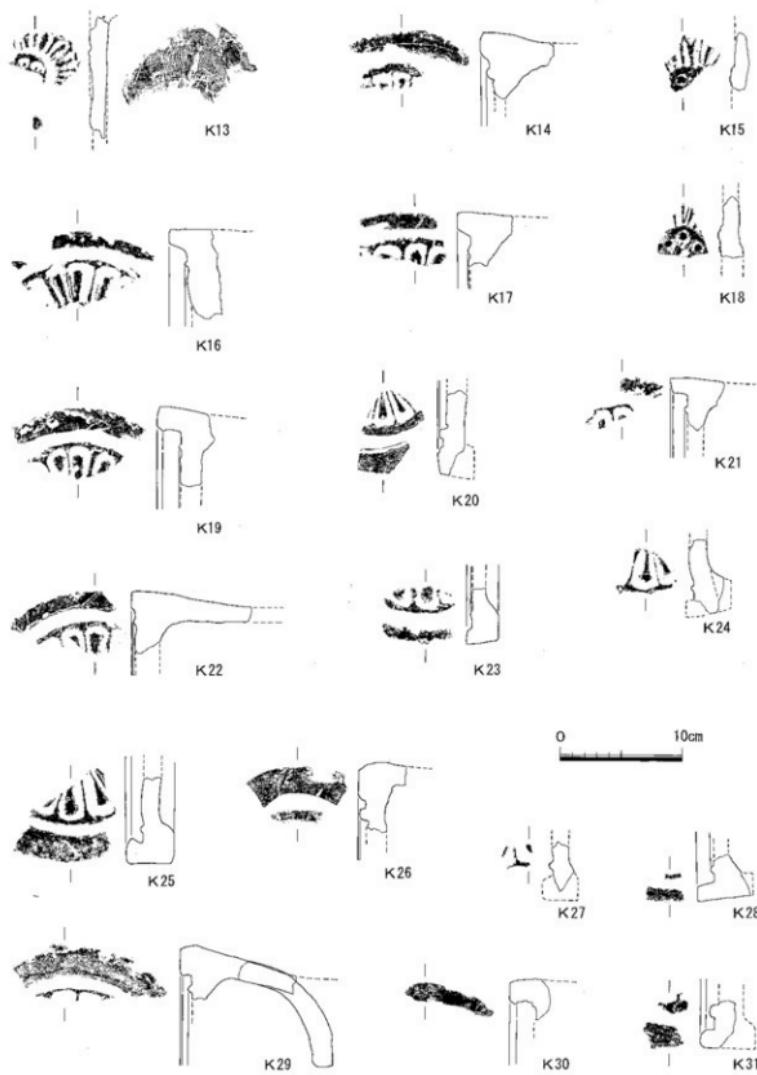


図87 包含層(E区)出土遺物(10)

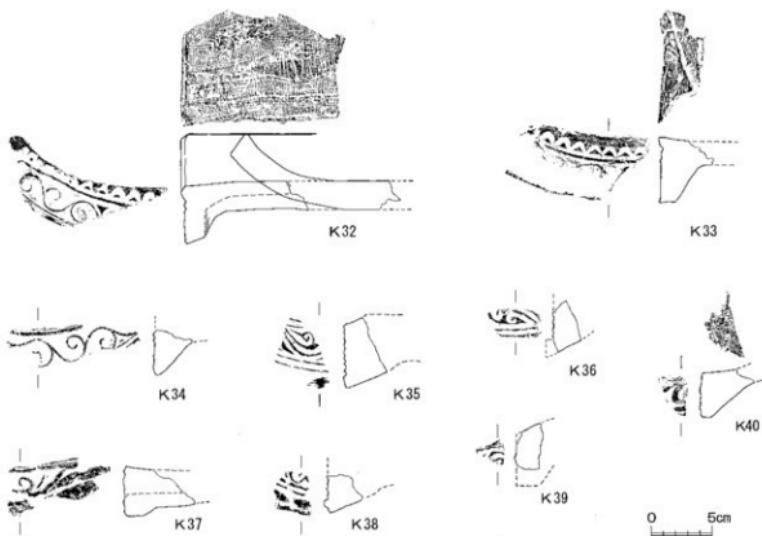


図88 包含層(E区)出土遺物(11)

げたが、中世まで降る可能性もある。茶褐色の色調で大粒の砂粒が多く含まれる。

ガラス玉 (図83—G 1)

溝14の北側で出土した。濃いブルーの色調を呈する。表面は風化が目立つ。径0.8cm、厚さ0.6cm、中央に径0.1cmの穿孔がある。

軒瓦 (図86、87、88)

各調査区から平瓦に混じって軒瓦が出土している。A区～D区からも比較的出土しており、敷地全体に瓦が分布するといえる。とくにC・D区出土の瓦については、ハガ遺跡の外周をめぐると推測される築地堀に関係するものである可能性が高い。

A区から出土したのは、軒丸瓦 (K 7～K 9) と軒平瓦 (K 6) である。このほかA区には中世の塙状遺構があり、その上面に葺かれた疊に混じて軒瓦が出土している。

B区から出土したのは軒平瓦 (K 4・K 5・K 10～K 12) で、軒丸瓦は出土しなかった。

C区から出土したのは軒丸瓦 (K 1～K 3) で、(K 3) の文様のみが不鮮明であるが、いずれも同文である。

A区で出土した軒丸瓦は極めて小片であるが、この軒丸瓦と同文のものは全調査区出土の軒丸瓦のうちでは出土が最も多い。また軒平瓦については、B区で出土した (K 4・K 5・K 10) の軒平瓦の出土量が最も多い。

E区で出土した軒丸瓦は3種類ある。軒平瓦も3種類ある。ハガ遺跡出土の軒瓦の分類については第IV章で触れてみたい。

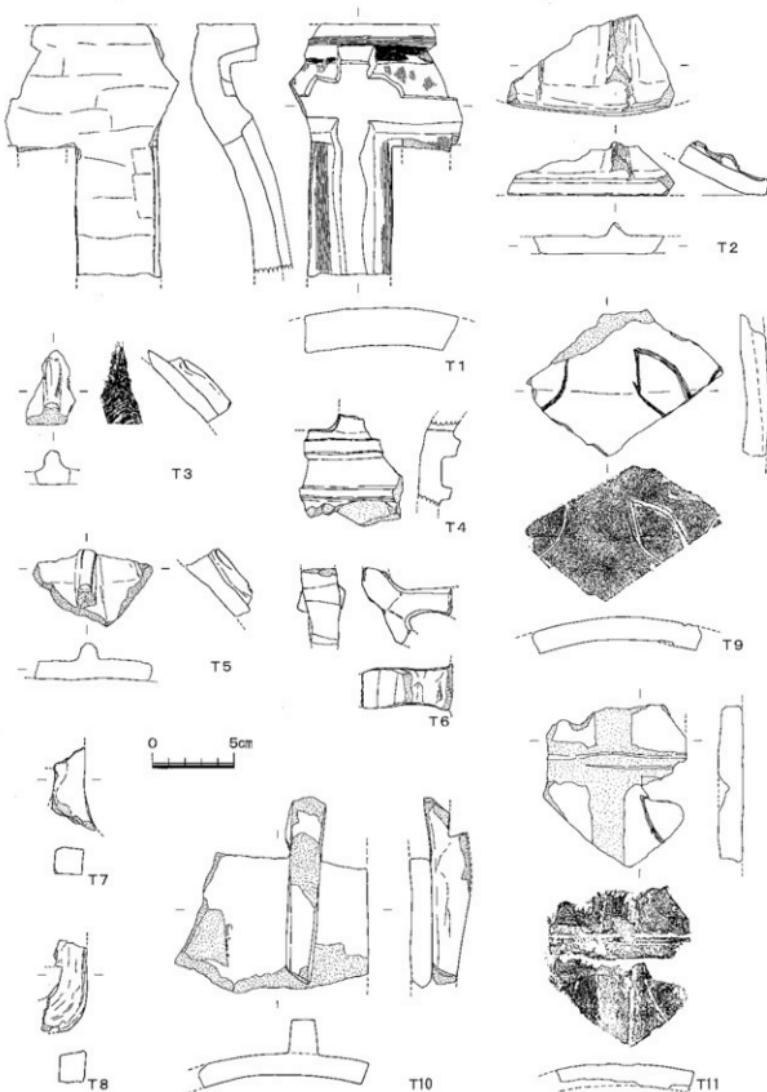


図89 包含層 出土遺物(12)  
(瓦塔)

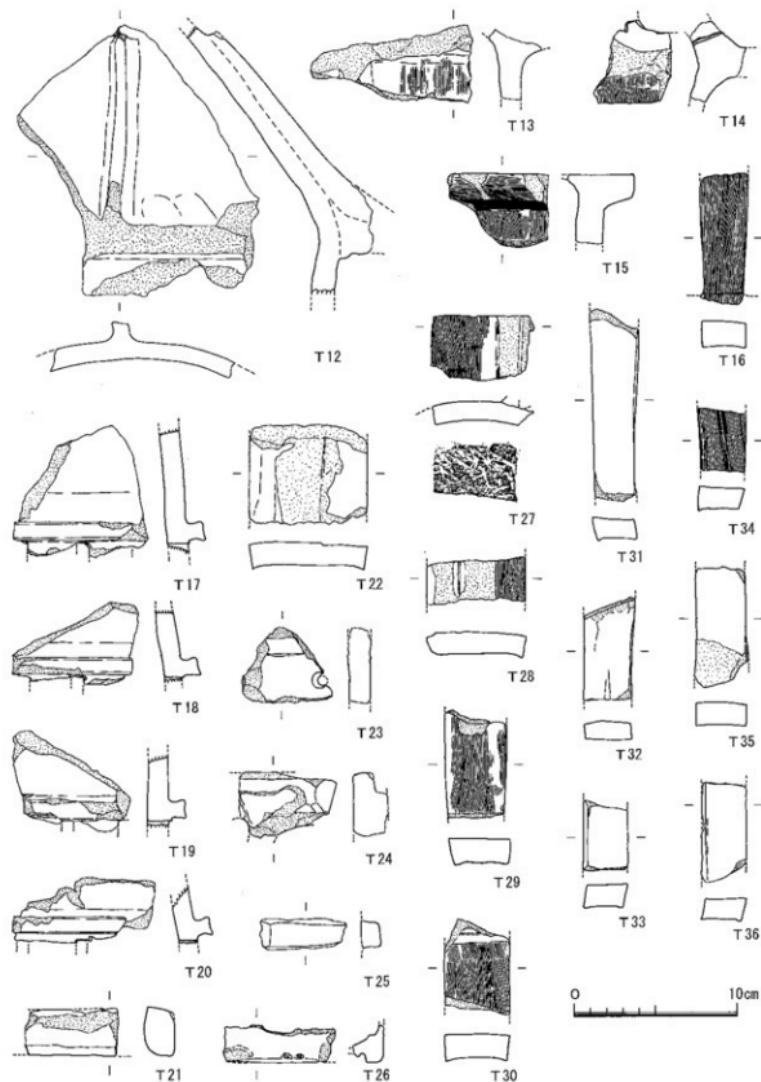


図90 包含層 出土遺物(13)  
(瓦塔)

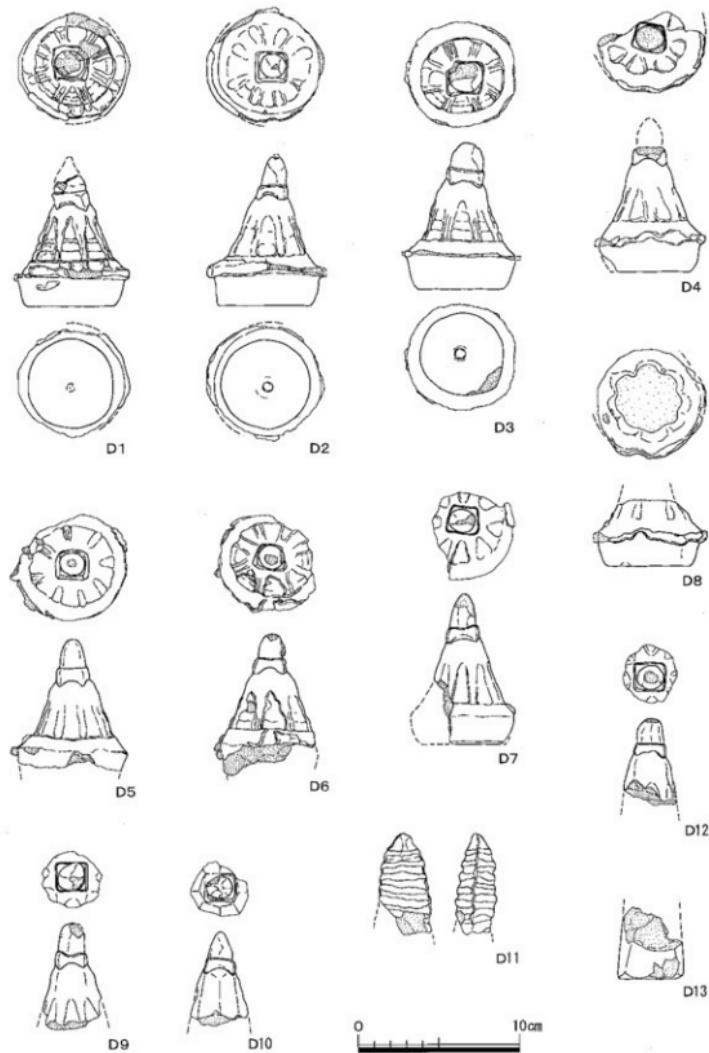


図91 包含層 出土遺物(14)  
(泥塔)

## 瓦塔（図89、90）

全てE区から出土した。そのうち遺構から出土したのは（T18・T19・T32）で、溝12から出土した。溝12はII期の内郭溝南限溝である。いずれも破片であり、全形をうかがえたりするものはないが、（T2・T3・T5・T13）のように屋根部分と考えられる破片や、（T1）のように柱と組物を表現した破片もある。また相輪ではないかと思われるもの（T6・T7・T8）もある。ただ焼成と色調によって3種類に分けることが可能である。まず須恵質で灰褐色の色調を呈するのは（T1～T8）、瓦質のものは（T9～T11）、須恵質で灰白色の色調を呈するのは（T12～T36）である。溝12から出土したものは全て須恵質で灰白色的ものであり、焼成と色調の特徴が個体差、そして時期差を反映している可能性を示唆している。圓筒の特徴は大半がナデで、外面をハケで調整したものもある。内面に同心円タタキが認められるもの（T3・T28）もある。また瓦質のものだけであるが、花文を線刻したもの（T9・T11）もある。

## 泥塔（図91）

（D13）がIII期の内郭西側の溝である溝17から出土し、（D11）が同じくIII期の内郭東側の溝である溝19上層で出土した以外は、全て包含層と低位部における包含層の2次堆積土中から出土した。低位部における包含層の2次堆積土から出土したのは（D1～D3）である。このほかE区の中世の土器焼成窯やA区の溝1からも出土している。泥塔は全て土師質で、2つの型によって成形されている。ただし上下の型によって成形するもの（D1～D12）、左右の型によって成形するもの（D11・D13）に分けられる。前者は円錐形で周囲に同心円状に五輪塔を八個配する。なかには底部裏面中央に浅い小孔を彫っているものもある（D1～D3）。いずれも赤橙色の色調で、大半が2次的な被熱により表面が部分的に黒く変色している。後者は完形のものがないため、全形は不明だが、おそらく宝塔形になるものと思われる。断面形も相輪が紡錘形である以外は方形である。色調は橙灰白色である。

## 金属製品（図84、85）

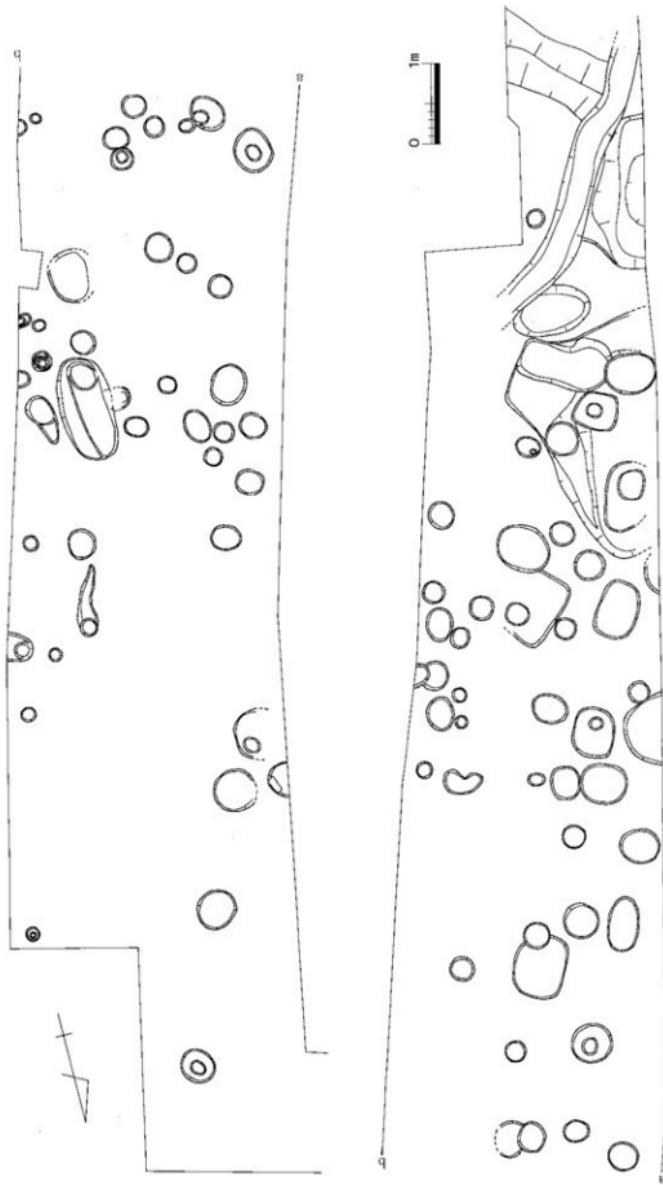
鉄釘（M1）と銅製品（M2・M3）がある。鉄釘は断面が $0.9 \times 1.1\text{cm}$ の方形で残存長は8.2cmである。

銅製品は極めて小片であるが、（M2）の表面に文様が認められ、何らかの製品の断片と考えられる。（M3）は銅鏡などの破片である可能性が高いが、小片であるため明確でない。銅製品は溝13検出中に出土したもので、溝13の最終埋土に帰属する可能性がある。

## II 古代2（7世紀）

宮衙である古代Iの遺構面以前には、7世紀の遺構面が形成されていた。ただし、遺物の出土量が少ないとことや、古代I遺構面の内郭の範囲、すなわち最も微高地が高い範囲でしか柱穴が検出されないことから、集落の中心部ではないようである。墓があることから調査区北側に広がる集落の南端である可能性が高い。柱穴は小規模なものが多く建物が認められないことから、明確な規則性を追求することは困難であるが、いくつか並ぶ柱穴列の方向性を見ると、調査区中央を北西から南東方向に横切る溝22の方向に合わせる傾向が看取される。極めて巨視的ではあるが、検出された溝1も溝22の方向に直交ないし平行に見える。集落端部であるため不規則な小規模ピットが目に付くものの、集落全体はある程度規則的な方向に規定されていることも推測される。以下調査区ごとに概要を説明する。

図92 A区古代2遺構 実測図



## (1) A区 (図92)

A区北半の微高地最高部で柱穴や溝が検出された。柱穴は径0.2mほどの小さなものから径0.6mほどの大きなものまである。溝は検出面からの深さが0.1m弱である。遺物は須恵器や土師器の小片が出土しただけである。

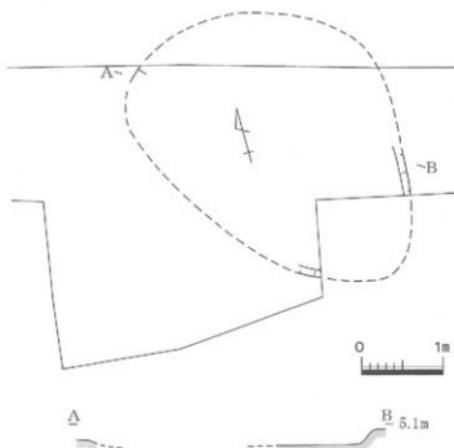


図93 P94 実測図

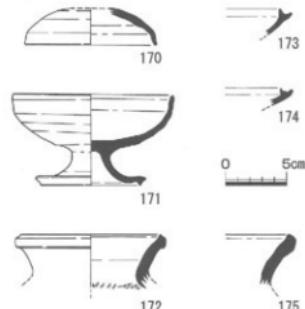


図94 P94 出土遺物

## (2) D区

## P94 (図93, 94)

D区拡張区で検出された土壤で、上面を溝13により削平されているため全形は不明であるが、一部残存している底面の形状などから、長径4.0m、短径2.7mほどの長楕円形の平面形を呈する土壤と推測される。遺構検出面は5.0m付近で、深さは検出面から0.2mである。

出土遺物は須恵器のみで、高杯(171)は完形である。

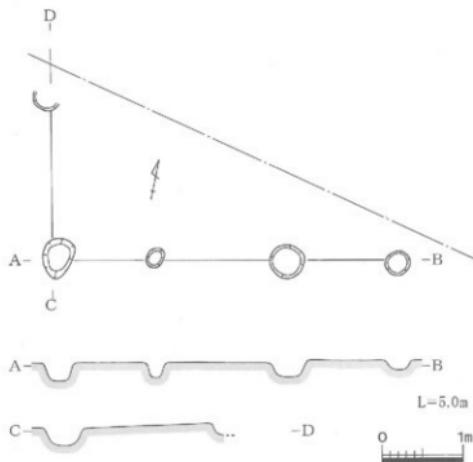


図95 柱穴列11 実測図

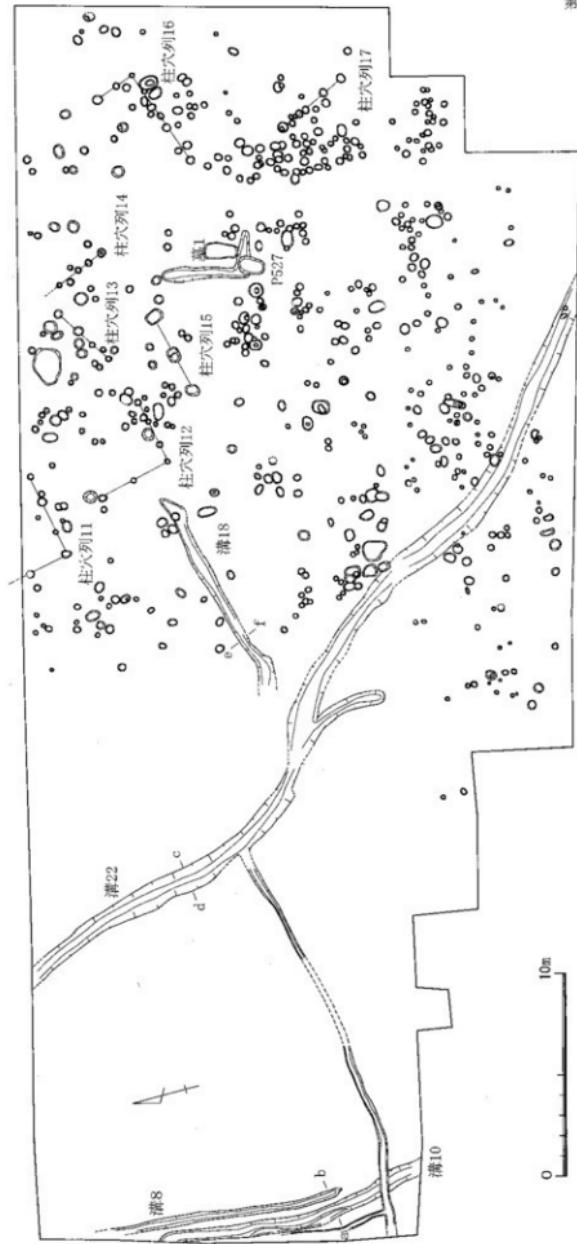


図96 E区古代2遺構面

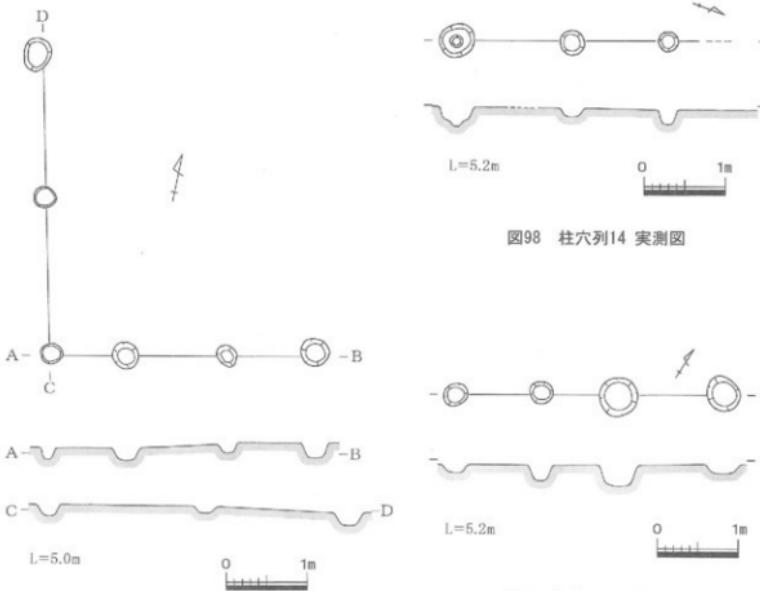


図97 柱穴列12 実測図

図98 柱穴列14 実測図

図99 柱穴列13 実測図

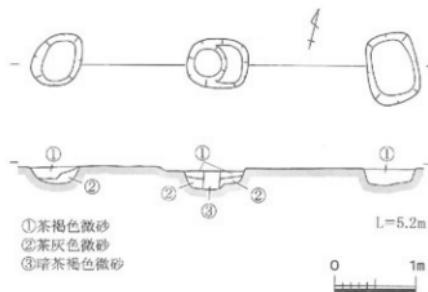


図100 柱穴列15 実測図

## (3) E区

## 柱穴列11(図95)

E区中央北側で検出された柱穴列で、建物の一部である可能性も考えたが、対応する柱穴はD区では検出されなかつた。また、同様のL字形に配列する柱穴列がほかにも認められることから、これも柱穴列である可能性が高い。柱穴の大きさは径0.2~0.4mで、遺構検出面は4.9m付近、深さは検出面から0.2mである。遺物は土師器の小片が出土した。

## 柱穴列12(図97)

柱穴列11の南側で検出された柱穴列で、L字形に配列されている。柱穴の大きさは径0.2~0.3mで、遺構検出面は4.9~5.0m付近、深さは検出面から0.1~0.2mである。

遺物は土師器と須恵器の小片が出土した。

## 柱穴列13(図99)

E区中央北側で検出された柱穴列で、4つの柱穴が並ぶ。柱穴の大きさは径0.2~0.5mで、遺構検出面は5.1m付近、深さは検出面から0.1~0.2mである。

遺物は土師器の小片が若干出土した。

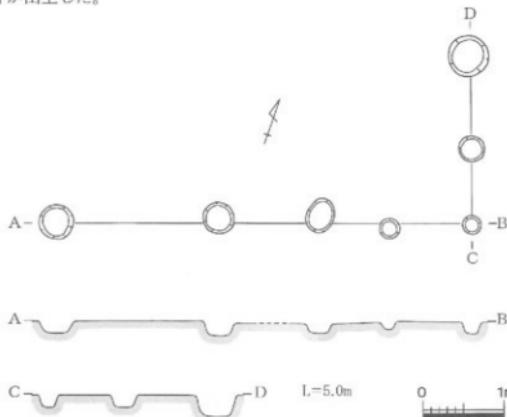


図101 柱穴列16 実測図

## 柱穴列14(図98)

E区東側の北寄りで検出された柱穴列で、3つの柱穴が並ぶ。柱穴の大きさは径0.2~0.4mで、遺構検出面は5.2m付近、深さは検出面から0.1~0.25mである。

遺物は須恵器の小片が出土した。

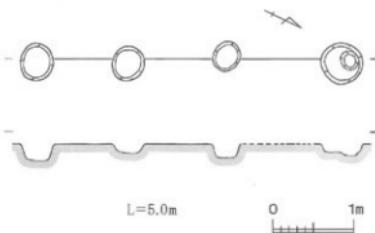


図102 柱穴列17 実測図

## 柱穴列15(図100)

E区中央北側で検出された柱穴列で、掘り方は方形の平面形を呈し、比較的大

きな柱穴で構成されている。掘り方の大きさは、一辺0.5~0.8mで、柱痕跡から柱の径は0.2mほどである。遺構検出面は5.2m付近、深さは検出面から0.2m前後である。

遺物は土師器の小片が出土した。

#### 柱穴列16 (図101)

E区東側で検出された柱穴列で、柱穴がL字形に配列されている。柱穴の大きさは径0.2~0.45mで、遺構検出面は5.0m付近、深さは検出面から0.1~0.2mである。

遺物は須恵器の小片が出土した。

#### 柱穴列17 (図102)

E区南東コーナー付近で検出された柱穴列で、4つの柱穴が並ぶ。柱穴の大きさは径0.3~0.4mで、遺構検出面は4.9m付近、深さは検出面から0.1~0.2mである。

遺物は土師器の小片が出土した。

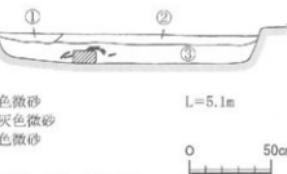
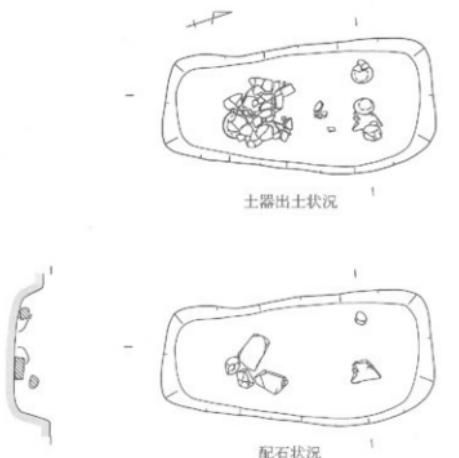


図103 墓1 実測図

#### 墓1 (図103、104)

調査区中央の東寄りで検出された土塚墓である。西側と南側には幅0.5m、深さ0.2mの溝がL字形にめぐり、墓に伴う周溝である可能性も想定されたが、溝からは遺物が全く出土せず、時期を決める手掛かりは得られなかった。しかし墓の長軸と溝の方向はほぼ同じであり、周溝の可能性は高い。なお、この溝

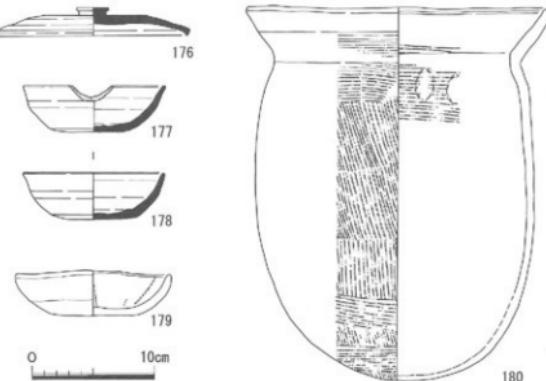


図104 墓1 出土遺物

は古代1遺構面のI期内郭溝により西側の一部を削平されていることから、古代I遺構面よりも古いといえる。墓の掘り方は長さ1.6m、幅0.8mの長方形で、北側の方が若干広がる。底部に6つの角礫を配し、北側の2つ並んだ角礫の内側には須恵器の杯身(177)と土師器椀(179)を置いている。おそらく枕にしたものと考えられ、掘り方も北側が広くなっていることから、北枕で埋葬されたと推測される。南側の配石上には土師器壺と須恵器杯蓋がそれぞれ一個体出土しており、副葬されたものと考えられる。人骨等が残存していないため明確なことは不明であるが、配石や出土土器の状況から北頭位で埋葬され、足の付近に配石があることから、上向きに曲げられていた可能性が高い。そして腹部あたりに甕が置かれ、いわば甕を抱きかかえるように埋葬されていたことが推測される。

遺物は須恵器杯蓋(176)、須恵器杯身(177・178)、土師器椀(179)、土師器甕(180)で、須恵器杯身(177)は配石に固定するために一部を打ち欠いている。時期は7世紀末～8世紀初頭で、古代2遺構面の下限の時期を示している。

#### P527 (図105)

墓1の周溝と推測される溝を一部削平している。長径1.3m、短径0.82mの長楕円形の平面形を呈する土壌である。検出面付近で角礫が出土したことからも墓の可能性が高いと思われたが、人骨等は検出されなかった。断面形は逆台形で、底部は平坦である。遺構検出面は5.0m付近で、深さは検出面から0.2mである。南端から角礫2個が出土したが、いずれも底面から浮いており、墓1のような配石とは異なる。

遺物は須恵器の小片が出土したのみである。

#### 溝22 (図106、107)

E区中央付近の北西から南東にかけて検出された。若干蛇行気味ながらも、巨視的には調査区を斜めに直線的に横切る溝である。幅1.2m前後で、断面形は逆台形を呈する。部分的には支水路がのびており、それらは直交するようにも見える。別の溝としてとらえたが、溝8も溝22の支水路である可能性が高い。遺構検出面は4.8～4.5mで、おそらく微高地最高部との傾斜変換点を流れていたと推測される。深さは南半が若干浅くなる傾向があるが、検出面から0.5m前後である。埋土は4層確認され、遺物は①層からのみ出土した。

出土した遺物は土師器と須恵器である。  
7世紀前半の時期が大半で、若干7世紀後半のものが含まれる。

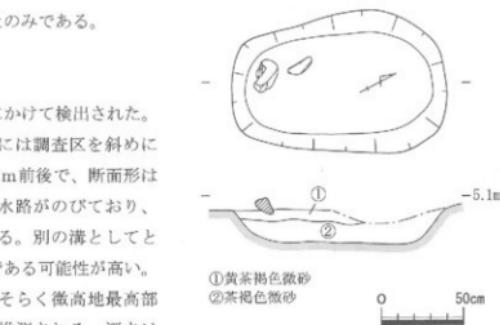


図105 P527 実測図



図106 古代2遺構面溝 断面図

溝8・10(図106)

E区西端で、南北方向に検出された溝である。溝8と溝10は微妙に重複していないことから、同時に存在であった可能性がある。いずれも幅0.2m前後であるが、溝10の方が部分的に広がっているため、幅が0.4mの部分もある。溝8は南側で途切れているが、溝10は調査区外へも続く。溝22の支水路に溝10は削平されていることから、溝22より先行すると思われる。溝8の深さは検出面から5cmほどと浅く、溝10はある。両溝とも遺物は土師器の小片が若干出土しただけである。

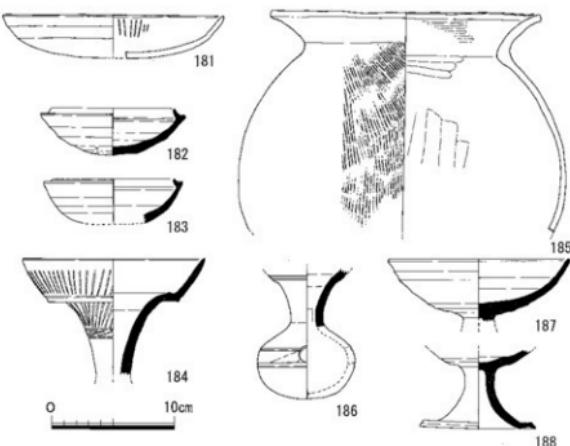


図106 溝8・10

III 中世(図109)

中世の遺構は柱穴と溝で、柱穴については壁や柱穴列になるものもあるが、まちまちの方向をしており、柱穴の大きさも小さいものばかりである。ただ溝については正方位に近い。これは調査区周辺の現況の水田地割も同様であることから、古代の遺構の区画が中世以降の水田開発の方向性を規定していたという可能性が高い。したがって

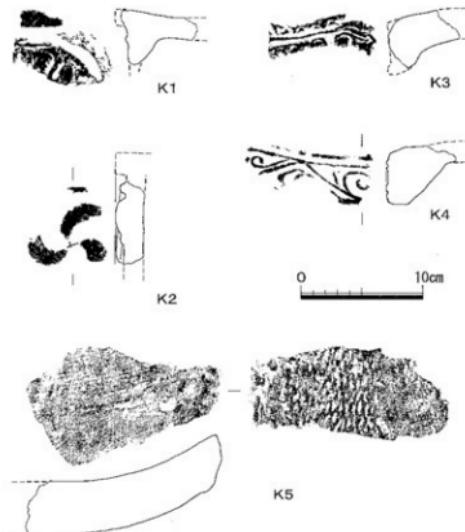


図109 中世遺構

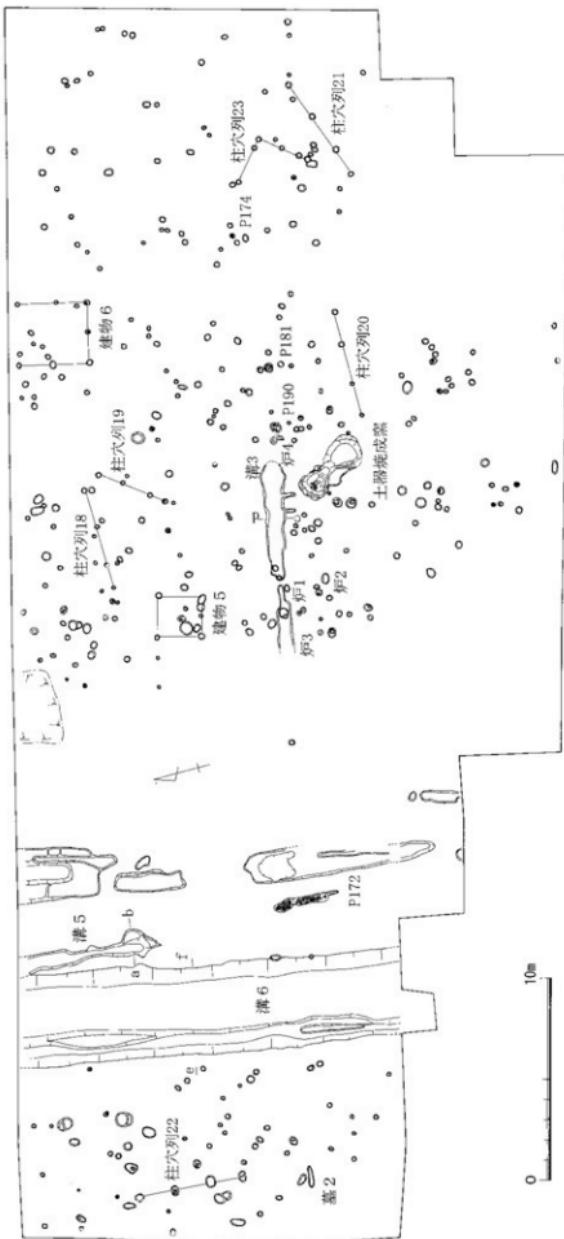


図109 E区中世 遺構面

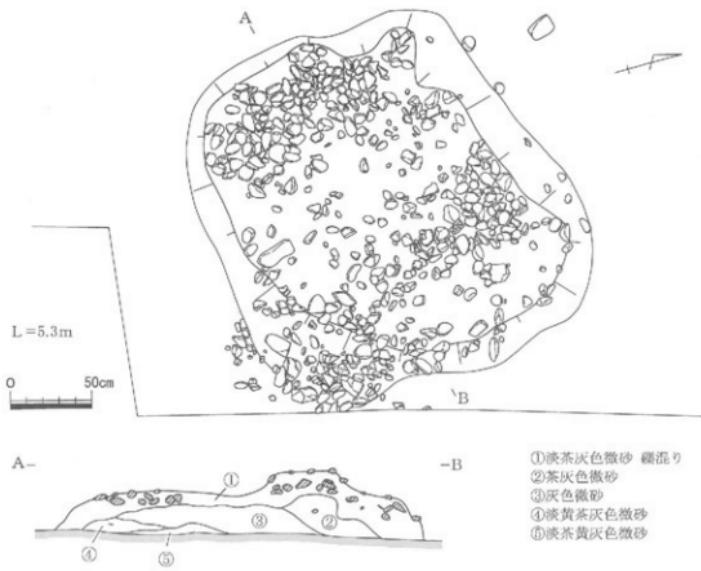


図110 塚状遺構 実測図

中世におけるハガ遺跡は一般的な集落であったと思われる。ただ集落に一角、おそらく集落の南端に相当すると思われる地点で土器師焼成窯が1基検出された。当時の窯業生産の一端がうかがえる資料である。以下、調査区ごとに概要を説明する。

## (1) A区

塚状遺構 (図108、110、111)

A区拡張区南端で検出された塚状遺構で、現況の水田地割では3つの水田の交点となる畦畔部分と重なる位置にある。また、現水田耕土直下で塚状遺構の上面が検出されたことから、この遺構が水田の境であった可能性が高い。規模は一辺約2.0mの方形で、現在高での高さ0.4mの土盛りをおこ



図111 P71と塚状遺構

ない、表面に円礫を葺いている。円礫は最終盛土である①層中にも含まれており、最終盛土の中に埋め込まれたものと考えられる。円礫の中には瓦片や土器も混じっている。ただし②～⑤層中からは土器の小片が出土したのみで、遺物はほとんど含まれていなかった。時期については塚状遺構の下面で検出されたP71との関係から、16世紀以降と考えられる。この地は戦国時代末期におこった激戦の1つである「明禅寺崩れ」の戦死者を弔った首塚が隨所にみられたといわれ、今回検出した塚状遺構もそのひとつに相当する可能性がある。

図化できた遺物は5点で、軒丸瓦（K1・K2）2点、軒平瓦（K3・K4）、平瓦（K5）1点である。巴文の軒丸瓦（K2）は須恵質で焼成が良好なもので、今回の調査で出土した軒丸瓦のなか

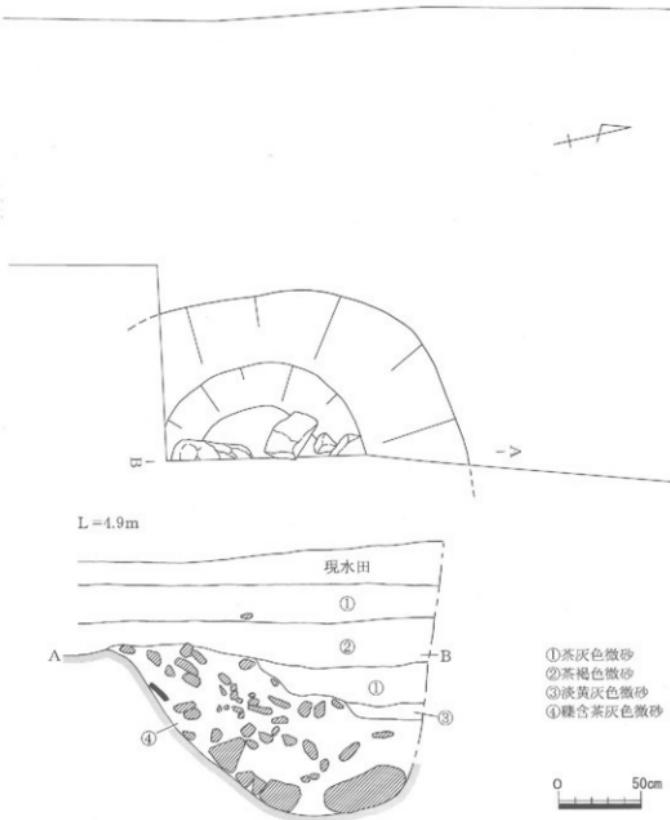


図112 P71 実測図

では最も時期が遡るものである。ただしあれも塚状遺構の時期よりも古い。

P71 (図111、112、113)

塚状遺構の下面で検出された土壌である。塚状遺構との位置関係はややP71が南東側へずれるもの（図111）、塚状遺構の

葺石が一部P71の埋土へ含まれていることから、P71が掘られ、埋められた直後に塚状遺構が築かれたと推測される。遺構の半分以上は調査区外へでるため、全形は不明であるが、直径2.0m以上の円形または楕円形の土壌である可能性が高い。断面形は台形であるが底は平らではない。埋土には多量の礫が含まれており、人為的に埋められたといえる。遺構検出面は4.9m付近で、最深部の深さは検出面から1.0mである。

出土した遺物は、軒瓦（K1・K2・K3）、土師器鍋の小片、備前焼である。備前焼は間壁編年IV期～V期<sup>(9)</sup>のものであり、当遺構の時期は16世紀以降といえる。

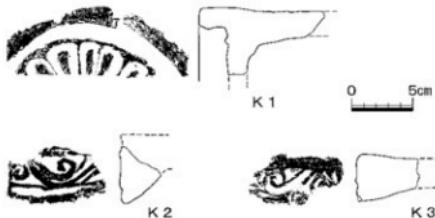


図113 P71 出土遺物

溝1 (図114、115、116、117、118)

A区南端で検出された溝で、幅19.4mもある。ただ、この溝に対応する幅の溝がほかの調査区から検出されていないことから、同じ幅のまま西へ流れていたことは考えられない。またC区からは明瞭な溝も検出されていないことから、直線的に西側へ続くようではないようである。可能性としてはA区やE区で検出された溝6に対応するとと思われる。ただし溝6は幅が5m前後と規模的にはかなり小さい。A区の溝1は、池状の遺構であるか、もしくは一部が広がっている溝であった可能性が高い。現況の水田地割を見ると、A区の溝1に対応する東側の水田は周囲の水田よりも若干低く、それらの水田の分布を平面的に見ると、調査区東側にあるかなり幅の広い旧流路からの支水路状にも見える。対応すると思われる溝6が直線的であることからも、旧流路から人為的に掘削された溝である可能性も高い。

遺構検出面は4.6m、最深部の深さは遺構検出面から1.1mである。断面形は台形で、底は平坦である。最終埋土（⑥・⑦層）は砂層で、遺物は含まれていなかった。遺物の出土が集中的であったのは⑨層である。⑨層以下からは土師質土器の小片が若干出土したのみであった。時期は12世紀後半から13世紀のものが大半である。

出土した遺物は土師質土器（189～194）、土師質土器皿（199～204・206～210）、須恵質土器（195・213）、瓦器（196～198）、白磁（211）、青磁（212）、内面黒色土器（205）、軒瓦（K1）、丸瓦（K2・K3）、平瓦（K4～K7）、泥塔（D1～D4）、木製擬宝珠（Z1）などである。瓦器碗は和泉型で、尾上編年III-1期<sup>(10)</sup>のものである。木製擬宝珠は中央から半裁されている。表面には荒い加工痕が明瞭であり、仕上げのミガキ等は認められない。下部には柄をつくり出しているが底面と直交せずや曲がっている。未製品であるのか、それともこの上から擬宝珠飾りなどで覆うのか

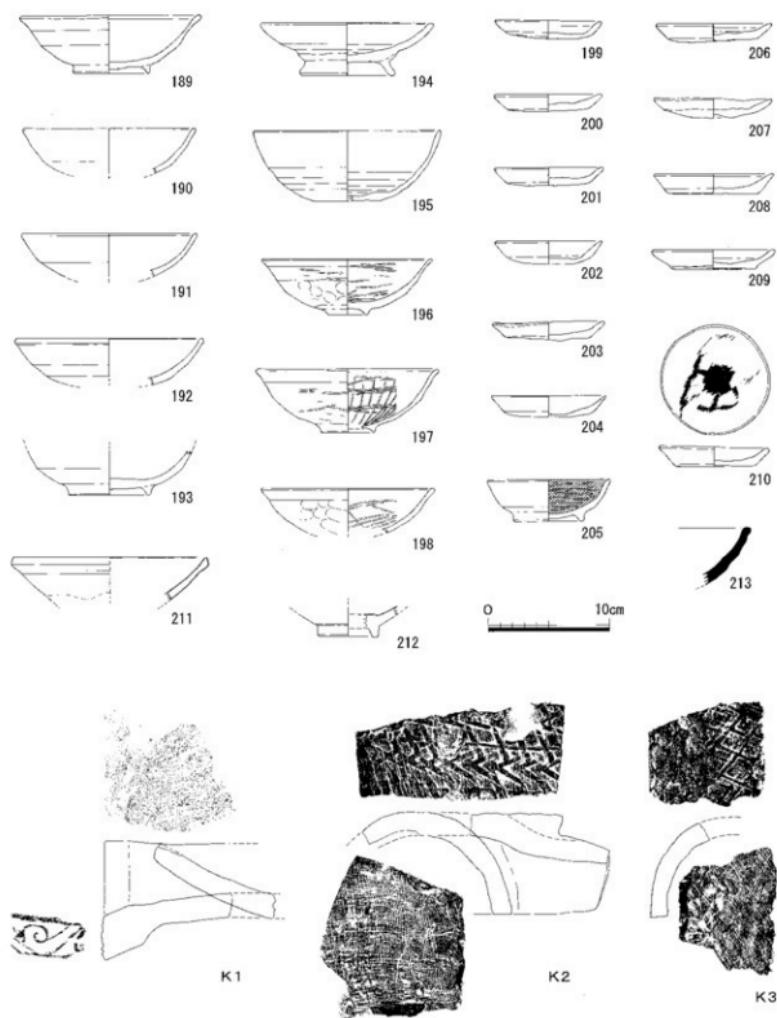


図114 溝1 出土遺物(1)

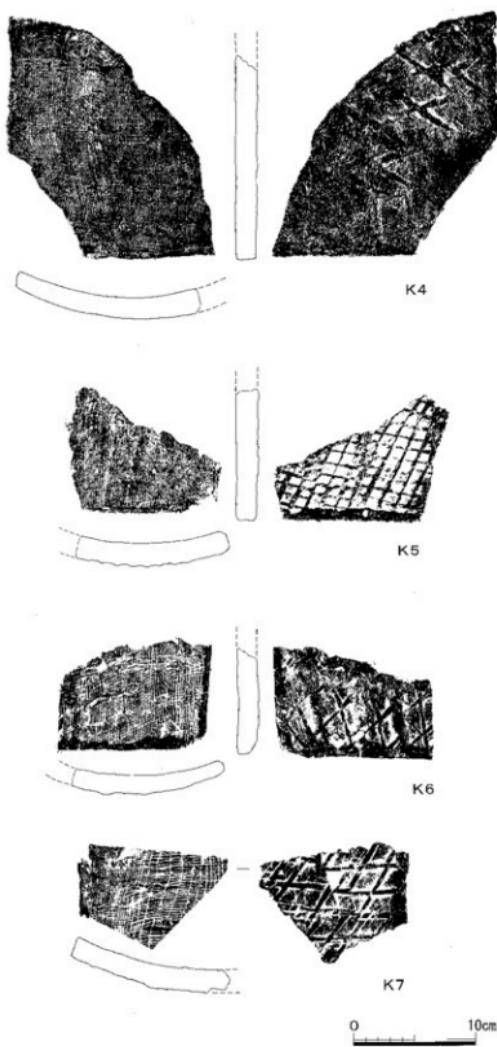


図115 溝1 出土遺物(2)

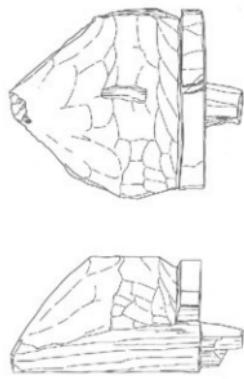


図117 溝1 出土遺物(4)

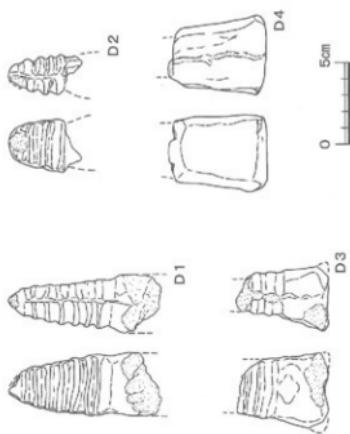


図116 溝1 出土遺物(3)

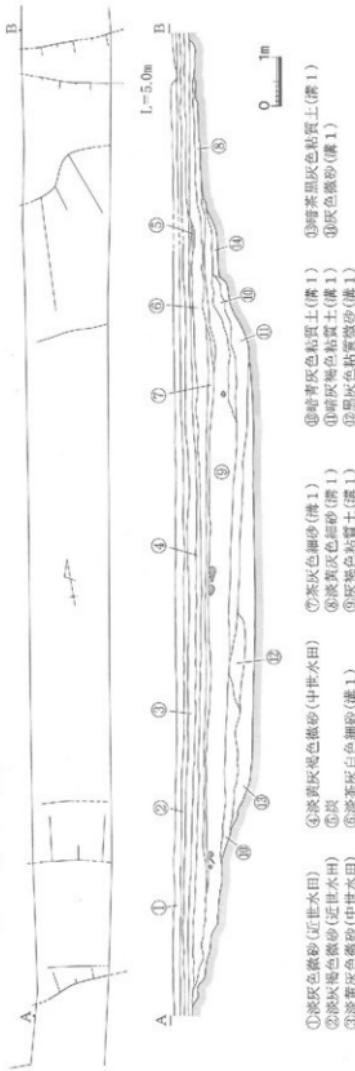


図118 溝1 規測図

は不明である。丸瓦、平瓦はともに凸面のタタキは菱形である。泥塔は4個体あり、D1とD3からほぼ全形を知ることができる。E区で出土した円錐形の泥塔は出土していない。

## (2) E区

## 建物5 (図119)

E区中央で検出された建物で、桁行1間、梁行1間の柱構成で、棟方向はN-6°-Eを示す。遺構検出面は5.2m付近で、最も深い柱穴の底レベルは5.05mである。柱穴の平面形は円形で、径0.3~0.5mである。柱間距離は桁間で2.15m、梁間で1.92mを測る。床面積は4.128m<sup>2</sup>である。

遺物は柱穴埋土から土師質土器片が若干出土した。

## 建物6 (図120)

E区中央北側で検出された建物で、桁行2間以上、梁間2間の柱構成で、棟方向はN-4°-Eを示す。遺構検出面は5.2m付近で、最も深い底レベルは5.1mである。柱穴の平面形は円形で、径0.2~0.4mである。柱間距離は桁行で3.5m以上、梁間で2.9mを測る。柱痕跡のある柱穴から、柱の大きさは径0.1mといえる。

遺物は柱穴埋土から土師質土器が若干出土した。

## 柱穴列18 (図121)

E区中央北側で検出した柱穴列である。遺構検出面は5.2m付近で、柱穴の平面形は円形で、径0.2m前後である。柱間距離は西から1.1m、1.9m、2.0mである。最も深い柱穴の底レベルは5.0mである。

柱穴埋土から微細な土師質土器片が出土した。

## 柱穴列19 (図122)

柱穴列18の南側で検出した柱穴列である。遺構検出面は5.2m付近で、柱穴の平面形は円形、径0.2m前後である。柱間距離は西から0.8m、1.5m、1.2mである。最も深い柱穴の底レベルは5.0mである。柱痕跡のある柱穴から柱の径は0.1mといえる。

柱穴埋土から微細な土師質土器片が出土した。

## 柱穴列20 (図123)

E区中央で検出した柱穴列である。遺構検出面は5.2m付近で、柱穴の平面形は円形、径0.2~0.3

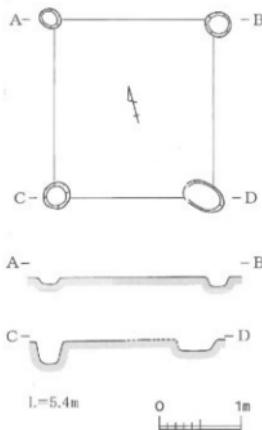


図119 建物5 実測図

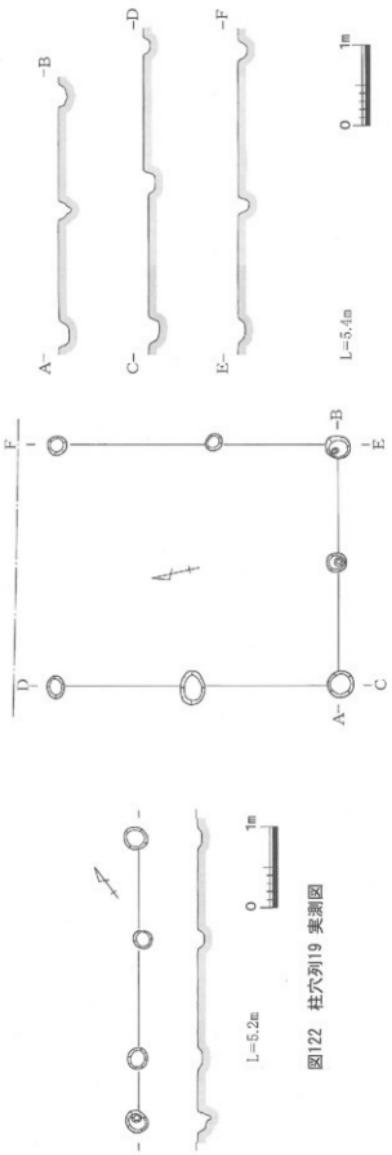


図122 柱穴列19 実測図

図120 造物6 実測図

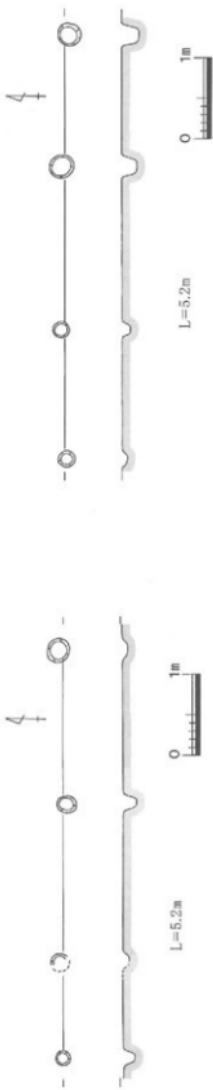


図121 柱穴列18 実測図

図123 柱穴列20 実測図

mである。柱間距離は西から1.6m、2.0m、1.6mである。最も深い柱穴の底レベルは5.0mである。柱穴の埋土から微細な土師質土器片が出土した。

## 柱穴列21（図124）

E区東端で検出した柱穴列である。遺構検出面は5.2m付近で、柱穴の平面形は円形、径0.3m前後である。柱間距離は西から1.4m、2.0m、2.0mである。最も深い柱穴の底レベルは5.0mである。柱穴の埋土から微細な土師質土器片が出土した。

## 柱穴列22（図125）

E区西端で検出した柱穴列である。遺構検出面は4.8m付近で、柱穴の平面形は円形、もしくは一部隅丸方形である。古代の遺構である可能性も考えたが、埋土から中世土器と考えられる、土器片が出土したため中世の遺構とした。柱穴の平面形は円形、径0.3～0.4mで、柱痕跡のある柱穴から柱の径は0.1mといえる。柱間距離は北から1.8m、1.75m、1.6mである。方向的には溝6とほぼ平行といえる。

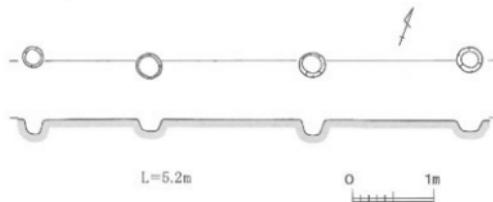


図124 柱穴列21 実測図

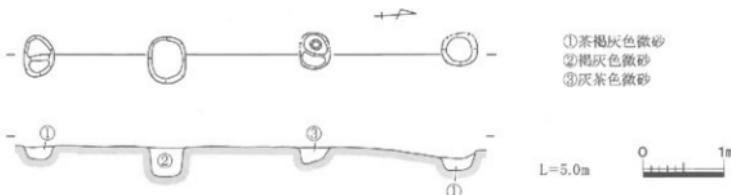


図125 柱穴列22 実測図

## 柱穴列23 (図126)

E区東端で検出された柱穴列で、L字形の平面形になることから建物の可能性を考えたが、明確でないため柱穴列とした。柱穴列19とほぼ平行の関係になる。遺構検出面は5.2m付近で、柱穴の平面形は円形、径0.3m前後である。柱間距離は東西が2.3m、南北が北から1.2m、1.4mである。

遺物は柱穴埋土から微細な土師質土器片が若干出土した。

## P172 (図127)

E区西半で検出された土壤で、幅0.4~0.5m、長さ3.3mの長楕円形の平面形を呈する。遺構検出面は4.8m付近で、最深部の深さは0.2mである。断面形をみるとかなり凹凸があり、複数の土壤が連結したように見える。埋土は円錐であり、若干平瓦片と土器片が混じる。

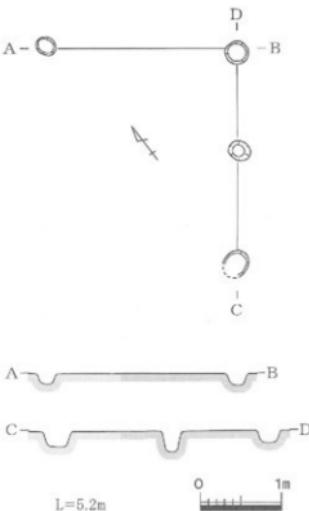


図126 柱穴列23 実測図

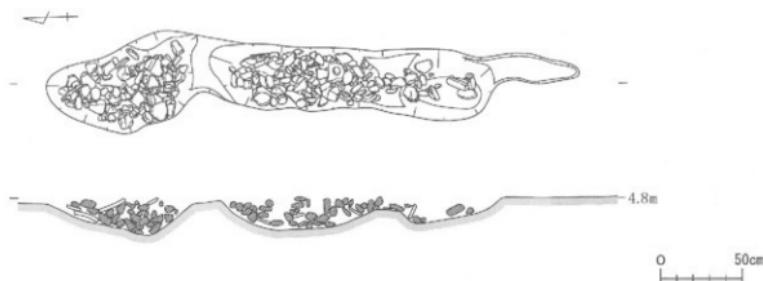


図127 P172 実測図

## P174 (図128、129)

E区東端で検出された土壤で径0.22mの円形の平面形を呈する。遺構検出面は5.2m付近で、最深部の深さは8cmである。断面形は台形であるが傾斜は緩く、全体的に崖み状の様相を呈する。中央には角礫を置き、その上に土師質土器皿を8枚重ねてあった。土器の出土状況からも地鎮や宅鎮などの遺構である可能性が推測される。時期は12世紀後半である。

## P181 (図130)

E区中央付近で検出された径0.4mの円形の平面形を呈する土壤である。遺構検出面は5.2m付近で、

最深部の深さは検出面から0.12mである。断面形は台形であるが、底面には若干凹凸が認められる。遺構中央には角礫を9個入れてあった。

出土遺物は土師質土器の小片が若干出土した。

P190 (図131)

E区中央付近で検出された長径0.5m、短径0.45mの楕円形の平面形を呈する土壙である。遺構検出面は5.2m付近で、最深部の深さは検出面から0.18mである。断面形は台形である。遺構中央には角礫と円礫があり、積み上げた状況で出土した。

出土遺物は土師質土器の小片が出土した。

墓2 (図132)

E区西端で検出された土壙墓である。長さ1.0m、幅0.25mの長楕円形の平面形を呈する。遺構検出面は4.8m付近で、最深部の深さは検出面から5cmである。西側にいくにつれて深くなっている。遺構西側に頭骨の一部が残存していたことから埋葬頭位は西側といえる。遺物は全く出土しなかったが、埋土が中世のビットとよく似ていることなどから、中世の土壙墓と考えられる。

炉1・2 (図133)

E区中央付近で検出された炉で、2基並んで検出された。炉1は径0.2mの円形の土壙の内側に粘土を貼っており、炉2は径0.1mの円形の土壙内側に粘土を貼っている。遺構検出面は5.3m付近である。いずれも粘土は硬く焼けており、周囲も被熱によって赤化していることから、鍛冶炉である可能性が高い。遺物は①層から土師質土器の小片が出土した。

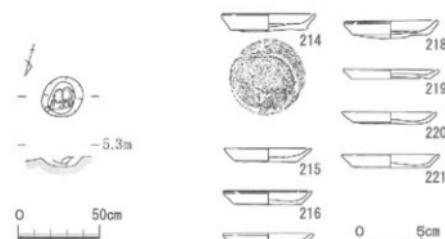


図128 P174 実測図

図129 P174 出土遺物

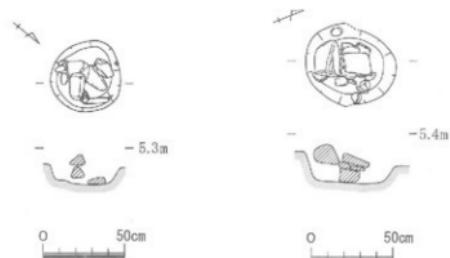


図130 P181 実測図

図131 P190 実測図

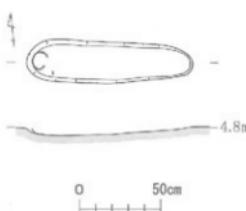


図132 墓2 実測図

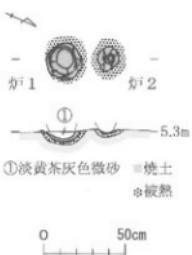


図133 炉1・2 実測図

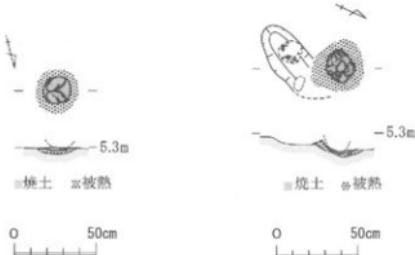


図134 炉3 実測図

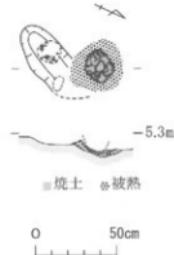


図135 炉4 実測図

## 炉3 (図134)

E区中央付近で検出された炉で径0.15mの範囲に焼土化した粘土が広がり、周囲は被熱により赤化している。上面は削平されているが、炉1・2のような構造であったと思われる。遺構検出面は5.3m付近である。

## 炉4 (図135)

E区中央やや東寄りで検出された炉で、径0.12mの円形の土壤の内側に粘土を貼っており、周囲は被熱により赤化している。遺構検出面は5.3m付近である。南側に長さ0.5m、幅0.2mの長方形の土壤があり、埋土には炭が多量に含まれていた。深さも検出面から2cmほどと浅いことから、炉4に伴う遺構である可能性が高い。

## 土器焼成窯 (図136、137、138)

E区中央付近で検出された土器焼成窯である。周囲からは炉がまとめて検出されており、それらの時期とそれほど差がないとすると、調査区周辺は集落の一角の手工業生産の場であった可能性が高い。ただしこの場を画するような柱穴列や、建物は検出されておらず、その具体的な範囲などは不明である。また土器焼成窯も1基だけの単独であることから、厳然とした継続的な空間でなく、集落の一端を間借りしたといったイメージが強いように思われる。遺構の全長は1.95mで、遺構検出面は5.3m前後である。窯は焼成部、焚口、焚口背後の作業場によって構成されている。焼成部は長さ1.2m、幅0.4mの隅丸方形の平面形で、床面は焚口部に向かって5°ほどの傾斜がある。床面中央には奥壁部から幅0.2m前後、長さ0.4m。高さ5cmに円礎を積んだ分焰柱がある。焚口は長さ0.8m、幅0.6mの長方形の平面形で、焼成部中央につくられている。焼成部との境付近には長さ0.3mもある角礎が埋め込まれており、上部から落下したと思われる角礎や平瓦片も出土したことから、アーチ状の屋根があったと思われる。焚口の床面は焼成部の床面よりも8cmほども低くなっている。床面は被熱により赤化している。焚口背後の作業場は長径1.6m、短径1.4mの梢円形で、壁面の断面形は傾斜の緩いU字形である。床面の高さも焚口床面の高さより0.18mほど高くなっている。床面は基本的に平坦であるが、西側に若干の段差も認められる。

土器焼成窯の構築順序は断面土層の観察から、まず焼成部から焚口背後の作業場までを連続的に掘